女學雜誌

明治三十二年十二月五日發兌



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第百九拾四號

目録

Digitized by Google

千代女



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭のつとめ

地球の面積には限ありて、人類の蕃殖は極りなからむとす。これを以て、世に立ち、名を成さんとするもの、自然、生存の爲めに、競爭せざるべからず。生存競爭に於いては、優勝劣敗の規則は免れ難し、男兒として、社會に起ち、生存競爭の街衢に、身を投じて、劣敗を避け、優勝を獲んとする、其の苦辛思ふべし。

古の諺に、男兒門を出つれば、七人の敵ありと心得よとは、蓋し、後世を欺かざるものか。曉天より、以つて黄昏に至るまで、男兒が遭逢する所のものは、總べてこれ、或意味に於ける敵なり。競爭者なり。男兒門を外にして、心に休安を得ざる、察するに足るものあり。あゝ、社會的生活を營み、常に、家を出でゝ、事に從ふの男兒、遂に其の勞を慰し、其の娯を樂ましむるもの無くば、何を以てか、克く、其

の事に堪へんや。

世間利を逐ふもの丶中に交りて、利のために尊敬せられ、利の爲に親まれ、利の爲に賤まれ、利のために疎ぜらる丶の間にありて、苦痛と煩悶とを嘗め盡し、殆んど、我が生活を續くるの勇を沮喪したる後、足一たび己が家に入り、眼一たび己が妻子を見るとき、身は、恰かも、別世界に處り、仙境に住まふの感なくんばあらず。天地萬物に、失望の影を認めたるものも、其の家庭には、其の妻子には、滿々たる希望の光を觀るを得。一日の疲勞は、この一瞬にして、頓に消え去り、更に、勇氣を加倍して、明日の業務に、從事し、劣敗者たらず、優勝者たるを得るにあらずや。

家庭は、かくて、人類社會元氣の發動所といふべく、妻子は、即ち、其の發動者たり。家庭の慰藉が、其の功を奏すべき所、其の觀は、一個人に止まるが如くにして、其の實は、關係の大なる事、此の如し。家庭に風波絶えず、妻子、常に相和せさることあらば、其の責、一家の不始末のみにあらずして、人類社會全体にわたるべし。

家庭に主たるもの、妻子たるもの、善く、其の家長、終日の辛苦を慰むる所以に勤

め、小は以て、一家の隆昌を期し、大は以て、人類全体の福祉を、增進することに勉むべし。これ唯り、家長給養の恩に報ゆるのみならず、又以て、社會に對する責務なり。



日本女子今後の覺悟（十）

三輪田眞佐子

凡そ、人事の、複雜に進むと丶もに、國民、相互の關係も、日時と、同じからずして、一層複雜となるべし。從ひて、その交際なるものは、果して如何にすべきか。將た、如何なる注意を要するかを知ること肝要とならん。故に、おのれは、茲に、日本女子今後の覺悟中に、交際の事項を加へてものせんこと左の如くなん。

或人曰ふやう、女子は、家政を主るをもつて、本務となすものなれば、などか交際を要せん。從ひて、交際につきては、多く言はずもがなと。實に女子は、位を、內に正すこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、天地自然の道理なれど、誰か、外事を勤めん。されど、人は地上に於いて、單に、一人のみ住むものにあらず。すなはち、内には老いたるものあり。小兒あり。あるは、良人あり。亦、親族も、共に居るべく、婢僕をも備ふなるべし。然るに、女子は、これらの人々とともに謀り、共に勤めざるべからず。なほ、外には、父母の知る人もあるべし。小兒の友も來るべし。わきて、良人は、世と繁き關係さへあるべし。故に、女子なりとて、苟も、一家に住みて、家族となり。一國に住みて、國民となる以上は、多少、人と關係せざるを得ず。この關係を交際と言ふなり。たとひ人は、深山の奥に隱遁せんも、一切世人との關係を絶つ能はざるべし。若し、その關係を絶たんか。食ふに食なく、着るに衣無く、病まんも醫なくして、遂に死する外なかるべし。

これを以て、女子たりとも、通例の生活をなす以上は、近くは、一家の同族と交り、近隣と交り、遠くは、門族の知人と交り、亦、一身の必要より、世と交るに至るべし。殊に社會の進歩して、交通頻繁となるのみならず、家運の榮え、位置の登るにつれ、その交際や複雜となるべけれど、苟も、文明の女子たるものは、交際につきての智識なかるべからず。

蓋し、交際は止むを得ざるより起るものにあらず。自ら求むるこそ、人の本性ならめ。彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の千鳥だに、飛びて友を求め、黄鳥すら、なきて、友を呼ぶとかや。況して、人は、生れながら社交的の神靈なれば、悲さも、友に話らずば、以て、慰むるに足らず。嬉さも、友に言はずば、以て、樂を增すことなし。故に、その天性に基きて、交際をし、社會の組織を親密にするは、自然の道なるべし。寧ろ、義務なるべし。おもふに、人事、いづれか、われらの獨力によるものあらん。即ち、衣服も、古人の智に習ひて作り、飲食も、往時の例に準じて調へ、智識も、先哲より傳へられ、道訓も、先賢より敎へらるゝなり。その他、萬般につきて、自ら、新に發明せり。亦、開祖なりと稱することも、その因るところを察し、この基くところを推せば、悉く、社會の賜なり。或は、世に改良と稱することあれども、既成のことなくば、改良も起らざるべし。然らば、人は、自ら思はざるとも、實は、社會より恩澤を蒙ること、決して淺からざるべし。されば、これに報ゆる義務なかるべきぞ。夫れ、これに報ゆる道、なし及ぶ限りの貢献を社會になすべきのみ。彼の世を棄て、人を惡み、つとめて社會と隔離して、徒らに、高尚と誇るものはいまだ、社會に對する報恩を悟らざるものならん。されば、心思を勞し、筋骨を苦しむるをも厭はずして、人事を營み、世業を行ひ、以て、社會を補益する人を尊ぶべきなり。世に老を言はずして、汲々たるものは、全く、この確信に由るなるべし。

然らば、單に娯樂のために、交際するものとなおもひそ。必竟、人生本來の性質と、社會生活の必要より、有益なる交際は起るべし。今、交際上より得らるゝ得分を述べん。

夫と妻　　九龍子

夫婦を以て、天地に比へ、日月にも較べて、いへることは、遠く支那に始まり、博く東洋の諸國に行はれ居れり。天は廣大にして空虚。能く、萬物を容れ、能く、一切を覆へり。地は圓滿にして重厚、能く、一切を載せ、能く、萬物を畜へり。日は、是れ和煦昱爍、晝これに依る。萬物外に生ひ長ちて、榮ゆること限りなし。月は、是清明貞節、夜これに依る。一切、内に收まり息ひて、靜けきさま類ひなし。以て、直ちに、夫を說くべく、又、妻をも語り得べきなり。

天といひ、日といへるは、乾の象にして、乾は剛健中正純粹精なるもの、知を以て、大生し、始終を明らかにし、統御を正しくし、保合和寧を致すなり。地といひ、月といへるは、坤の象にして、至柔至靜德方常なるもの、作を以て廣生し、乾に承け、主に順かひ、盛んに育成を、務めて、含蓄光化を極むるなり。されば易經の繫辭傳に曰へらく、「乾道成男坤道成女」。卦爻の變易に就いての言葉なれども、乾の夫に對し、坤の妻に對して、

相應するところ、眞にかくの如きを見る。夫たる者と妻たる者との必すべき事、目的となすべき處、履み行ふべき道、自から異なるものあること、以て容易く知りうべきにあらずや。實際、これを生理上より見るも、心理上より考ふるも、はたまた、小にしては家族、大にしては社會における、整頓進化に向つても、必らずや適當の分業なかるべからざることは、喃喃するまでもなく、明白なりと信ず。即ち五倫の中に、夫婦別ありと云へるは、げに理あるものなるかな。

然れども、支那はさてをき、我が邦にては、元來女子は、雄けく優れゐて、いとやんごとなき上つ方にては、遠くも遠き神代に、夙に天照皇大神の御聖德に渡らせられたるあり。さては、神功皇后の三韓御征伐を始め、推古天皇、皇極齊明天皇、持統天皇、元明天皇、元正天皇、孝謙稱德天皇、明正天皇、御櫻町天皇は、皆是れ女子にまし〳〵たる御方なりき。文章家にも、紫、伊勢、和泉などあり、强勇者としては、板額、巴御前なんど、高名をさ〳〵男子に讓らざる者さへあり。節操ある者には、靜、袈裟の類ひ、夥しきこと、數へられぬほどなり。去かしながら、夫唱婦和、夫妻相駢びて、相共に賢良善美なる者に至りては、吾未だ、前者等に拮抗すべく顯赫なる者なきことを惜しまずんばあるべからず。唯上古におゐて、伊弉諾尊、伊弉冊尊と併べ稱へるのみにて、他は

全くこれなし。源頼朝に政子あり、豊臣秀吉に淀君あれども、むしろこれ放縦淫逸の徒に過ぎじ。過ぎたる者、及ばざる者、古今天下に充ち塞がりて、一の規範となすべき者はあらざるやうなり。いたく嘆かはしきことならずや。是儒道の四角四面の弊に陷いりて、和氣靄然たる家庭を產み出だすこと能はざりしゆゑにもよるべく、又、佛敎が女子を以て罪業深重なる者と爲して、遂に卑屈賤劣に趣むかしめたるにも基せること、少からざるべし。そも夫と妻との關係は、果していかにすべきか。これ吾等の古に顧み、今に鑑みて、靜かに慮んはかるべきことにこそ。

夫妻ありて、後に、親子あり。兄弟あり。家庭もこれによりて成り。親族も、これによりて出來、社會も、國家も、亦、みな源を、こゝに發するなり。一家の盛衰起滅も、一國の治亂興癈も、その源始を探ぐり究むれば、何れとして、夫妻の關係によらざるは鮮し。これを古今に求め、これを東西に尋ぬるに、到るところ、その適例あらざるはなく、日本支那は云はずもかな。遠く印度、埃及、希臘、羅瑪の昔時より、近く佛蘭西、英吉利、亞米利加合衆國の近世までも、みな著じるしき證左を示しいて、殆んど煩はしきまで、夥しく現はれをれり。されは、夫妻の關係は、あらゆる社會的現象の根本的要素となれることは、はなはだ明白にして、誰も、これを否む者はあらざるべし。しかるに、世

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

間、夫妻の關係、うるはしく齊ひ、まとやかに修まれるもの、そも〳〵幾程あるべき、よも知らざるゆゑ、爲さゝるにはあらざるべし。必らずや、かく知りながらも、かゝるやう務めざるものとすれば、その咎いたく大いなりと謂はざるべからず。

夫。婦。有。別。てふ主義は、永く、支那日本に行はれ、篤く、識者德者に崇ばれたるものにして、實際上これに順ひ、これを守らで、誠に能く倫常を失はず、貞節を損はざるに庶幾しといへども、その弊、やゝもすれば、冷薄に陷り、固陋に流れ、いかにも究屈の感あるを免かるゝ能はず。わけて、夫妻として、比翼連理の事實なく、資助唱和の功用を欠きて、その愛や、おのづから顏色の美を主とし、その樂や、知らず識らず、肉體の快を重んずるに到ること、實にさぞ〳〵見るところなり。支那にては、特にはなはだしく、日本においても、藤原氏攝政のころより、すべての武家時代を通じて、この弊害極めてしるく、全く有別主義に搦められたるのあまり、男子は、唯、女子の色香に迷ひつ。剩さへ女子を以て、專ら、己が淫慾を果すべき器具とし考へ、さかも、かつ徒づらに、之をもて遊びたりしなり。固より比翼唱和の美風吹き初むる時機とてなく、逸豫猥褻見るに忍びず、聞くに耐へざることのみにて、家庭齊はず。親族睦まじからず。社會も腐れ爛れて、國家も能く榮えざりしさま、げに〳〵あはれにも厭はしきことならずや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吾は初めにもいへるが如く、その取り扱ふ事件、その履み行ふ道路、などにおいてこそ、別はわれと信ずれども、決して全然有別主義を執れるには服せざる者なり。教育についての　勅語には、夫婦相和せよと誡め置きたまへり。その　御意深遠にして、吾等の推し測るなど、あやにかしこきことにはべれど、こは、我邦神代より固有の精神にもあり、又その家族的組織の根本にもなるもの。それのみならで、倫理學上、社會學上、當に然らざるべからさるところ。眞に國民の擧りて拳拳膺に服すべきことになん。（未完）

讀書

秋鹿

幼求斯道在孤懷。德業無成夙志乖。八十五年爲曷事。讀書獨樂是生涯。と吟じて、世を辭せし貝原益軒先生の讀書觀はいかに。

其の文訓にいはずや。經傳を讀めど、見るたびに聖賢の教を、目のあたり聞くが如し。貴ぶべきと限りなく、空しく過ぎぬる隙惜むべし。狄仁傑の、名教の内至れる樂あり。何ぞ俗人と語ることを好まんやといへるも宜なり。古語に曰く、讀書一日有一日益。讀書一卷有一卷益。又曰く。人の神智をますは書にしくはなしといへり。歐陽子は至哉天下樂。終日在几案といへり。智をまして且樂あるは大なる益にあらずや。無學なる人は、學

間の樂、此の如く至りて大なるを知らず。惜むべし。たとへば我國に生れて、富士の嶽、吉野の花見ざらん人だに、いと憾多かるべし。かゝる人には見せまほしくぞ覺ゆる。况や人となりて、人の道を知らず。古今の事、萬物の理に暗き人は、幸なくうらみあるべし。知らせまほしきと、何ぞ富士吉野に比ぶべきや。只幸ありて、よく學ばん人は、此のうらみなかるべしと。

若き時は、書を讀むに三のよきことあり。氣つよく、書を多く讀みても疲れず。是一なり。いとま多く妨なくて、書を多く讀みやすし。是二なり。若く氣盛なれば記臆強くして覺えやすし。是三なり。此の三の事を讀むによし。又年たけて後書を讀むに、あしき事三あり。一には、既に君に仕うまつりて司ることあり。人の交り繁くなり、家の事、又多くしては、書を讀むに遑なし。二には、年漸くたけねれば、氣弱くなりて、勉めて多く、書を讀むこと難し。三には三十より後は、年々に覺弱くなりもてゆけば、少年の時、一たび讀みて覺ゆる程の事を、年たけぬれば、十たび讀みても覺えず。こゝを以て、幼く若き年、早く書を讀むべしと。而して、先生は、其の老後に至るも、猶且つ書卷を放たず、胡昭が年八十而不倦於書籍といへることを聞き。吾雖耄耋亦日夕手不釋卷と誇れり。其の勉めたるや想ふべし。依つて想ふ。醉語寢語に、老年讀書法を說くもの、

大に採るべしと。說に曰く、孫莘老喜讀書。晩年病目乃擇卒伍中識字稍解事者二人。授以句讀。毎瞑目危坐室中。命二人更讀于傍終一策則易一人。飲之酒一杯使退。卒亦自喜不難。可謂老年讀書法。

文訓又云ふ詩も亦、風雅の道なれども、わが國の俗にあらず。（中略）。拙き詩を、一首作らんいとまには、好書一卷をば讀むべし。しからば、よからざる詩を作るは、讀書のひま費えて、無益なるいたづら事なるべしと。これ豈に李性學が詩と異るものならんや。詩に曰く。天下今無讀書者。世間惟有作詩人。古今感を同うす。試に問ふ。現下日本それ、何れをか多しとする。

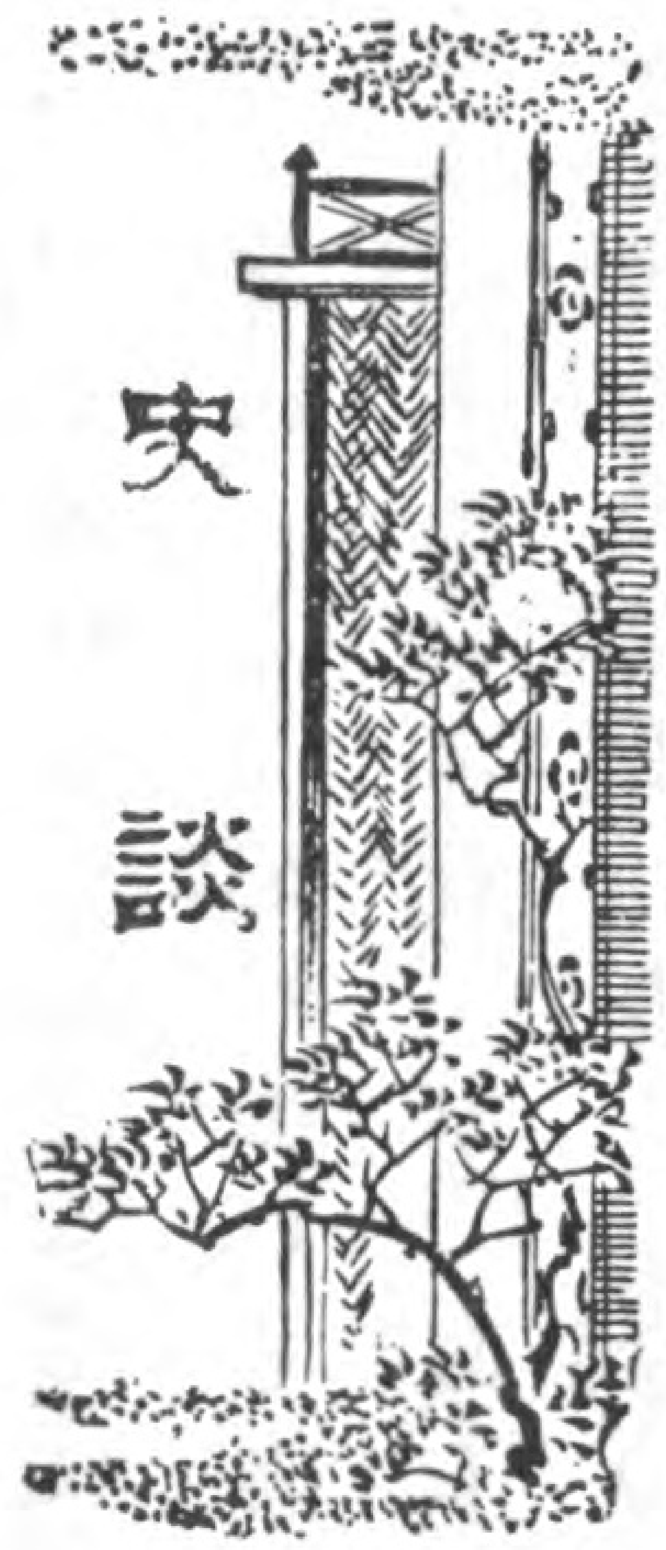
以上は、益軒先生讀書を勸むるの辭。數萬言中にありて、偶ま、座右記錄に存するものに取るのみ。好學の士、若し先生の十訓を繙き來らむ、當に感奮すべきものあるべし。然れども、徒らに讀書を勸めんは、其の害、之を勸めざるに勝る。請ふ、左の二則を以て進めんかな。

捫虱新話にいふ。讀書須知出入法。始當求所以入。終當求所以出。見得親切。此是入書法。用得透脫。此是出書法。蓋不能入得書。則不知古人用心處。不能出得書。則又死在言下。惟知出知入。得盡讀書之法也。

又曰。讀書半記則有進益。讀書惟在半記。則日見進益。陳晉之一日只讀一百二十字。後遂無書不讀。所謂日計不足。歲計有餘者。今人誰不讀書。日將誦數千言。初若可喜。然旋讀旋忘。一歲未嘗得百二十字。雖然況一日乎。予少時實有貪多之癖。至今每念腹中空虛。方知陳賢良得法云。

書を讀まざるの非、更に言ふを須たず。徒らに讀むこと多くして、退いて卷を歷ひ、之を參思再考することを無くんぞ、讀書の用なきなり。書を讀むは目的にあらず。之を活用することを目的たり。世に益し、世に利する所あらんが爲め、其の工夫を得んが爲め、先づ讀書より進むなり。要は目的と經濟とを混ぜざるにあり。而して余輩は悲む。今の人年に向つて語るべき所は、目的經路混用の注意にあらずして、この目的を達せんには、必らず先づ、この經路よりすべきを勸むるにあり。砂上に基を置くの建築が賴むに足らざる、誰か、之を諒せざらん。素養に深廣なるを勉めずして、徒らに實行に急なるの愚、皆、克く、之を知れり。諒せざるにはあらざるなり。知らざるにはあらざるなり。而かしも、大概、常に、之を忘れ去れるもの多し。眞に寒心に堪へざらしむ。見ずや、少しく眼を圖書に曝すものに會へば、直ちに、之を目して、書蟲と訴る。嗚呼書蟲たらざるの人。果して幾許の蘊蓄かある。今の世に當りて、我は寧ろ書蟲たるに甘せんかな。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



千代女

鹽井ふく子

あはれ、千代に八千代に語りつたへまほしき、千代女が貞節。千代女は、みちのくのはてなる會津郡、田代村の名主忠兵衛が妻なり。人となり柔和にして、また、まめやかに、舅姑にもよく事へ、下をもめぐみけるが、夫、惡瘡を憂へ、人の交りもなりがたけれど、つとめをも、其の子清右衛門にゆづりて、ひたすら療養に心をゆだねしかど、病は年と共に重り行きて、七八年、此の方は、いよ〳〵わづらはしく、家の内のあゆみも叶はざりけるに、千代女は、いたく、之を憂ひ、如何にもして、夫が病を去り、もろともに幸福の日を見んものとて、天にいのり、佛をたのみ、もとより山間の僻地、醫師とてもあらざれば、千代女は、朝に遠く、山を越えて、醫を問ひ、夕におそく、谷をふみて、藥をもとめ、口に入るゝ野菜、魚のたぐひも、毒ならぬをと撰びに撰びてすゝめ、長のいたつき、身のいたまぬやうにとて、藁をもみやわらげて、臥所の下にしき、氣ふさがらぬやうにとて、さま〴〵の物語りして慰め、二便のとりをさめより、萬の事、たゞ、一身の如く心をそへ、力をそへて介抱したれど、病は怠らず、千代女が心をいたましめし十五年の久しき、僅に名主役はしたれど、もとより小村の名主にて、さのみ餘裕あるにあらざるに、夫が長のいたつき、醫藥療治等に、僅のたくはへもつひやしはて、家はいたくおとろへたるに、舅姑さへ老いおとろへて、病者にことならず。來春の花の開くをまつやまたずや、千代女は、之をも心細く思ひ、山里の事足らはぬ中に、滋養物を好むものをあさりてすゝめ、夜のものとても思ふやうな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちぬぞ、老の身の、わきて寒さをいとはんとて、その、よくいぬるを伺ひ、己がふすまをうすくし、あるはぞの衣をかけまとひて、たゞ艱難をかくし、舅姑と夫が心をやすんぜしめんとすれど、清右衞門夫妻が、千代女が孝貞の所行にならひて、之もまた、祖父母を大切に病父をいたはり、父母が心を安んずる事をのみ思ひて、夏のあつき日、手足の、日にむさるゝを思はず、田に耕し、畠に作り、祖父母と父とに、好むものを呈せんとて、冬の寒き夜、煙草の葉をのし、いさゝかなる賃錢を得て、養ふ助けとし、終始、たゞ、反哺の孝の足らはぬをなげく。みな千代女が貞節のしきて子に及ぼしたるにて、忠兵衞、病に臥す十五年終始、たゞ、一日の如く、夫を介抱のすきには、舅が腰を夜半深く撫づれど、清右衞門が妻も、姑が肩をさすり、共に語り、共に慰め、共にいたはり、又清右衞門は、公けの役も、よくつとめ、農業もはげみければ、下民、皆、之にのつとりて、夫はげみ、妻やさしく、子孝に、人皆まめやかなるも、もと千代女が、一人の心の貞實にのつとりたるものなりとて、やがて領主に聞え、寛政三年に、松平肥後の守より、米若干を與へて、その貞節を褒賞せられたりとなん。

諸井五左衞門の妻

山本正周

武藏の國本莊驛の長なる、諸井五左衞門の妻民は、上野の國伊勢崎の士、伊與久某の女なり。容色人に過れて、貞順なり。又、能く家を整ふる事十余年なりしが、夫身まかりて、子なくして、早く鰥となりければ、夫の家憫みて、屢々改めて、外に嫁ぐべしと勸めけれど、民は、從はずありしに、又々、他の親族も勸めけれど、民は、佯て、暫く待ち給へ。三回の忌辰を過ぎて後、仰せに從ひ侍らむといひければ、皆々信なりと思ひしに、民は、夫に貞節を盡す心堅ければ、人々の再嫁を進む

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るも憂き事とや思ひけん。三回の月に當れる六月に、身を清め衣服を改め、香を焚き、夫の位牌を拜み、刄に伏して死しけり、時に年三十五なりしとぞ。

家政



女禮

行酒飲食程式稽古の仕方

有住常子

上﨟より御盃戴き様　先戴く人は左足よりすゝみ出で、御次の間、しきゐ外にて一禮あり、貴人こなたへと御ことばあらば、疊より五寸程、かしらをもたげ、二度御うけ申上、しづかに立ち、しきゐ内に入り、一禮なし、兩手を突き、扣へ居るなり。扨、貴人御盃をたまはる時は、三尺程すゝみ出で、酌人のきたるをまつべし。酌人きたらば、兩手をそろへ酌人の方に向ひ扣へ居るなり。又、酌人は、三方へ銚子をくみ付け、持出で、先貴人へ、一献差上げ、其の儘戴く人へ持參り、銚子をわきに置き、三方の儘、戴く人へ据うるなり。又、戴く人は御盃を取下したまはりたしとじたいすべし　扨、酌人、三方をわきによせ、盃を取り下しわたすべし。戴く人は、兩手に受け、左手にうつし、右手をつき、貴人の方に向ひて、右手をそへ、かしらをたれ、つゝしみて戴き、又、右手をつき、酌人の方に向ひ、御酒を受け、又、貴人の方に向ひ、二度戴き盃を持ち上げてのむべし。御酒をのむ時は、貴人の御前にても、少し、かしらをもたげてのむものなり。のみをはらば、兩手に御盃を持ち、しづかに右膝にて立ち、右足より三足引きて右に上り、左足よりあゆみ、御次に入るなり。又、酌人は、戴く人の御盃出し候ふ時、一すゝみして、一献つぎ扣へ居り、戴く人しりぞきた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る後、三方へ銚子をくみ付け、廻り膝にて、下座へ立ち左足より、しづかに、御次に入るなり。

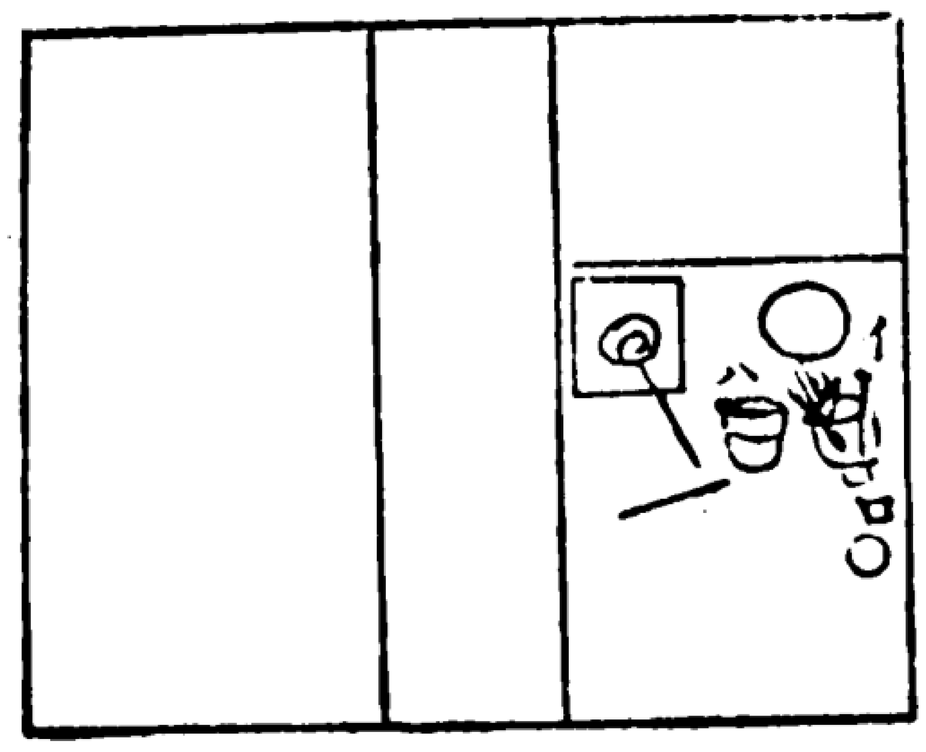
茶の湯

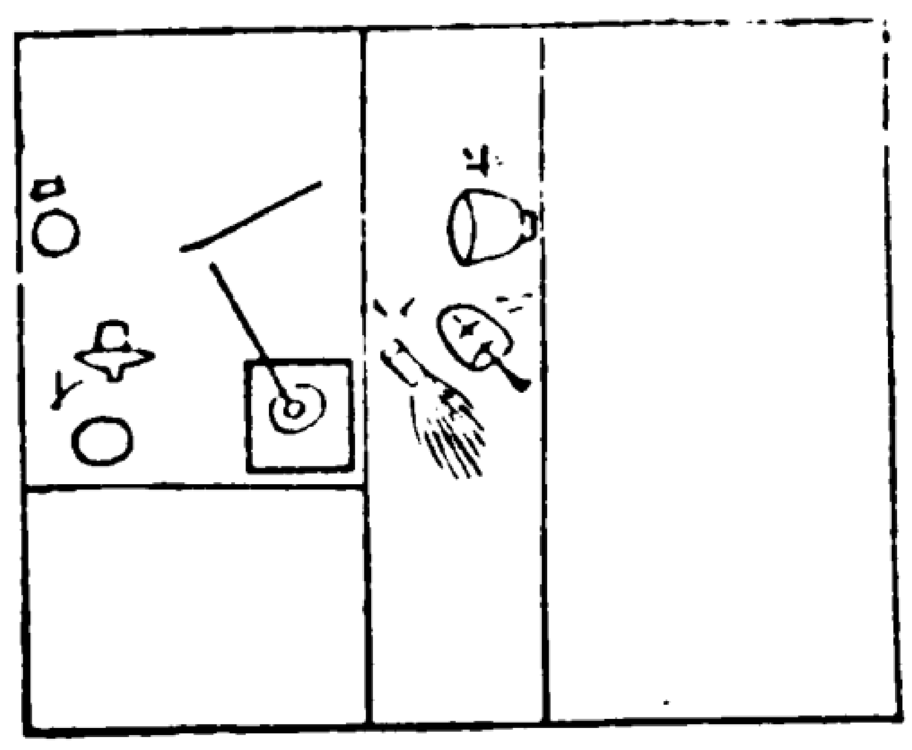
茶禮初學（承前）

孤峰菴碌仙齋不羨
關 葦雄

向切逆手前二疊中板入席

イ、茶碗ロ、棗ハ、水指





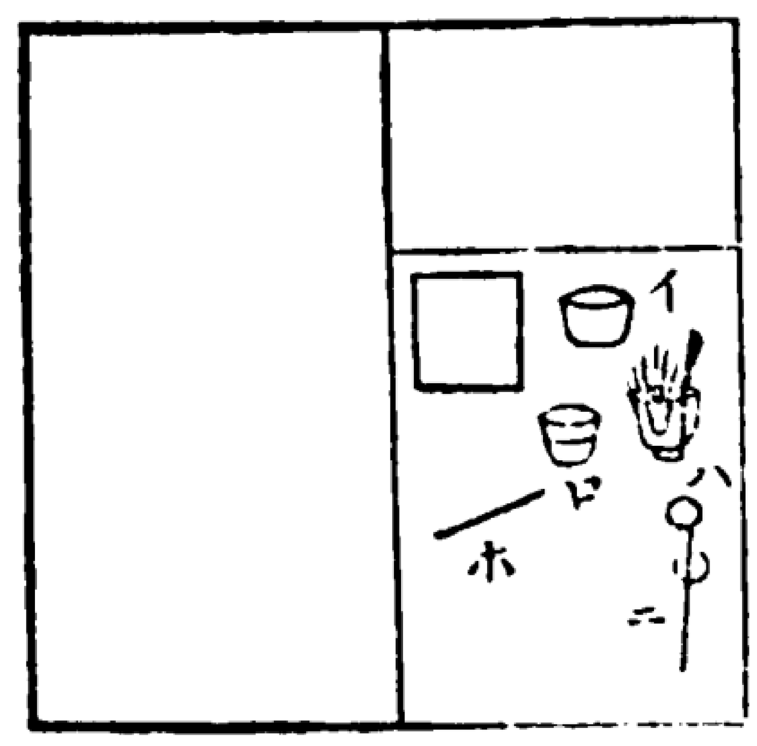
イ、釜のふた ロ、こぼし ハ、茶筅 ニ、棗 ホ、茶碗出ス處

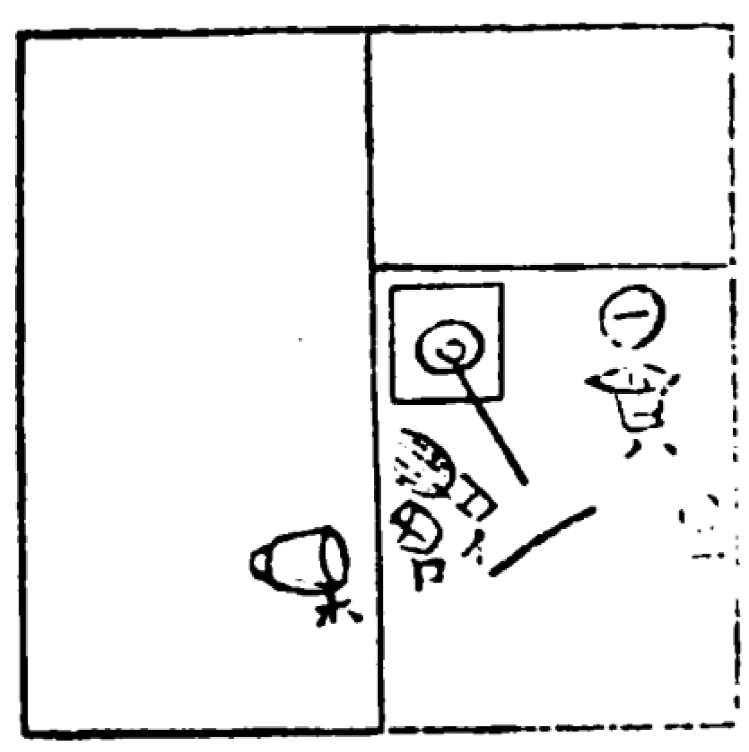
中板入席は、茶入茶筌板の上へ置なり。

流し點居前は、客方へ、少し流すべし。

向切逆勝手中板無レ之席

イ、水指 ロ、棗 ハ、茶碗 ニ、柄杓 棗中ニ蓋置 ホ、居前



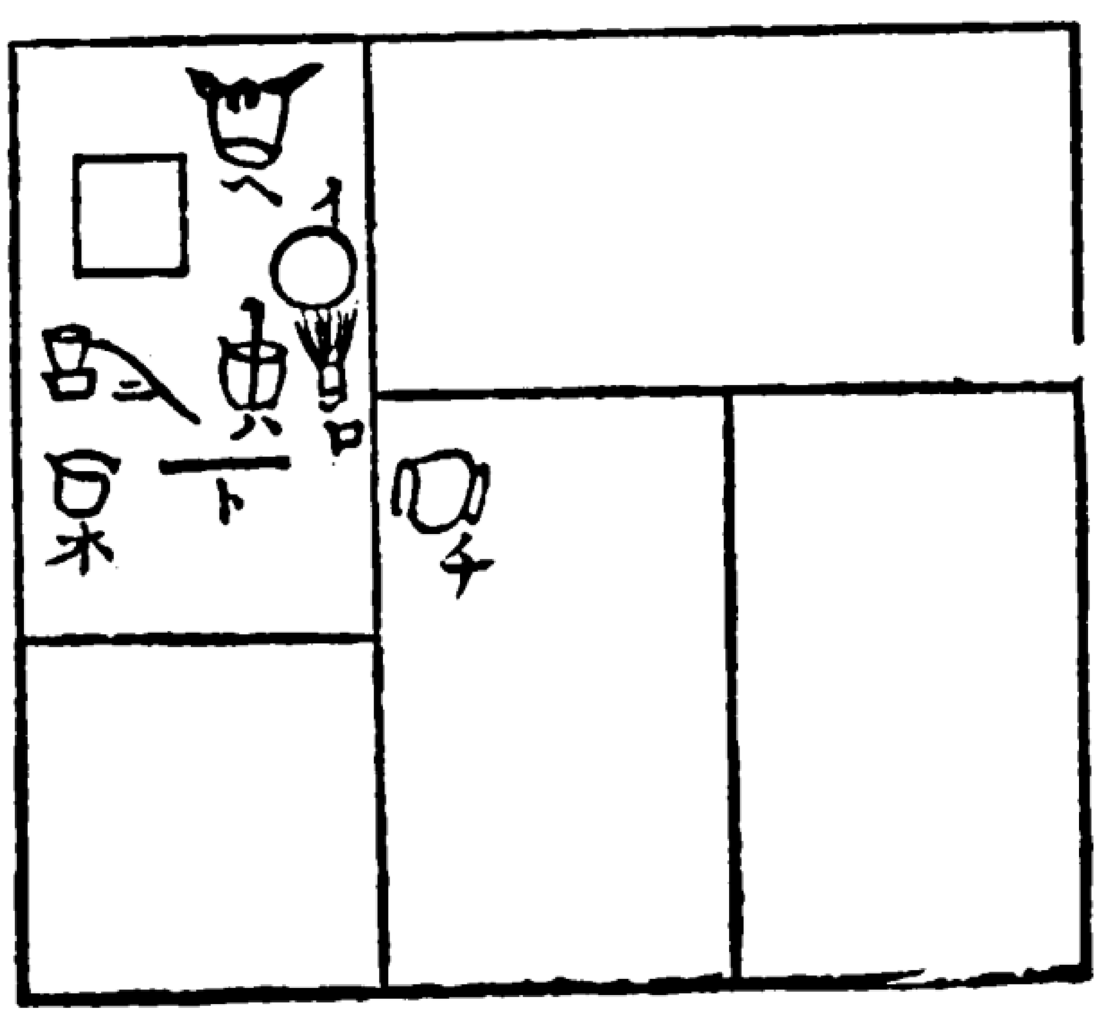


イ、茶筌 ロ、薄器 ハ、釜蓋 ニ、棗 ホ、茶碗

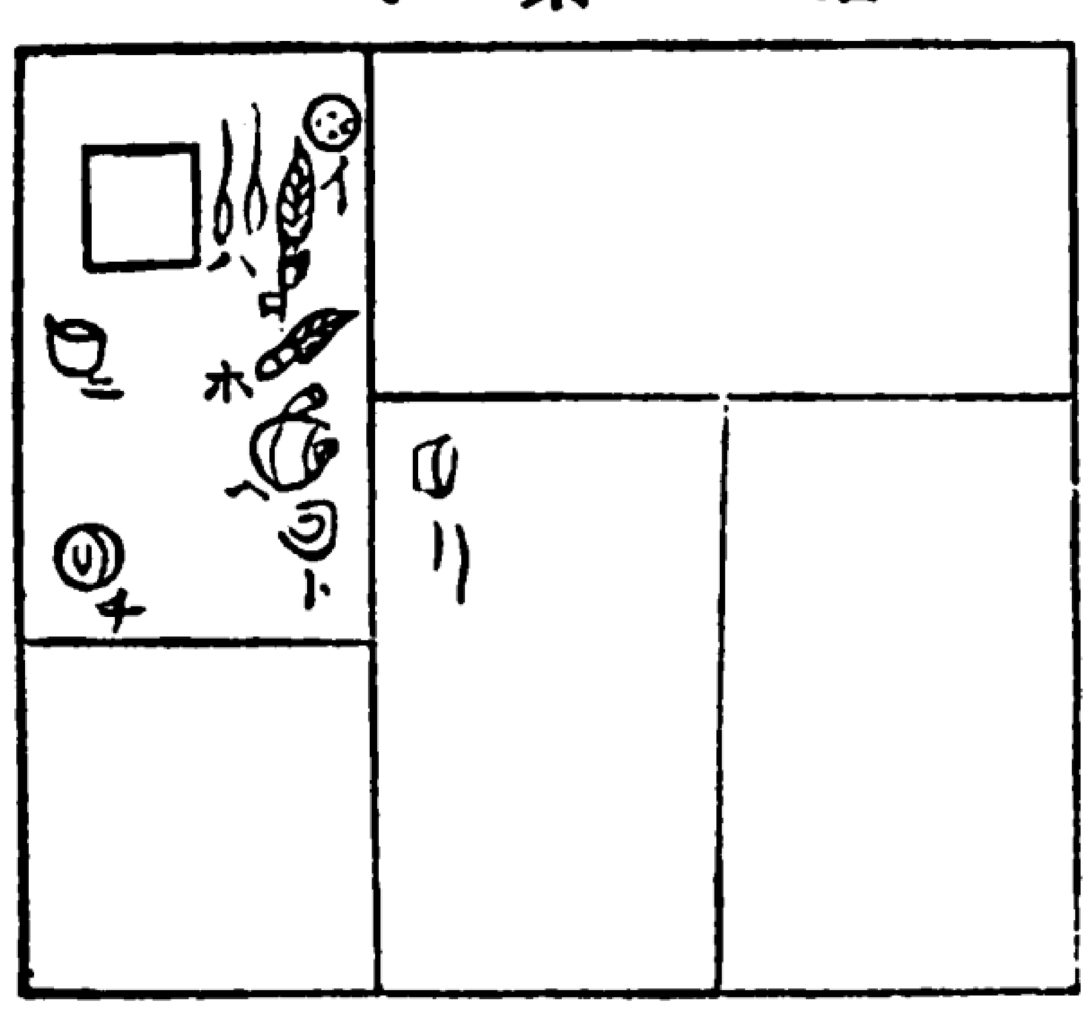
此の流し點は、薄茶斗なり。濃茶手前は無之者なり。又、炭手前は、大約如風爐香合の置所、爐縁の右の方、向の隅の所なり。都て塲所せまき故、注意して器用に取廻すべし。

四疊半風爐手前同炭

イ、水指ロ、茶筌ハ、茶入蓋ニ茶匙 ニ、柄杓蓋置ホ、棗ヘ、袋



ト、居前 チ、茶碗出シ塲

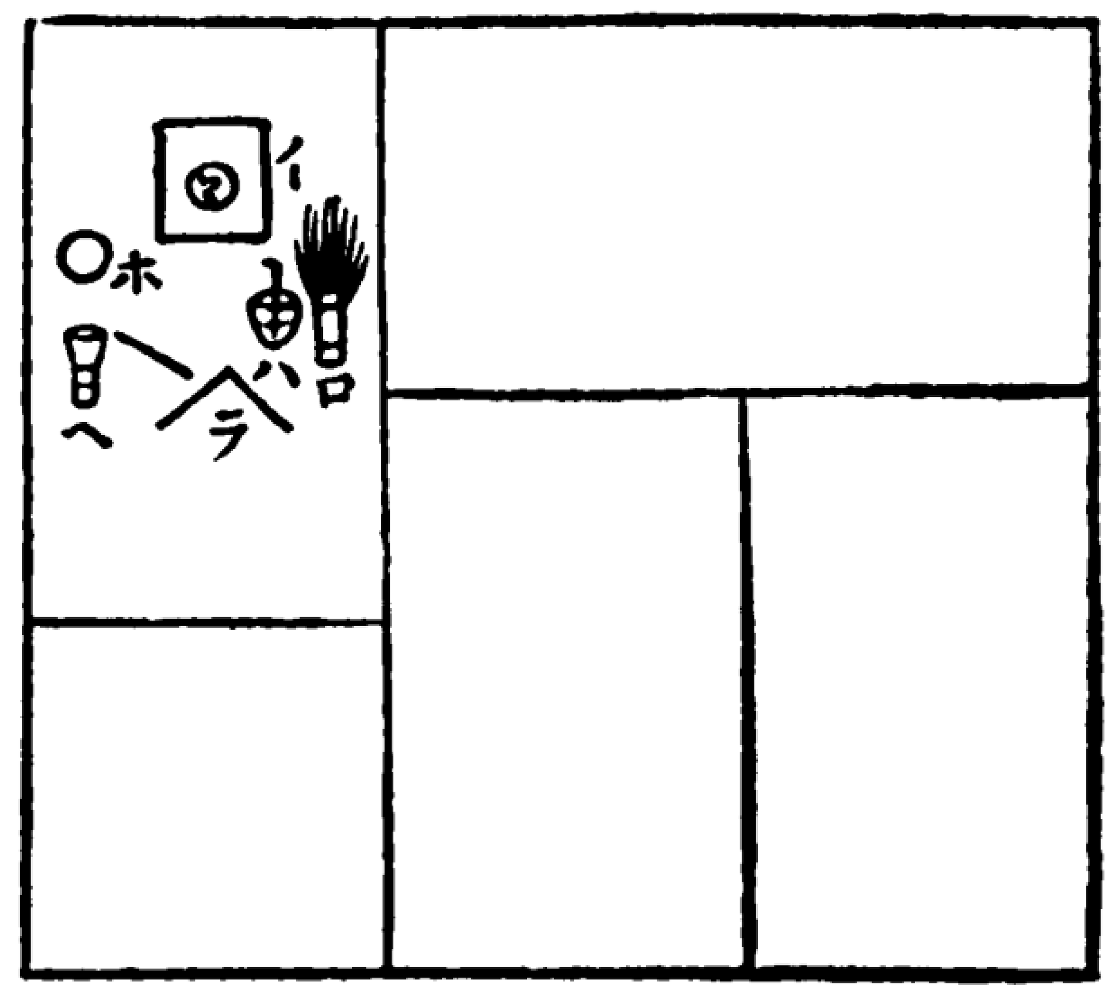


Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

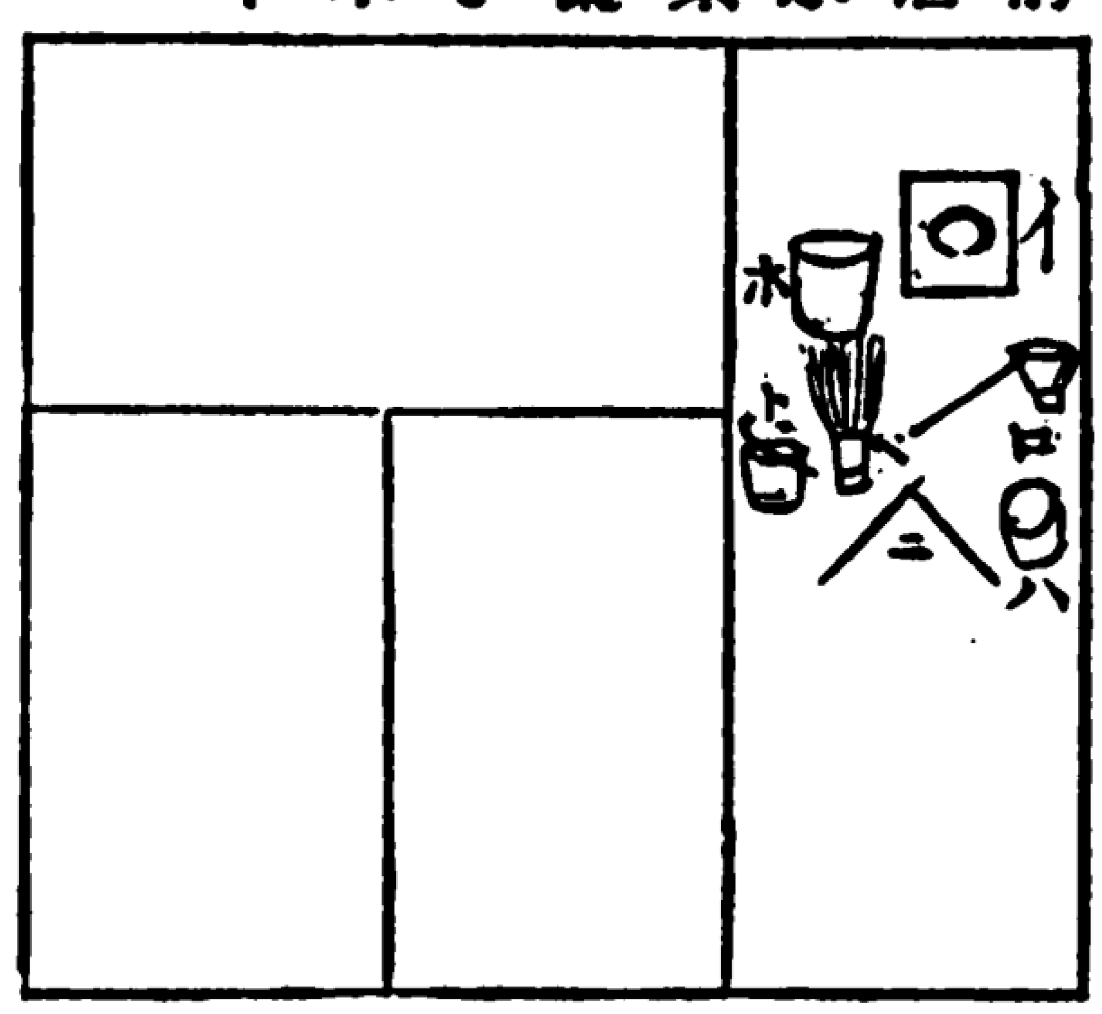
イ、炭斗ロ、三ツ羽ハ、火箸ニ、香合ホ、三ツ羽遣ヒテ後置處ヘ、釜ノ置處ト、鐶チ、灰炮烙リ、香合茶碗出シ場客ヨリ返スモ此處

風爐中置運び手前なり

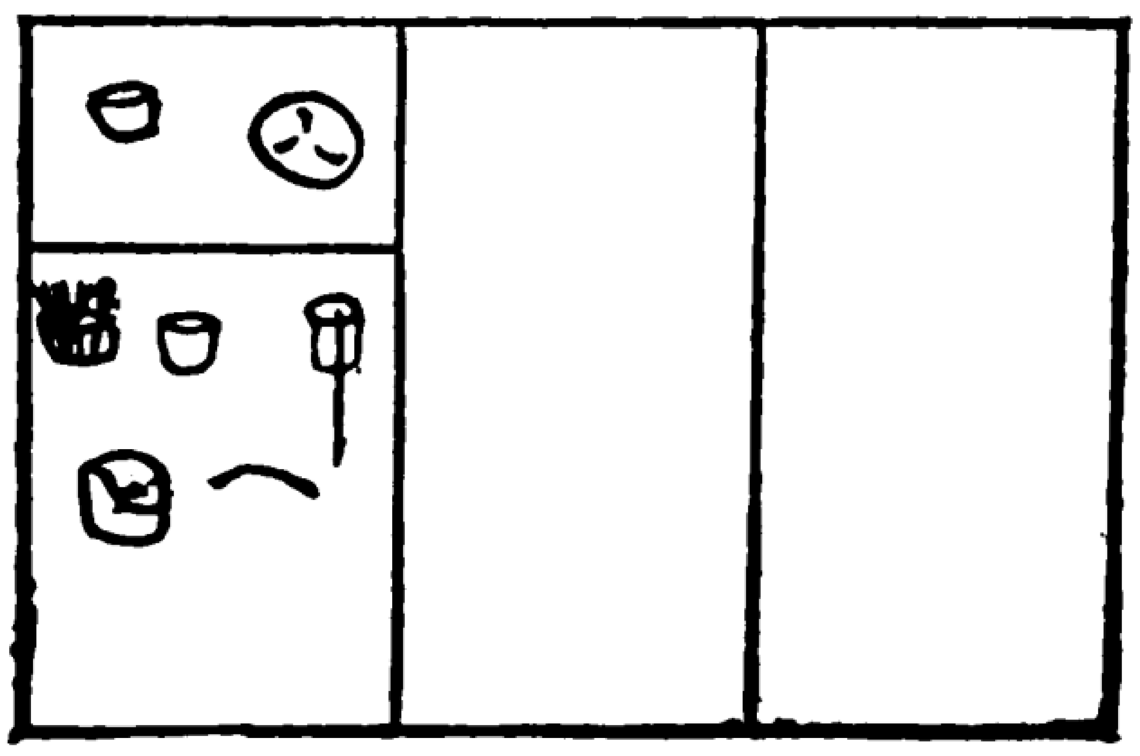
イ、風爐釜小板ロ、茶筌ハ、棗上ニ茶杓ニ、居前ホ、水指ヘ、柄杓蓋置



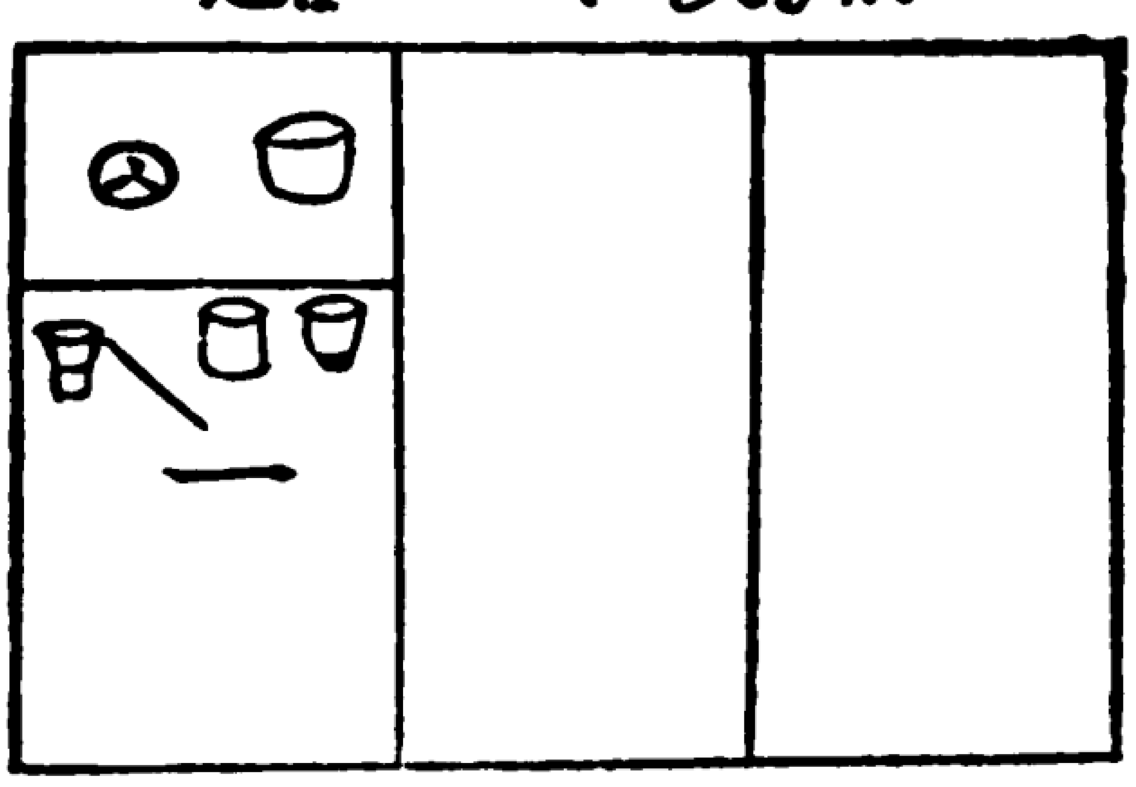
イ、風爐釜小板ロ、柄杓蓋風爐左リ手前置ニ、居前ホ、水指ヘ、茶筌ト、棗柄杓炭手前向切本勝手ニ準シテ知ベシ



向板に丸爐仕籠たる席右手前水指兩器置合圖如炭手前は向切本勝手の通



同左手前の圖炭手前は向切逆の通り



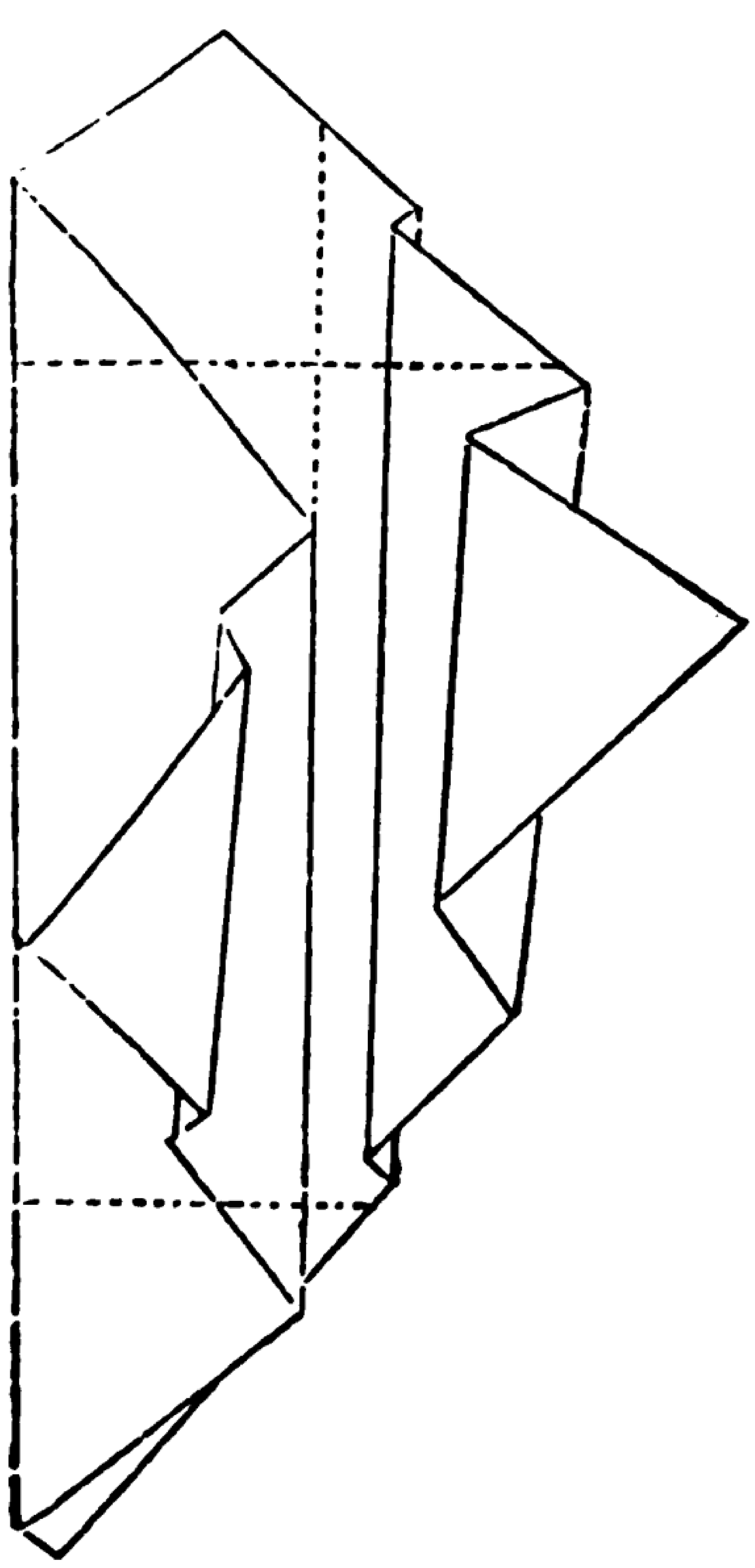
不羨曰茶具置合配布の名稱は再三掲示せしことなれど、返て観客賢婦の繁雜を煩はすの憂あれば、爰には略之

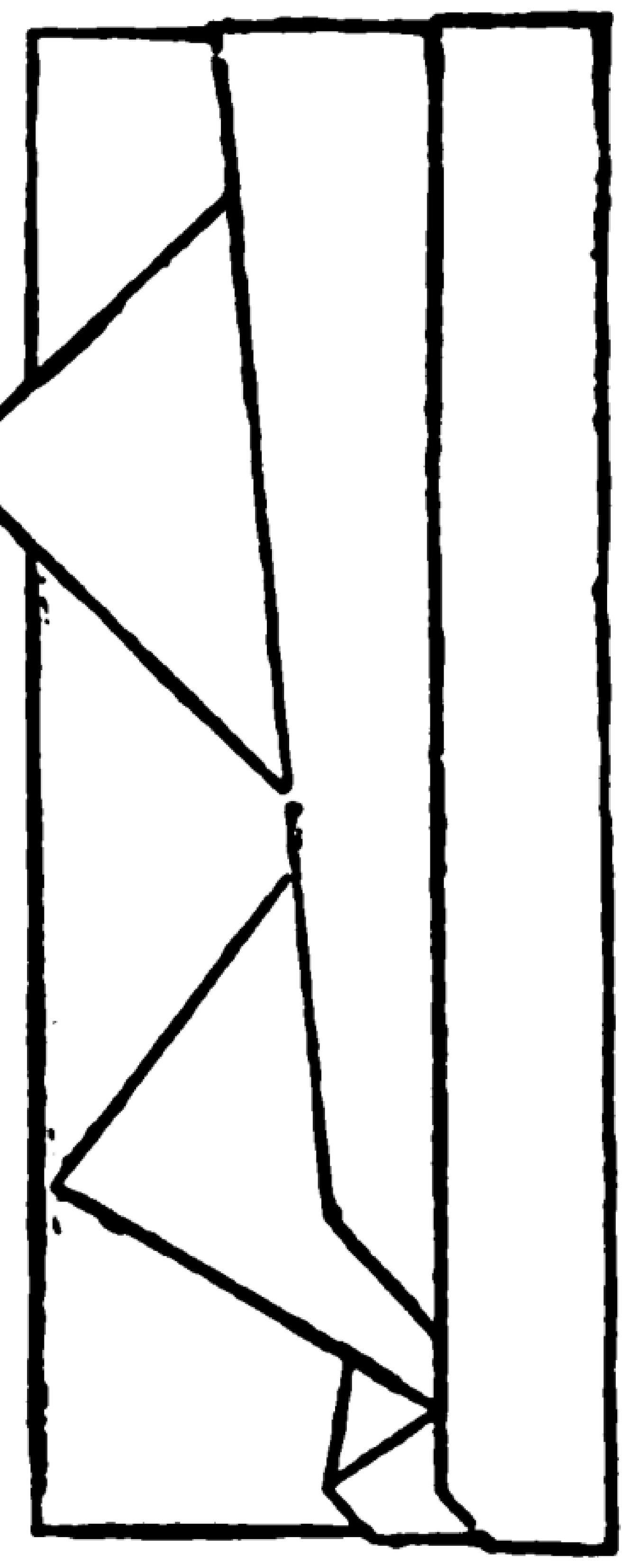
折方

有住　くわう子

はさみ包

前號にかゝげし、はさみ包の一種なり。



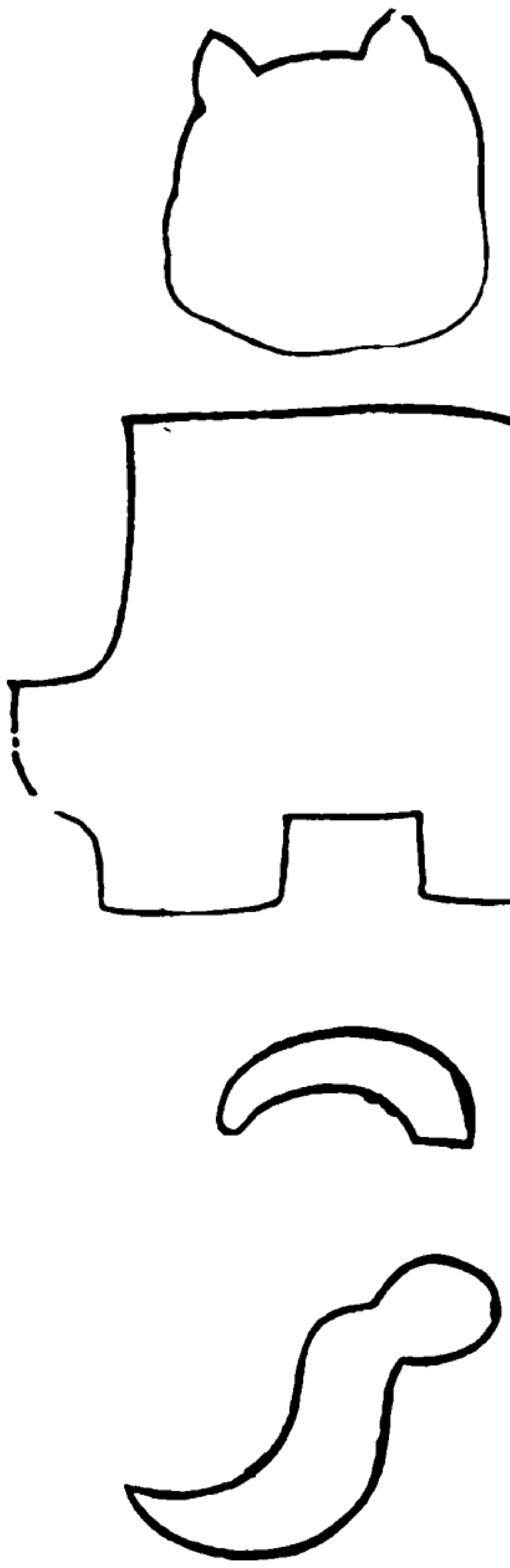


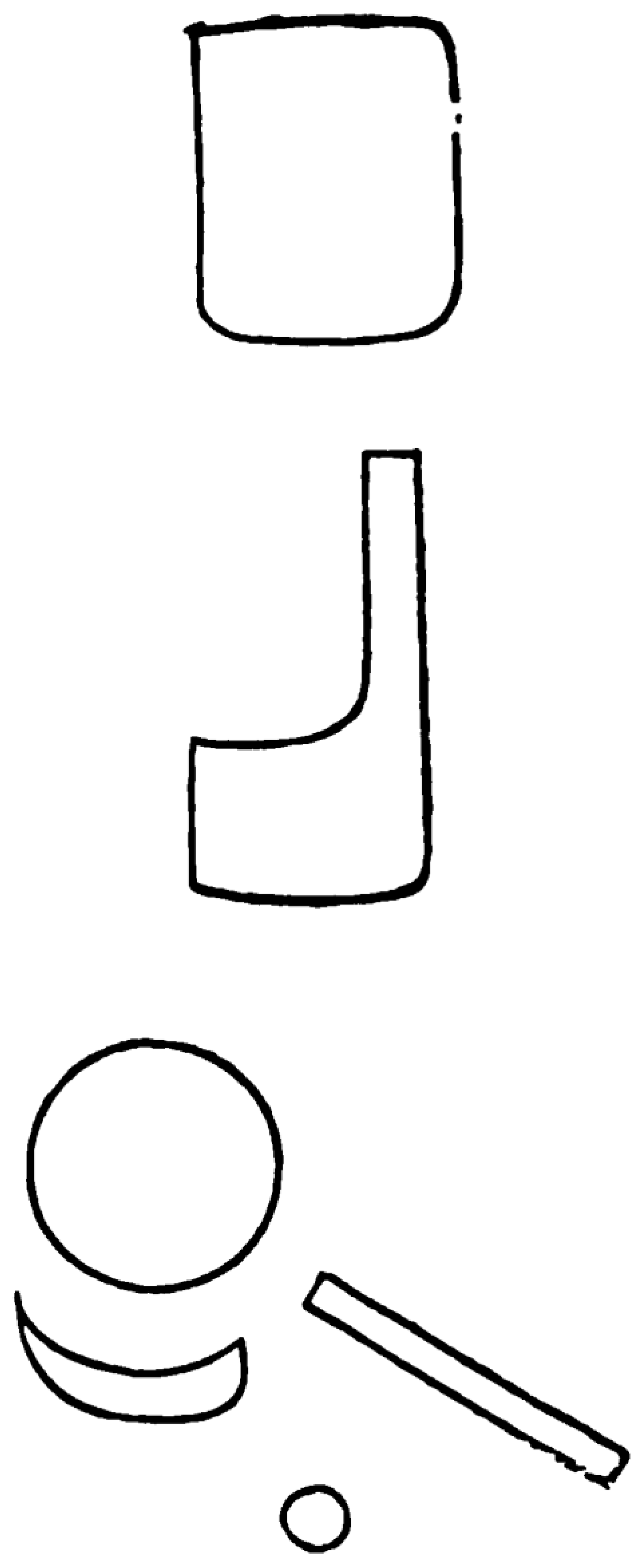
たちぬひ

西山たい子

背負守（承前）

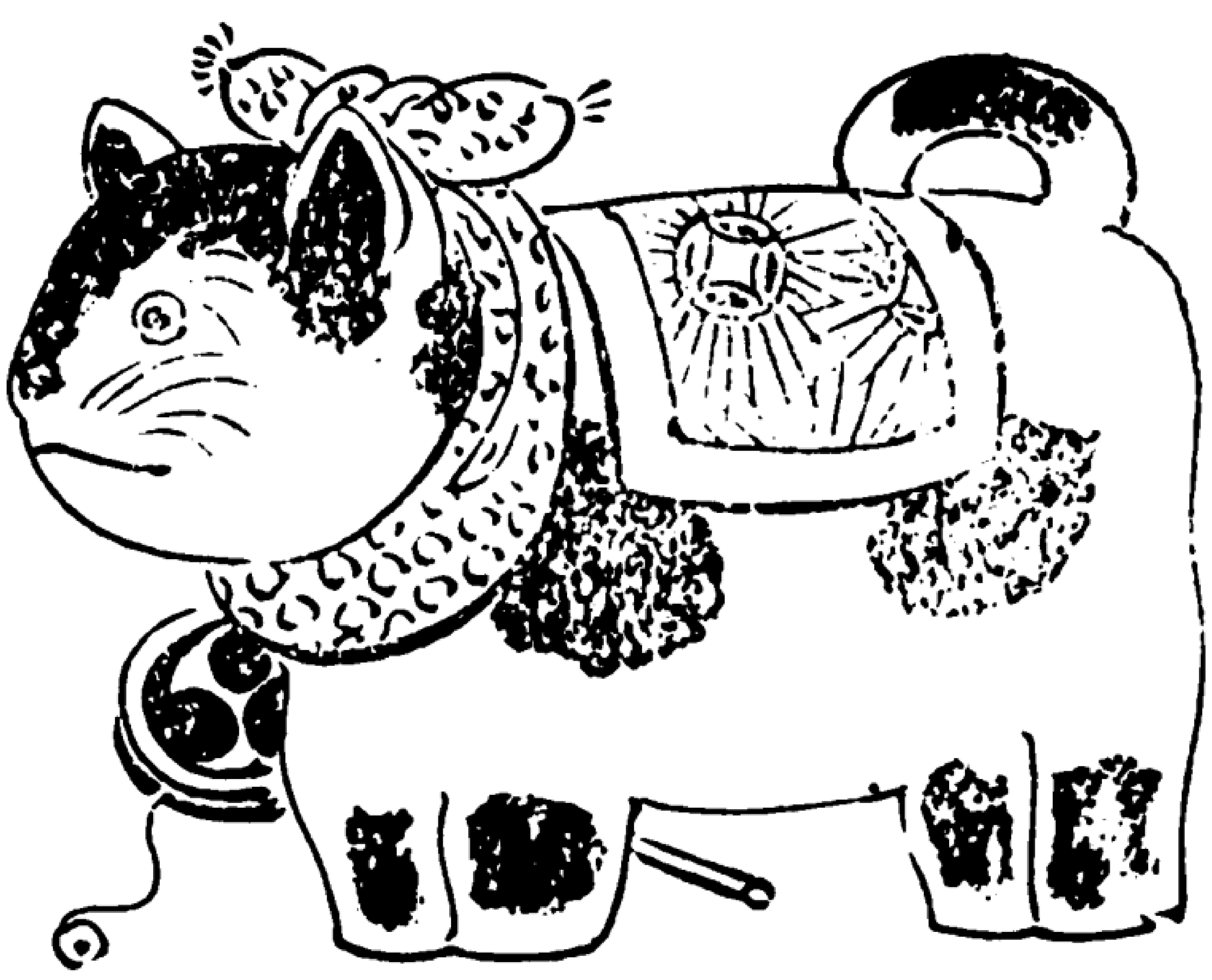
犬張子にでん〱太鼓





まづ、厚紙にて、右の如き形を切り、胴には、綿を、多く入れ、首尾、首輪、でん〱太鼓、其の他いろ〱のつきものには、綿少しばかりを入れ、又、でん〱太鼓の柄、小さきすゞには、綿を入れず。又、鈴は、先きにものせしまめまりの如くなす方、かへりておもしろかるべし。切は、胴、及び、首は、白ちりめん、白絹など、白きがよろしく、首輪は緋縮緬、緋鹿子等、赤きがよろしかるべく、其の他、思ひ〱の切を、例の如くかぶせ、目、鼻、口、又もやう等を、墨、朱、金泥等にて畫がき、さて、組み合すべし。下の圖を見て推し給へかし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



その圖

だいどころ

季節料理

素人庵

豚肉料理の種々（ツヾキ）

ラフタイ

これは、なるたけ、脂肪少きところの肉を、同じく一寸五分角ぐらゐに切り、一度湯煮にし、其の湯をすて、醤油と蜜淋と同じ程づゝ、混和したるを、少し鹽からき加減の煮汁をつくり、これにて煮つむるなり。二三時間弱火にて煮るべし。少量の胡椒を投入たるも、味よし。ラフタイは、蒸豚肉とは反對にて、其の肉しまりて、又これ、一種の佳味を有す。さて、前にもいひしごとく、豚肉は、人によりて、非常に好惡あるものなれば、これくらゐにしてとゞめ、他の、淡泊せし料理の一二を紹介せむ。唯その前に、一ついふべきは、彼の豚の耳肉のことなり。よく湯にて煮あぐれど、眞白にて奇麗なり。其を細く切りて、三種醬にせむ、其の味、頗る佳なり。世間に、あまり見うけぬ料理なれど、ことに書き加ふ。

つゝみ玉子

鍋へ、少しばかり、湯をいれ、沸えたゝせおき、小さき猪口の中へ、厚紙をおし入れると、おのづから、ひだ出來て、形そなはるなり。其のなかへ玉子うちわりて

入れ、猪口ともに湯煮して、そろりと紙をはなすなり。これに食鹽を添へて出すなり。急場には、至極手輕にて、おもしろきものなり。

ぶつかけ溫飩豆腐

常の八はい豆腐より、少しひら目に切り、湯玉のあがるところへ入れ、直にアミ杓子にてすくひとり、煮かへしたる生醬油をかけ、花鰹節、おろし大根をおき出すなり。葱の白根、こまかにきざみたると、粉唐辛とを小皿にいれ、わきに添へたる方よし。

菜花園

冬の草木くさ〴〵(三)

○薪 たき〵は、四季ともに伐る所あれども、大凡は冬を以て期とす。歌には冬の題によめり。

○胡蘿蔔引 本草綱目に曰ふ、元の時、始めて、胡地より來る。根の形、人參に似たり。故に本朝にて名づく

俳 にんじんの冬は畑に龍田ひめ 一海

狂 にんじんのおもひそめては色に出で
つひに心もふさにさぞなる 貝柳

○葱 冬葱 ねぶか ひともじとも云ふ。(古訓)紀(和名抄に出たり)一名芤草 根ふかく入りて、喰ふにも、根をよしとす。ゆゑにねぶか、又ねぎなど〵いふ。又、中、空なるゆゑうつはぐさともいふ。又、丸く、長くして枝なし。故に一文字と名づく、三才圖會に出でたり。

俳 女には嫌らはれてれきの白髪かな 青祇

歌 職人盡歌合
紅葉せて秋ももねぎのうつぼくさ
露なき玉さ見ゆる月かけ

○枯野 草木とも、冬枯たる野をいふ。さびしき景色をよむなり。

歌 有家

いろ〱の花ゆゑのべに立出し
　　心までこそ霜かれにけれ

仝　　　　光俊

草はみな冬かれはづる冬野守
　　いかにすみかのさびしかるらむ

俳　　　　支考

野はかれてのはす物よし鶴の首

仝　　　　東史

枯野かなひさりわめけは皆わめく

狂　　　　京最

冬枯はさそむさしの丶ひろ〱さ
　　奥そこしれぬさむさなるらん

○朽野　枯野に同じ、されども、くだらは、木草の枯る。朽たる野をいふ。

歌　　　　赤人

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（崗葉）

くたら野のかやの古枝に春待つと
　　すみし鶯なきにけんかも

俳　　　　騎鵠

くたら野やくさらず枯れず明の鐘

○冬木立　冬かれたる朽木のすがたをいへり。多くは、本月の季とす。

俳　　　　朝三

花孕む蕾はさびし冬木立

仝　　　　素秋

たま〱に青き葉もあり冬木立

○寒草　冬の草、秋よりかれ殘りたる草をいふ。又、冬ながら霜の下にある草をいふ。

俳　　　　昆吾

かれ〱や野守の標も冬の草

十二月手入すべきもの

いとゞ短かき日は、雪そらにかきくもりて、ありけるが、早や入りけるになむ。山寺の鐘さびしう告げわたる。池の氷を辷る里の兒らのうちわめくも、時節がらにやあらむ。いとさむげなり。かたう閉せる戸の透間より襲ひくる風は、肌をきりさかるゝ心ぞする。火桶などいだきて、たど〱しき燈のもとに、文よめば、聲も、心もこほるやうなる。さらぬとて、ふすま八重高くいぬれば、やり水のむせびて落る音、また、水鳥のおのがすまゐ尋ねつゝなくらむ聲、さては、かなたこなたにきぬたの音、よもすがら引きもたへねば、

やすけくもねぶられぬものから、窓の戸うちあけてながむれば、いつはれけむ。月はくまなくさし出で丶、ひといろに見えわたる白かねの世界、ひごろうちしをれたる前栽のかけの心ぐるしかりしも、なにとなくはえあるこ丶ちしてうちまもる間に、わたくもおそひきて、よさむの風さへ、吹きくるま丶、また、たちいりて、曉をまつほどのこ丶ち、思ひやるたに、いとさむし。かかるをりの手入れすべき草木とてはいかなるものか。

分栽すべきもの

臘梅　側金盞花　獐耳細草　蜀葵　寒菊

移植すべきもの

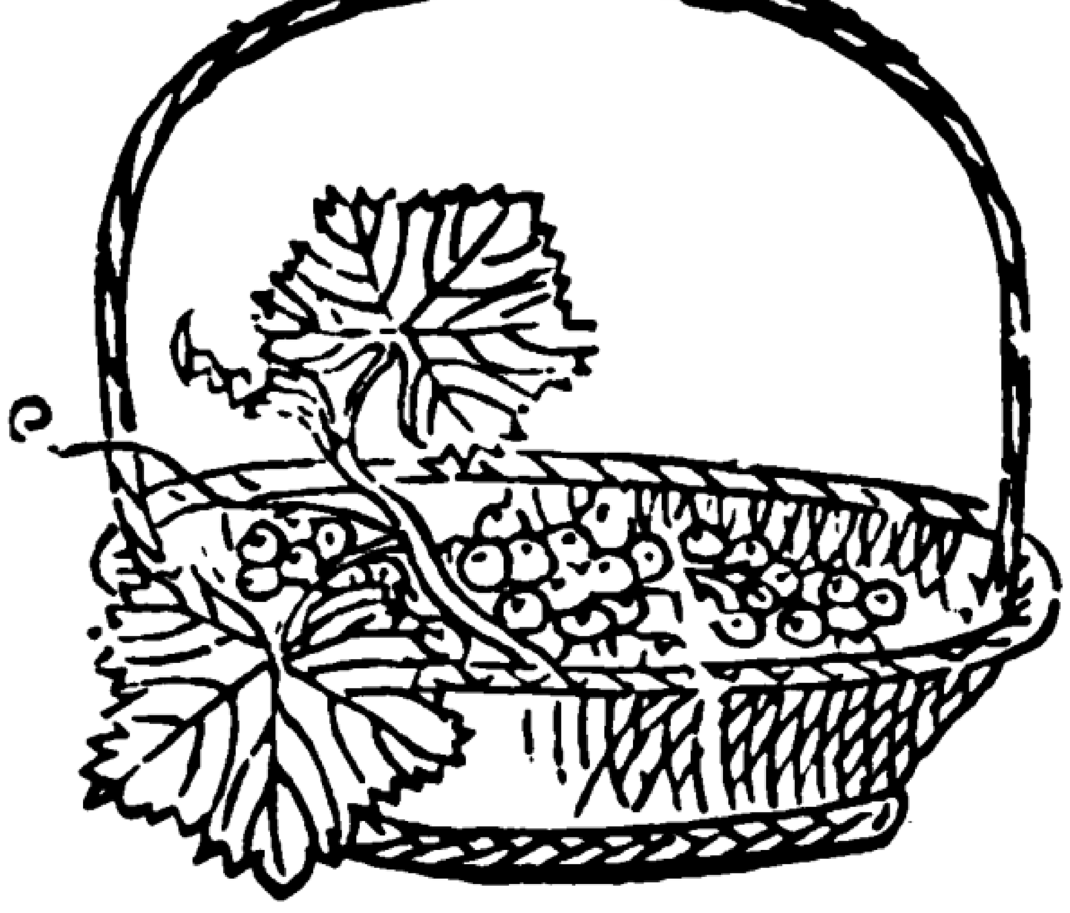
松　柏　桑　諸果木

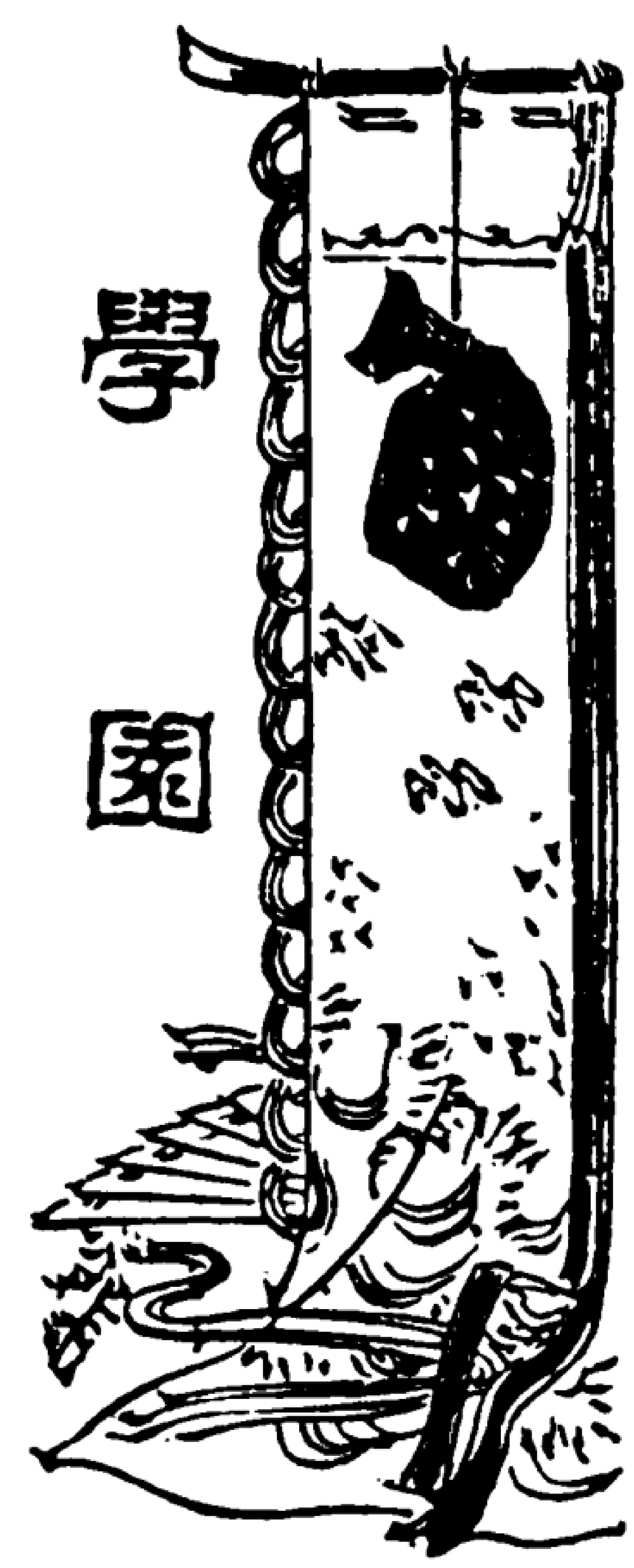
收種すべきもの

橘子　橙子　柑子　香橼　苹果

芋の寒よけ

芋は、一度こほれど食べられぬものなり。まして種にはならぬものなれど、之を商買にする所にては、南むきなる丘の、濕氣少き所を撰び、横に穴六尺四方ばかりなるものを鑿りて、秋のくれ、芋を堀り起したる時莖、及、細根をとり、どん〳〵おし込める。して一ぱいになつた時口は板にて閉づ。又、其の上に土を深山かけて寒を避くるなり。すると翌年の四五月まで安全なり。けれども、之は、澤山やる所の事でありますから、わづかの時には、それには及ばぬ。高燥のところなれば、家の下の土を堀り、よく乾かして入る丶なり。是は芋に限らず寒を恐る丶物はじやがいもでも、牛蒡でも、人參でも、なんでもよし、心みたまへ。





秀歌集（五十）

鹽井正男

○

むかし思ふ草の庵のよるの雨に
　涙なそへそ山時鳥

○これは、皇太后宮大夫俊成の歌なり。新古今集夏歌の部にあり。入道右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りける時ほとゝぎすの歌なり。○むかしおもふ。此の句は、草の庵の夜の雨の全句を形容したる詞にて、草庵の夜の雨に、心もしめりて、過ぎ去りし昔の事をおもひ出づる意なり。○草の庵。草ぶきの小やかなる家をいふ。○此の上の三句は、白樂天が闕省花時錦帳下盧山夜雨草庵中といへる詩句によれりと、本居翁のいへる、さもあるべし。此の三句の詞の末に、昔をおもうて涙催され、袖をぬらすといふ意をそへて見るべし。○涙なそへそ。涙をそへてくれるなよとたのみとゞむるこゝろなり。なは勿れとといむる意なれど、きびしく禁ずるにあらずして、頼むやうにして、やさしくとゞむるに用ふる詞なり。そは、下のおさへに置く詞にて意なし。故に、ふるく萬葉などには、かゝる時にそを添へぬいひざまも多し。古今集三の巻に「夏山になくほとゝぎす心あらばもの思ふわれに聲なきかせそ」。おなじく一の巻に「春日野は今日はな熱きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」。おなじく二の巻に「山吹はあやななさきそ花見むとうゑけむ人のこよひこなくに」などのなそ皆おなじ手振りなり。山吹の歌に、な二ッ重りたれど、上のなはなくといふを、かく略したるなり。そを添へぬ萬葉の例は、いと多かれど、一ッ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あくれば、七の卷に「妹があたりわが袖ふらむ木の間より出でくる月に雲なたなびき」。三の卷に「我が舟は比良の港に漕ぎはてむ沖へなさかりさ夜ふけにけり」。後世に、此のなその詞づかひの所を、そのなを略きて、そのみにて、勿れの意をきかせたるあり。古今六帖にも「わがせこがふりさけ見つゝなげくらむ淸き月夜に雲たなびきそ」。夫木集に源仲正が、散りぬとも外へはやりそいろ／＼の木の葉めぐらす谷のつぢかせ」。おなじく寂蓮が「牛の子にふまるな庭のかたつぶり角あれどとて身をばたのみそ」などあり。前後の意にて、自からなびくなよ、やるなよ、たのむなよといふ意にきこゆれど、もと誤りつかひたるものならむ。よき口つきにあらずといふべし。なはなのことは、春の卷にもいへり。それを見よ。添ふとは、あるが上にまた加ふる意にて、この淚な添へそは雨にむかしをおもうて、さらでも泣き居る上に、ほとゝぎすまでが悲しげになきて、ものを思はせ、わが淚をつけ加へるなどいへるなり。さらでも泣くに、餘計に泣かすなといふ意なり。時鳥のなくねにはものゝ戀しく、ものゝ思はるゝよしは、古よりつねにいふ所にて、古今集なる夏山になく時鳥の歌も、その意よりにて、なほ同集にも「郭公なく聲きけどわかれにし故鄕さへぞ戀ひしかりける」「時鳥初聲きけばあぢきなく主さだまらぬ戀せらるはた」後撰集にも「あひ見しもまだ見ぬ戀もほととぎす月に鳴く夜ぞよに似ざりける」などいへる如し。○山時鳥。山のほとゝぎすよとよびかけたるなり。

○一首の意は、草の庵の夜雨に心もしめりて、すぎさりしむかしのことの、いろ／＼と思ひ出でられ、身にしむかなしさに、淚をこぼして、袖さへ濡らして居るを、山時鳥よ、お前までが、さやうに悲しげになきて、なほさらに人のことなど思ひ出さしめて、わが淚をつけ加へしむるなよといふことにて、草庵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の夜雨、身にしむ折り柄、ほとゝぎすまでが、悲しげに鳴きて、一層身に染むけしきなり。草の庵夜の雨、涙、時鳥の詞ぞかりにても、自から身にしむものをとりあはせたるを、いひまはし方も、また、あはれにおもしろく、調といひ、趣きといひ、誠にしみじ〳〵と身に染むけしき、これらこそ、詩の美を見るべきことの葉といふべけれ。古今集の夏山になく時鳥心あらむものおもふわれに聲なきかせぞ」といへるも、おなじく、さらでももの思ひてかなしみ居るに、夏山のほとゝぎすよ、さばかり悲しき聲をきかせて、もの思はしむるなといへるにて、おなじやうなる心なれど、たゞにものおもふわれといへるよりは、こゝに、物おもふに、草庵の夜のしめやかなるけしきを取りあはせたるは、一層身にしみておぼえしむる所ありて、一入深く詩の趣を得たりといふべく、且つ、心あらばといふごとき、うちつけたることなきも、なか〳〵に、浅からず。また、涙なそへそといへるも、聲なきかせそといへるよりは、一層面白き趣を得たり。もとよりおなじこゝろにいひ定むべき歌にはあらねど、夏山になくほとゝぎすよりは、草庵の雨夜なく時鳥の方、身にしみておぼゆる深浅はありとやいはむ。



續人名

釋　法　忍

上州へんのゐなかにふうふのものあり。夫は江戸へいでゝかせぎけるが、江戸にて、またつまをむかへ侍りける。在所の妻は、此のことを聞きながし、少しもうらみず、家げふをいとなみ、しうとめをやしなひ、ます〳〵、孝行をつくし、たよりをもとめて、江戸のつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まの方へ、さま〳〵、物をおくり、あへて、そりやくなし。さいしよのつまのさとは、まづしからず、母、此のことをさゝて、むこのしかたなにとも聞かず、たらはぬ身の上を妻にまかせて、くらうをさせ、わがみは、江戸にて、ことつまをもち、えようをすること、親への不孝、女房への不實、かた〴〵もつて、ふとゞきなり。それをしらぬかはに見て居るしうとめも、心にくし。わのほうよりすてられぬさきに、家をのきて歸へるべしといひけれど、かのつまこたへて申すやう、女の道は、二たび心をあらためず。をつと死すとも、かさねてことをとこにまみえず。家をまもりて、しうとめにつかへ、おこたる心なく、たゞ一すぢなるを貞と申し、よくしたがひてわたくしなきを順と申すよしうけたまはり候。ことに天子に十二人、國取御大名に九人、さふらひに二人のつまあり、女に七つのさらるることあり、をつとをさることなし、ことさらわがをつとは、ぢびやうもちゆゑ、ゐなかのいとなみなりがたく、御屋敷へみやつかへし玉へど、なにかときかねもおほく、ぢびやうのさはりにもならんかと、あさゆふあんぜしに、江戸にもつまのあるときけば、やみわづらひの時たよりもあれと、かへつてあんどいたしり〳〵、又、此のことしうとめの御ぞんじあらで、御心のなやみともならんかと、ずゐぶんかくし候へど、しうとめには、かつて御存じなき御ことにて侍るに、まことを申さば、たとへみづからがさやうに申候とも、をつとの家を守る道をおんをしへ、御いけんもあるべきはづなるに、さて〳〵かなしき仰がなと、なみだをながしかきぐときけれど、母は大きにはぢいり、かの女房は、ます〳〵しうとめにつかへかう〳〵なしける。まことにありがたき心操にて有りける。此のこと、江戸のをつとや妻の方へきこえ、ふたりともにことなうはぢ入、妻はをつとの方へいとまをこひ、りべつし、をつとは主人へいとまねがひて、在所へかへり、それより、夫婦いよ〳〵、むつましく、家もさかえ、い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まに子孫はんせういたし候よし申事にておはしまし候、女のよきかゞみとかきのべ侍し。

こしのまさとにふうふのものありて、かいらうのちきりふかゝりしに、此のをとこ、いつとなく、そのつまに心ざしうすくなり、ことをんなをよび入れて、あさからずかたらひけり。しかれども、かのつま、いさゝかうらめる心もなく、日かすふりけり。をりしも、秋の夜のねざめがちなるに、袂かたしくひとりねのこしかた行すゑをおもひやり、ねられぬまゝに、ともし火をかゝげかたぶきゐけるをりから、松ふく風の音そへて、鹿の音かすかに聞えければ、

われもしかなきてぞ人に戀られし
いまこそよそにこゑはきけとも

となんうち詠しけるを、かのをとこきゝて、いとあはれにおぼえ、わが身の心なきをかへりみ、ことならはちらひ、よびむかへし女をいたしやりて、もとの妻に、ふた心なくかたらひけるとなり。とにかくに、まことあれどつひには、てんとうのおんめぐみありて、すゑのさかえめでたきものにておはしまし候。

世の中のてかけ目かけのたぐひは、顔かたちをつくろひ、身をたしなみ、つかへるひとをなぐさめたぶらかし、心をうはふといへども、その心まことあらねば、家にあるつまのまことあるには、つひに心ひかるべし。去かるをねたみそねむ心から、をつとへのあいさつもうつくしからず、かほふくらせて見するゆゑ、いよいよあいそもつきて、いつからうよりつかぬやうに成るなり。たとへをつとは、いかやうにくるふとも、こなたは、女の道をたて、かけひなたなうまことをつくし、夜はにや君のひとり行くむといふ古歌の心をてほんにして、ずゐぶん心の玉をみがき給はゞ、つひには玉のひかり、表へあらはれ、をとこの方よりはぢらひて、したひよるべき事にておはしまし候。それをまたで、かんにんの心なく、こゑあらけなきいひのゝしるは、こなたより害をまねくにて、おもひすてらるゝのもとゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にておはしまし候。よく〳〵御わきまへあれ　あなかしこ〳〵

むねにせく心の鬼のねたみより
　いもせの道もわするはかなさ
わき出る水のまことのかはらずば
　いもせの川のながれたえめや

さこし草（七）

故　兒島顧齊

養ひ親につかふるに一しは大切にいたすべき事

子なき人は、他より、子養ひて、その家をつがしめ、老後のやしなひを頼む。これを義子といふは、入れ歯を義歯といふがごとし。されど、始はまことの歯とたがひて、心よからざるがごとしといへども、馴れて、まことの歯にかはらずと歯工のいへりとぞ。されども年たけて、養家に行きたる人は、元來、血肉の親にあらざれど、互に、心にかなはぬことも、多かるべし。ただ、眞實の志をもて、堪忍するが大事なり。蒿蹊翁のいへる、近江の國大津に、何がしなる人を養なひしが、とかくして家内和せず。養子心安からずして歸らむとせし時、ある人とゞめんとて、俳諧の發句いひやりける。

けぶたきは後ほど居よき蚊やりかな

となん。此の句に感じて、居止まり、終に、その家を相續したり。面白きことにてぞ侍る。これは、文雅の德といふべし。凡そ、人の子となりては、つねに、養ひ親の心を推しはかりて、嘸たよりなくおぼすらめと、一きは親しみふかくつかふべし。

明和年中のころかとよ山和の國桂川の邊なる川邊むらといふ里に、義兵衛といへる、やつ〳〵しき農民あり。もとは京何がしの子なりしが、わらはの時より、川邊村、それの家にやしなはれて、養母につかへて、孝な

り。母、そのつかへいみじきを、ふかく悦びて、人、もし、養子といふものあれば、直にうちけして、義兵衛へかくしぬ。義兵衛も、また、已が實子にあらざることは、かねてしりぬれども、わざとしらざる體にもてなして、母の心を慰めけり。そのころ實家は、ゆたかにくらせども、義兵衛、わが家の貧しきをうしとも思はずて、朝となく、夕となく、身を賣りて、辛きつとめをなし。常に、その日その日を樂みて、孝養をおこたらざりしとなり。

會津の城下に、一人の男あり。名を長作とよび。養ひ親につかへて、孝行をつくしぬ。されど、家貧しければ、朝夕の煙も斷々にて、たゞ、おのが身を賣りて、わづかの賃をもて、父母を養ふ助とせり。あはれにも、其のいたりて難きは、父母ねがふ食物あれば、風雨をもいとはずして、かなたこなたと走りもとめて、これをすゝむ。父母の快く食し給ふをみては悦べることかぎりなし。誠に、母の稚き兒を愛するに同じ。時有りては、そののぞめるものと思ひ、多く持かへることあれど、父は却て、是を怒り罵りて、或は、追ひ、杖などとりて、打たゝきしこともありとぞ。されど長作つゆうらむるけしきなく、只わが、不才覺なるゆゑなりとて、一しは憂ひけりとなむ。義兵衛、長作二子の孝狀、くはしくはこゝに漏す。(名のその傍にありて世に行はるゝものなり)嗚呼、世間に多きためしにて、養子の身として、養家の風義をみだし、朝夕、已が身におこり、智をふるうて、養父母へのつかへをおこたり、家をほろぼすにいたるものあり。又、養家まづしけれど、父母の老ぬるをも見すてゝ、あらぬ不義不孝をなすものあり。これらのともがら義兵衛長作において、何の面目かあるべき。ふかく此の二子を信じて、常々、そのさまを慕ふべし。

(なはり)



主從心得草

諏訪 忠元 寄贈

樂好み親のゆづりを賴む人
　貧の基と棄てしるべし
若き時夢の浮世と樂好む
　人の長生老の乞じき

何でも、家業をよく覺えて、晝夜出精して、暮さねば、一生は送りがたし。親のゆづりぞかり賴みにして暮す人は、親の財寶を、直に失ふ人なり。何でも、我かせぎ出して、家來けんぞくを養はねば、役に立ぬ人としるべし。何分にも、我家業を、よくつとむる人でなくては、上々吉の人とはいひがたし。親のゆづりを賴みにして、今日の家業に怠たる人は、下々の下人としるべし。一生を空しく暮す惡人なり。萬の畜類にかはる事なし。利根がましき口は、御無用。

司馬温公家訓にいはく、金を積みて、以つて子孫に遺す。子孫、未必ずしも、是を守らず。書をつみて、以つて子孫に遺す。子孫未必ずしも、是をよまず。隱德を冥々の中につみて、以つて子孫長久の計略をなさんにはしかずといへり。此の通りに相違なし。人々、隱德を冥々の中につみて、子孫長久のはかりごとをなすべし。是、子孫長久、第一の法なり。又、子孫に、金銀財寶を、澤山に殘しても、是をよく守らず。かへつて、金銀財寶がある故に、驕奢淫佚の元手となつて、身を害し家を亡ぼし、子孫へ不淨の種をまく事あり。是によつて、あまり財寶をのこさんとするよりは、身分相應の善事をしてくらすべし。あれも子の爲。これも子の爲と、あまり强慾をかわくは、至つてわろし。我子に着たや、とらせたや、目連尊者の母親を見たやうにするを、地獄へ落てなんぎする。其の時には、誰も助けてくれる人なし。目連尊者を見たやうな大德な子があれぞよけれ共そんな子は、一人もない。皆惡子ばかりなり。地ごくへ落ちてもあげてくれる子は一人もな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し。爾らで、一人ころびの、一人なんぎなり。此の事を、よくしつて、身分相應に善事を致し、家身の後生を願ひ、御念佛を唱へ給ふべし。子供の爲めかりを思うて、御先祖親達の追善も、ろく／＼にせず。我身相應の善事にも遣はさるは、無智の至りなり。子孫に福なければ、何ほど財寶を遺し置く共、守る事あたはず。皆失うてしまふなり。又、子孫に福あらで、財寶を與へず共、繁昌すべし。爾らで子孫へは、陰徳積善を殘すより外に術なし。陰徳も、人をあはれみ、人をすくひ、人の爲をなすが最上なり。無理な慾をはからず、慈悲心を先として、陰徳をなすべし。左すれば、子孫繁昌疑ひなし。陰徳といふは、人見せ名聞にせぬ善根の事なり。此の故に天地の感應にあつて、大福徳を得るなり。爾るに、今の世の人は、名聞人見せにする善根多し。夫故に、功徳も、少なし。天地の感應は猶なし。

（以下次號）

教梯抄（二十）

家集　二條入道大納言家にて

山家述懐　頓阿法師

なほふかき山のおくにとおもふこそ
かくてもすまぬこゝろなりけれ

釋　教（二十三首）

續古今集釋教

釋教の歌の中に　中務卿親王

世をさめ民をたすくるこゝろこそ
やかてみ法のまことなりけれ

（集名逸）題しらず

後伏見院御製

をしへおくそのしな／＼の法のかど
ひらくる道はひとつなりけり

拾遺集哀傷

極樂をねがひてよみ侍りける

ごくらくははるけき道ときゝしかど　　仙慶法師
つとめていたるところなりけり

後拾遺集釋教
三界唯一心　　伊勢大輔
散る花もをしまじとまれ世のなかは
こゝろの外のものとやはきく

千載集　同
煩惱即菩提の心をよめる
式子内親王家の中將
思ひとくこゝろひとつになりぬれは
こほりも水もへだてざりけり

新古今集　同
題不知　　僧都源信
われだにもまづごくらくに生れなば
しるもしらぬも皆むかへてむ

同　同
十戒歌よみ侍りけるに不偸盗戒　　寂然法師
うきくさの一葉なりともいそかくれ
おもひなかけそ澳つしらなみ

新拾遺集　同
中務卿宗尊親王
こゝろなき春のあらしもやまざとの
ぬしある花はよきてふかなむ

新古今集　同
不邪婬戒　　寂然法師
さらぬだにおもきが上の小夜ころも
わがつまならぬつまな重ねそ

玉葉集　同
前大納言長雄
をみなへしわがしめゆひし一もとの
外にこゝろはうつさざらなむ

續後拾遺集　同
不妄語戒を　　權僧正聖尊
津の國のなにはのこともいつはりは

後の世かけてあしとこそしけ
　前大僧正慈鎭

（集名逸）不殺生戒
たれも皆わが身をつみておもふべし
いのちは惜きものとしらずや
　同

新集集　千首歌よみ侍りける中に不自讃毀他戒を
われをのみふかきになしてぞそま川や
人をわさ瀬にいかでくださむ
　春宮太夫師兼

（集名逸）妙觀察智
はれくもる人のこゝろのうちまでも
そらにてらしてすめる月かな
　法印良覺

（未完）



辨似抄（承前）

赤松景福

いな

萬葉九長歌　鳥が鳴く東の國に古にありける事と今までに絶えずいひくる

萬代集　今も又花をし見れどいにしへの人の心ぞ身にしられける

此等は汎く、古昔に對していへる今なり。

萬葉一　熟田津にふなのりせむと月まてば潮もかなひぬ今はこぎてな

古今三　音羽山けさこえくれど子規こずゑはるかに今ぞなくなる

此等は、即刻といふ如く、其の時に當りていふ今なり。○右の萬葉の歌はこぎこなこぎてな兩訓ある中、今右にかける方を取つ。

拾遺集　忘るなよ別路におふる葛の葉の秋風ふかば今

歸りこむ

古今八　立別れ因幡の山の峰におふる松としきかば今歸りこむ

此等實は、月をへ、年をふるばかり久しき後のことなるを、容易く程も經ぬやうにいへるものにて、未來をいふ今なり。

又今もかも（萬葉に今日もかも」といへるもあり）はたゞ今かといふ意にて、今も（昔もなどに對する）の義にあらず、萬葉に今しはしとあるは、今はの義（今暫には非ず）今しくはも同義なり。又、今しのしも助辭の添はりたるものにて、こは、歌文ともに見ゆ。

萬葉十上　青柳の綠の絲を春風にみだれぬいまに見せむ子もかも

是は、常の今に非ず、いは助辭まは間なり。花待つい間にとあるも同じ、此のい、いゆきいこぎなど用言の上に附ていふ言、最多く、妹い君い關守いなど體言の下に附けていひ、此のいま、或は伊妹の如きは、體言の上に附ていへる者なり。

さやの中山　さよの中山

古今十二　東路のさやの中山なかなかに何しか人をおもひそめけむ

同二十　甲斐かねをさやにも見しかけゝれなく横ほれふせるさやの中山

千歳集　よなよなの旅寐の床に風さえてはつゆきさふれるさやの中山

此等はさやの中山とある例なり。

新古今　故郷の今日のおもかけさそひこと月にそちぎるさよの中山

新後撰　まちわかすさよの中山なかなかに一聲つらきほとゝぎす哉

續後撰　旅寐するさよの中山あけたてばゆくてにわくる峰の横くも

此等はさよの中山とある例なり。

右二例とも多かる中に、さやの方、稍、古く、其の例も多き様見ゆ。八雲御抄、及、宗久の都のつとなどにも、さやの中山とあり。十六夜日記、曙記の如きは、二例ともに見え、或は文にさよとありて、歌にさやとあるも見ゆ。師長公の當國の任にて下られし時、土人に問ひたまへば、さよの中山と答へし由、又、或人の問ひしには　老翁のさやの中山と答へし由もあり。此のさやさよ五音相通也と、前人、既にいへり。按ずるに、そもさる事ながら、此の山は遠江國佐野郡(野は野洲郡阿野郡の例)なれば、元はさやといひけむを、佐夜(夜は加夜郡夜須郡の例)ともかきしより、遂にさよとよみて、歌などには小夜の意といひなしゝか。さて今は、いづれにても詠みいでゝ宜しきなり。○或書に、夜の意をよまざるには、さやといふとあるは、後の無稽の言なるべし。古歌に夜の意にも、さやとよめり。又、源頼政のさよの長山といへるもいかゞ。

しら

古今四　天の川浅瀬白波たどりつゝわたり果ねばあけぞしにける

新古今　藤袴ぬしは誰とも白露のこぼれてにほふ野邊のあきかぜ

此等の白は不レ知といひかけたる者にて、此の例、常に多し。

千歳集　雪ならむ籬にのみはつもらじと思ひとくにぞ白菊のはな

此の一首の意は、眞の雪ならば、一面に積りて、籬にのみは積らじと思解くにぞ、しらるゝ、白菊の花といふにて、前の不知の例とは異なり。總て言掛は語尾までには掛らぬが多かれど白といふ言を知の義にいへるは珍らかなり。

前回のくまでの條に、左の一節を補ふ。

断止言を承くるまでは只加行變格なる由(堀翁の説も是也)いひしが、萬葉十四下にもみづまでとある

を思へど、多行活語にも、此の例あるか。（初學日本文典には、既に之を擧げたり。）但しもみづの活に付て、未、定がたき考あれど、文長ければ、此には述へず。又、同集九に「及還來」とある句を「かへりくまでに」とよめれど、本文に依れど「かへりくるまで」と訓みて、宜しき所にて、こはくまでの例とするに足らず。

廿二番歌合

諏訪忠元寄贈

小杉榲邨先生判
河邊鳥

壹番

左　勝　　久我建通

谷川のさゝの岩波うちむれて
　水あびすゝむこま鳥のこゑ

右　　南部利恭

墨田川清きなみまにうかひつゝ
　なかれもあへずかもめ鳴なり

このつがひもなは左まさりたり

判詞に

左の方、二三句、岩なみうちむれてなど　よく詞つがせ給へり、全首山中のさま見るがとし。右の方は初句墨田川とあるに、全首この川の照應おぼつかなし、さればいづれの川にいひなしても、さはる事なき御歌がらなり。この事、判者つねにいさむる所にして、名所を取出むことには、其の取出づる處に限れる照應ありてこそ、せむする所も聞ゆなれ。歌合には、くさ〳〵の心得方ありて、先達よりいひ傳へならひ來る故實あり。前にも評するが如く、當座歌などいふものには、心得方けちめあるべきものとす。かゝる不注意もあなる、此のかもめにまさるなる、こまどりの聲とぞ

貳番

左持　前田利嗣

隅田川行かふ舟になれ〳〵て
おどろきもせぬ都鳥かな

右　諏訪直子

こと〻はんすみた河原のみやこ鳥
むかしをこひて鳴わたるなり

この左右、申旨ある持と定む

判詞に

左右の隅田川、みな、都鳥をとり出給ふは、こ〻ぞ限れる景物なり。かくありてこそ、この川をよみ出たまふかひはありけれ。然るに、左の四五句の事實は、しかるべきも、今少しあやあるべく取なさむがいはゆる歌の旨なるべうおぼゆかし。右も初句に事とはむとうち出給ふからに、結句は、なきわたるやと、とか、なきやわたると、など必、かへりてにをはといふものにいふが格なり。

それこれを論じいはんには、か〻る申旨あるを以て、まさりおとりをわかたず。

三番

左勝　池田茂政

水淺み川邊にあそふひな鳥の
ながる〻身こそかひなかりけれ

右　土岐頼知

白鷺のたてる川べをふく風に
あしの戰の音はきかまし

このつかひ、左のかたに心よらる。

判詞に

左方、淺き水にすらながる〻ひな鳥は、いとかひなしといふ事を、一わたりきこゆと申さむ。右方四五句の心はべ、格たがひつるにか。もとのま〻にては、判然しがたくきこえたり。されば、右の方をすつるはかなきこ〻地す。

四番

左持

釣人も歸る野川のゆふまぐれ
鷺はおしまにたち殘りけり　津輕承昭

右

うろくつをとりはまんとやしらさぎは
河の汀をはなれざるらん　中橋隆美

この左右かいなでの持と定む。

判詞に

左も、右も、いと海邊の新案にして、事實はあるべきさまながら、歌調の品等は高尙ならずなむ。

銀杏ちくの葉

こは、昨年の十二月の三十一日、大北芳太郎氏の、ひとめぐりの、みたままつりに、おのれがものせし吊詞なり。氏は皇學館の助教授にて、文學に熱心なりき。銀杏、三角生、ひつじは等の別號もて、田園文學に、才筆を揮はれき。氏が、歌文を本誌に寄せたる、ちなみあれば、その終焉をも、ひめたちに、聞えまほしくて、

井上頼文

世の中に何はあれども、身のさかり人のむなしくなりしぞかり、はかなく口をしきはあらじ。まして、家を興し、身を立て、久方の月の桂も手折らんと思ひかけつる君はや。文の林にわけいりて、言の葉の花を摘み、うるはしき大和錦織りなしてむと、いそしまれし心ざしはや。あはれ、其の青雲の高き志も、さく花の匂ひふかき心も、ゆくりなくつねなき風にさそはれ、徒に、淺茅が原の霜と消えはてゝ、今はたゞ、むなしくかたみの石文のみ、殘れるぞはかなき。

あはれ〳〵思ひ出れば、いまより五つとせのむかしなりけり。おのれ、皇學館の教授の末につらなりて、もはら敎の鞭とれる頃、きみは、まだその館の生徒にておはしけるが、雪を積み螢をあつめて、いそしまれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し功いちじるく業を卒へて、やがて同館の助教授とはなられぬ。さるにいくほどもなく、病に犯されて、志をのぶることわたはざりけれど、つねにうちなげきていはるゝは、共に業を卒へし、同窓の友だちの、今は、おほかた、それぞれのつかさ得て、おもてを興し、または、おの〳〵學び得たる學術もて、勢ひ猛にふるまはるゝことよ。然るにおのれ、ひとりたれこめてのみあらんは、いとほいなし。かねては、下田ぬしよりねもごろに、さづけられし言の葉の道のおくがきをきはめ、あまねく、天の下にしきほどこしてんと思ひしを、かくながらなすべき業もせで、むなしく月日を過さんことの口惜さよ。いかで〳〵人なみの身となりて、名を擧げ、家を興し、母の心をもなぐさめでやは。いかで〳〵力の及ばん限り、病を治め、とくすこやかなる身とならでやはとかこたれき。おのれも、いまだ、病のすが〳〵しからで、引籠りてのみわかし暮しければ、同病相わはれむといふ諺もあるを、まして境遇さへひとしければ、君が病の、一日も早く癒えよ、わこたれよと祈る。

主治醫なる、西岡國手は、わのがやまひのさまをおぼつかなく思ひて、とく松青く、いさご白き海濱にいきて、新鮮の空氣を呼吸せよといふ。しからば、心あひたる君とこそとて、さそひしに、君は、いたくよろこびて、吾が醫師もしかいはるれど、それこそのぞましき事なれとて、とみに支度とゝのへていでたつ。川崎、神田、黒瀬のなはでを過ぎ、淸き渚の風光をながめ、二見の浦の浦波に心のちりを洗ひ、江寺の幽徑をよぢて、千古の松根に息ひ、正覺寺にたちよりて、海水浴のありさまなど見る。おのれ、さきつ年、三橋ぬしの、暑を、此の寺に避けて滯留せられしを、下田ぬしと、共に訪ひしちなみあれど、こたび君と、こゝにて病を養はんと、其のよし、住僧に告げ、座席からんことなどちぎる。淸渚亭にて夕げたうべんとせしが、美髯公の傲遊を試むるけはひなれば、眺望には乏しけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れど、茶屋町なる松坂屋にゆかんとて、濱づたひに來れど、松原の木の間、木の間に、さゝやかなるさずき、多く立て列ねて、家々の名しるされたる札、たてわたされたり。このさずきに、人々浴衣ぬぎすて、海中におりたちて、汐あむさま、いとこゝちよし。おのれとりあへず

白波を雪とけちらしいざや君
　八重の海さか踏こえてまし

と謠ひ出でつ。されど、汐あびて、いたく激動せば病のためあしかるべし。たゞ海濱をのみ逍遙せよと、醫師よりいましめられてあれば、たゞ人々の心よげに白波うちかずくさまを、うちまもるのみ。

いたづきを汐の八百重の八汐路の
　汐の八百あひに放ちやりてん
身におへる病のかぎり海原の
　おきべはるかに流しやらまし

と打誦しつゝ、いざや、君も一首謠ひたまへといへば、浪に沈まんとする、日かげの、夕波にきらめきわたるさま、得もいはずさびしきに、吹きすさぶ、松の嵐、うちよする波のおと、とり〴〵に、いとかなしくのみひゞきて、歌よみいでんいきほひもあらずと、年ごろ、銀杏子の名もて、文壇を賑かされし新體詩もいでざりき。

木ぶかき松林を過ぎて、松坂屋につき、夕げたうべつつも、君のいはるゝは、とくおこたれかし。母ぎみの心をいためたまふことの、いとつらくて、咳などいづるたびごとに、耳そばだてたまふことのかしこけれど、及ばんかぎりは、すこやかなる狀によそほひ居るぞ、心ぐるしきなどいはる。君がおやおもふ心の深さは、伊勢の海にもたくへつべく、海人ならぬ、おのが袂も、しとゝにぬれぬ。

日くれなば、母もまつらん、病にもあしかりなん。さらばとて、歸るさも、かたみに、さま〴〵の心づくしをかたらひつゝ來れば、長きなはても長からず覺えき。

七月のころ、おのれは、また西岡國手のすゝめによりて、志摩の國、安樂島に、病やしなはんと、いでたつをりも、また君をさそひけるに、安濃津の病院にて、藥もとめて歸るさ、舟にてとひてん。されど、あすの日の夕つかたまでに、舟よせずは、ゐまゐらぬ事と思ひてよとのことなれど、獨行かん事の淋しけれど、せんかたなくて、こゝより車走らす。

二見の浦をすぎ、江村の橋を渡るに、橋板ところ〴〵朽ちて、いとあやふげなり。

　いにしへのまきゑみよとか橋板の
　　くろめる上に青き苔むす

やう〳〵に、鳥羽のみなとにつく。

このみなとに向ひて、そびえたる日和山は、いとけしきよき山にて、いまだ、おのが敎授たりし頃、運動會の監督として、おなじ職員と共に、あまたの生徒を引つれ、ふりしく雨を凌ぎつゝ、分け登りし處なり。その時、きみは、雨のはげしきに、日和山に登るは如何にとざればみ、おのれは、

　とむ゙ついた足や島路の友ちどり

とうめきいでたる處なりけり。遊びにこそは、またもこめ。病やしなはむとて、ふたゝびこの麓に來べしとは思ひがけざりき。鍋が崎を過ぎ中之郷河岸より舟に乘るに、岸べの方に、いと木ぐらく茂りたる森あり。舟人にとへば、赤ざきの杜とこたふ。

　白鳥のとはの入江の波の上に
　　青くうかへる赤ざきの杜

きみとふたりして來りなど、如何ながりかはたのしからんをなど思ひつゞけながら、安樂島なる中村氏の方につきぬ。次の日の夕つかた、海べに出でゝ、千舟、百舟の、ま帆、かた帆あげて行きかふを見ても、かの舟にや乘りておはす。この舟にやと、とさまかうさま、いそべにたちさまよひつゝ見れど、かげだになし。遙おきの方より、ひとむら雲の、やうやうひろごりきて、海原をおほふよと見るほどに、浪の色は、うす墨を流し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たらんが如く、白帆のかげ、やう〳〵見えずなりゆきて、海人が漁とる漁火のかげ、をちこちにきらめきそめぬ。されど、遂に君が舟はよらざりけり。

あら島の島わに立てるひとつまつ
うらさびしとも君はしらずや

とうちかこちつゝ、獨やどりにかへりしぞいとわびしかりし。かくて、君がもとより雁の使にことつけて、二見の松阪屋にて、しばし病を養ひはべれは、歸さには、かならず、など、まめやかにつけこさる。すなはち、

きみ故にふたみの浦もうらめしや
ともあら島にまつとおもへど

と書きてかへします。



（未完）

家兄遺文（七）

白松園主人

○椙川翁訓誡くさ〴〵

椙川翁、常に、子弟を誡めて曰く、（椙川は我父の號也）汝等よき時にこそ生れ來にけれ。われも、今廿年ばかり後れて生れしかば、かゝる、やつ〳〵しきめは見ざらましを。生れ時わろくて、漢學をのみ、ひたふるにまなびしかど、今の世となりて、漢學はとみに見るかげもなくなりきて、半白のよはひをもて、青年書生のともがらとよはひするやうにぞなりぬる。くちをしう、いふがひなきや。いにしへより漢學をまなぶもの、常とて、その學を賣ることをぞ、いたく賤みけれど、上よりめさるれどもつくことなく、ぜにを見ることちりのごとく、貧に安んずるをもて、みづからいさぎよしと思へり。われも、そのくせありて、わかゝりし時、めされしことも、しば〳〵ありけれども、かつて從ふことなかり

しかば、みるまにおいかゞまりて、今は、よに無用のものとぞなりける。今の世は、何の學まれあらぬことなく、學ばんとはりして、學び得ざることなし、おへくちたりとて、よそに見すぐさんも、くちをしくて、いへとまゐるごとに、かれこれつみよみにして、いさゝか得たる所もあれど、やがて岡のつちとなる身を、何のやくぞやと、わろふ人もありとか。

わが書生なりし時は、親よりは、嘗て、學料を受けしことゝてはなく、ある時は、人の爲めにものを寫し、或時は、人の家の米を搗きなどして、餓をふせぎけり。友に秋月といふ僧ありけり。その者と共に、兎角して、少しの米を得たる時は、二日の食を、一時に炊ぎおきけるに、冬の日の、いとさむきに、飯氷りて堪へがたきをも、何とも思はで、豆腐のからをなん、買ひきては食ひにくひけり。なほ米の不足なるときは、例の豆腐のからをのみ食ひけり。さて日毎に、秋月とかたみかはりに買ひに行きけるに、塾には數多居給へれば、かくは數多を要し給ふにこそ、といはれて、始めてそわりけれ。秋月は耻ぢらひて、今は買ひには行かじといひければ、さらばとて、われなん、日毎にいきける。

○甘棠の章

おのれいとけなき時、父に詩經の句讀をうく、甘棠の章に至りて、今より五とせ六とせばかり昔、國の守國をめぐりありきて、あるながめよき丘にのぼりて、床几をすゑさせたり。供なりける者、常に、文も、よくよみけるが、そこのあとに、小松、一本をうゑて、歌かきてたてたり。

手なふれそきりなはらひそ我君の
いこひしあとの松のひと本

このうたは、すなはち、こゝの句をあやかりたるなりとぞ、をしへ給ひける。

○秋の景色（小説雪吹野中の一節）

斯くて、其の年も暮れて、新玉の春をむかへ、夏も過ぎて、早くも、八月の初旬となりぬる。門の柱にう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちもたれて、心づくしの秋は來にけり。など、口ずさみつゝ、外面をうち見やれど、畑の最中にすく〳〵と生ひたてる芋の葉は、秋風に吹かれて、頭ふる痴人のまねするに似たり。野らになまめく尾花は、美人の我をさし招く袖かと疑はれて嬉し。朝には露にそぼりつつ、秣刈る總角の唱ふ聲、耳新しう聞えて勇ましき心地すれば、夕になりて、かり〳〵と鳴き渡る雁音、垣根の虫、杣人の牽きかへる馬の鈴の音、月と共に澄みまさりて、いと物あはれに心悲し。片田舍の秋の景色何となく定めなき世の樣に似て、過ぎし昔の事ども、思ひ出でられて心細し。

いつしか、十三日の夜となりぬ。月は花やかに山の端にさしのぞきぬ。今宵は栗島の神の、宵宮とぞいふなる。可惜宵を、夢にすごさんも、心なきに似たり。月看がてら詣うで見ばやとて、魚名は、一挺の笛を懐にして、立ち出でぬ。門の扉を開きながら、隈なき月をうち仰げば、光り皃に照りわひて匂ひ花やかに、濃き紫の指貫、垣根の桔梗と色まがひたるさま、いとなまめきて見えたり。そよ〳〵と田中の細路歩みゆけば、夜のけしきいはむかたなく、心すゞろに浮きたちて、獨り、莞爾とうち笑まれぬ。路邊の叢の中より、鈴虫の音、足の歩みを計り、稻葉にそよぐ秋風、襟元に通ひて、身にしむ砧の音の、遠く心細氣に聞ゆるは、誰が家の妹子が、衣を急ぐやらんと思はれてゆかし。

○儒者秀齋の娘（小説文の一節）

庭の面の桃の木の、年毎に幹延び、枝廣ごりて、薄緑なす若葉も、やう〳〵、色濃く靑みわたるが如くに、常夏は年に月に、人となり行くまに〳〵、秀齋、例の、三史五經の道々しき教を取りいで、假初の起居にも、はかなき行にも眼を注ぎて、專ら、聖人の法に叶へんことを勉むるからに、百千鳥囀づる春も、女郎花艶めく秋も、世の人につれて浮れ出づる事も叶はず、終日、奥深き窓の中に閉ぢ籠りて、角々しき書をのみ、なよびたる指して、繰り廣げ、又繰り納めつゝぞ、ありける。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

阿岐が心には(阿岐は常夏の叔母にて常夏を養子に貰ふ約束ある者也)山烏の頭白げ、小牡鹿の子胎む時を待つよりも、猶程遠きやうに覺ゆめれど、稚き者の人となる間は、立ちても待ちつべく、常夏は十四十五の春は、いつしか過して、今年十六の春をぞ迎へたる。夭々たる、其の花、蕡たる、其の實、げにもゆかしき樣なりかし。

二山伯養の妻

九龍子

かの女の名はみつ子、字を省君と云ひ、儒者、二山伯養が妻なり。伯養は本、石見の人、少きころより江戸に遊學し、成業の後、居を郭北駒込に定め、專ら程子朱子の學風を傳ふ。その篤學愼行なる、當時江西の中江藤樹に比したりと稱す。みつ子、操行貞正、且、夫伯養に學びて、能く書を讀み、又、史に通せり。伯養の釋老を學ぶや。かの女隨つて、その義を領解し、更に伯養が王陽明を奉じ、後、又、朱紫陽に歸するや、亦、毎に能く、之に和同せり。時人、之を稱へて、夫婦、並びに才學ある者、只二山伯養と貝原益軒とあるのみとなすに至れり。一日伯養事ありて、將に門を出でんとするに際し、たまたま、報火の鐘聲高く響き渡りぬ。みつ子を顧みて曰はく「火遠きやうなれど、必ず及ばざるべし。然れども、若し漸く逼らんとせば、則ち、吾歸りて、汝を携さへ去らん」。而るにいまだ數分を經ざるうち、風勢急に加はりければ、忽ち延燒、竟にそが近隣に及びけり。されど門人等、切りに、速く災を避くべしといきまきて促したつれど、みつ子自若として曰ふ「良人出づるに臨んで、妾にむかつて、火逼らば、必ず歸りて、共に行かんと云ひ置けり。然るに、今良人を待たずして、免れ去らんとす。これ良人の言を奉ぜざるなり。良人の言を奉ぜずして、以て、苟めにも生きんとを求めんより、寧ろ死して、女子たる者の節操を全うせんには」と、固く執りて動かず。而

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して、火は、ます〱熾んに、居は、いよゝ危うく、もはや幾んど、かの女が身軀をも害せんとす。しかるに、かの女が顔色猶依然として、變ずることなし。その一刹那、幸ひなるかな。伯養遽てゝ歸り、直ちに倶に共に脱れ去きたりき。嗚呼、みつ子が夫言を崇重し、飽くまで苦樂を偕にせんとの眞情、豈掬するに足らざらんや。これ確かに、かの女が深き素養の然らしめたるもの、明治婦女子のいたく鑑みざるべからざる所とす。寶永五年、伯養に先きだつこと、一年、八十歳を一期として、逝に就きぬ。夫婦共に牛込の宗參寺に葬むりわり。

宮古島の子守歌（つゞき）

まに生

（其の四）

一ばんがもり、ぼとわわさむヨーイ、ヨイ
　姉のこぎ、たけわわさむヨーイ、ヨイ
　ぼどうえるときやんな
　たけうえるときやんなヨーイ、ヨイ
『男子（ビキリヤッバ）やちからヨーイ、ヨイ
墨上手算上手生れやしうてヨーイ、ヨイ
親ならずときやんな、主ならずときやんな、むんが
村、姉の島、かけむみやい
ばんが家よ、姉の家よ
　やどとらまちヨーイ、ヨイ
はんが家よ、姉の家よ
　いむさ家どやりやわまいヨーイ、ヨー
れそめまい、ぴだめまい
　ばいりむみやちヨーイ、ヨイ

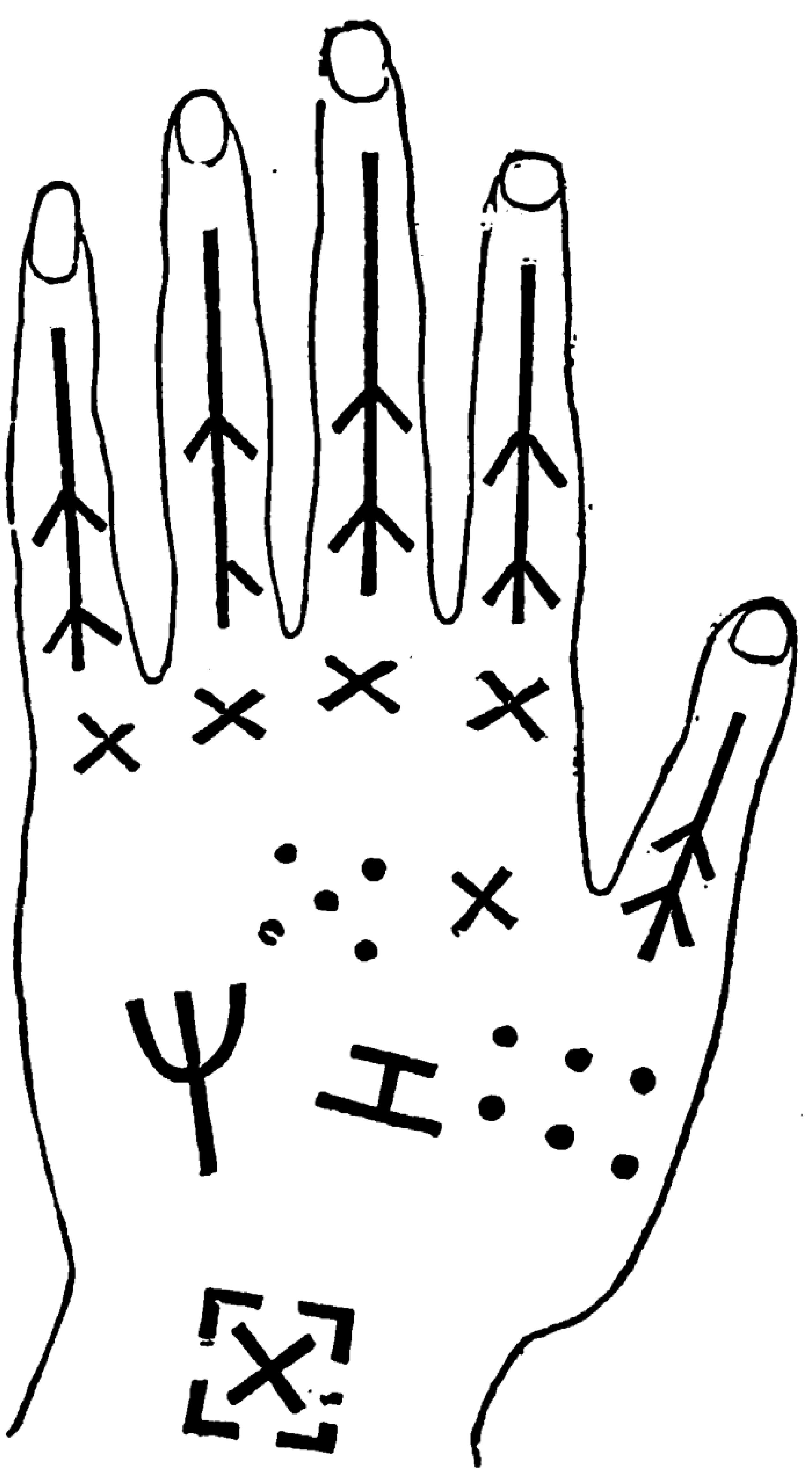
私が、守り育てゝ程大くなさむ、私が、守りをして丈高くなさむ、さて、程大くなり、丈高くなつた時には、男子と生れた（甲斐には）讀書作文にも長け、算盤のわざにも熟達したる人となりて、役人となる時には、私の村を治めに御出になつて、私の家

に宿を御とりなさい。私の家は、小い家の、毀れかかつた弊屋ではあるけれども、首をかゞめても、体をかゞめても、御這入りくだされ。(而して私をも、彼が守り育てたる人ぞとの名譽を得せしめられよ。)となり。

女の兒を守する時には、『印以下の文句をかへて歌ふなり。即ち、

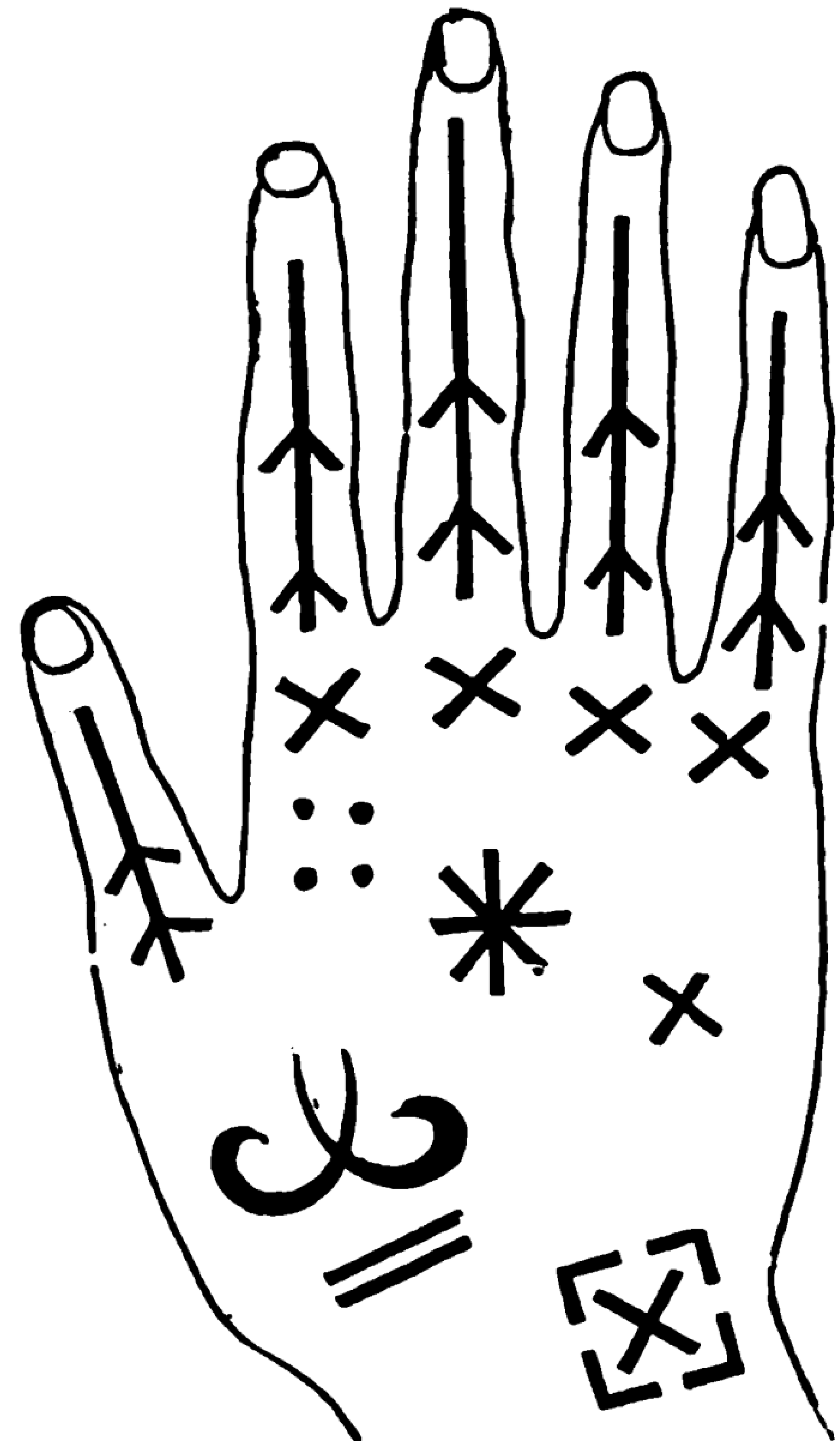
女子(メドムバ)やちからヨーイ、ヨイ
布上手ブズ上手
　生れやしうてヨーイ、ヨイ
ぜんなあげ子なれ
　あねなあげ子なれヨーイ、ヨイ

女子と生れたからは、機織る業に熟達したる人と成りて私の名をも、(彼が守り育てたる人ぞとの)擧ぐるほどの人となりて下されよとなり。ブヅ飛白のことなり。他は、皆前に出でたる語なれば、今は註せず。さて、是等の子守歌を聞くにつけても、彼の地の風俗の一班を想見することを得。舊藩時代の、彼等の終生の希望は、男子にありては役人となること、女子には機織に巧妙ならむことの一事なり。而かも、これ、其の土地の上流社會に於ける理想なり。農民の男子にいたりては、斯くばかりの希望だに起し得ざるほどのあはれなる境遇なりき。女子はさすがに、おしなべて、皆機織に巧ならむことを望めりき。序に同島に行はるゝ、黥のを左に示さむ。



沖縄にては手首より。先の方にのみ黥し、其の模樣も、

大方一定せりといへども、先島諸島のものは一定せず。茲に擧げたるは、其の中の一にて、同島の立津春方といふ人の取調べられたるものを、南洋探驗といふ書に



出せるを縮寫せるなり。即ち、指の上なるは、竹の葉にて、竹の葉の如く眞直なる心ならむがために。十の字は飛白の文より出でたるものにして、織物に上手にならむがために。工の字の形したるは、カシキとて糸をまくものなり。是も、十の字と同じ意にて。鋏も、織物縫物等に秀でむことをねがひて。十の字の四隅に、

┐を以て圍ひたるものは高膳なり、中等以上の人は、凡てこの高膳にて食事する故に、後日の榮華をねがひて、之を。二の字の形にて、長短等しきものは箸なり。●點は握飯の形なり。是等も高膳と同じ意にて。左手の小指の下なる。三叉の槍に似たるものは、トゲヤといひて、邪氣を拂ふために。右手の中指の下なる、十の字を、二ッ重ねたるが如きものは、鳥の足裏なり。是は、何等の意味を有するか、定かならず。是等の黥が、先づ普通のものなり。又好良なる反布を織り出す時は、其の文を黥す。多きは、腕頸より臂頭に至るまで、隙間なきほどのものあり。是等は、最も、人に羨る丶織手なり。

この黥、沖繩縣下、一般に古くより行はる丶ことなるが、方今、學校教育も盛になり、人々開明に赴きて、到底、永く、この蠻俗を陋守するものなかるべき勢なり。まことによろこばしきことになん。

はゝその露

はゝそ

諺に、一代身上、三代はつゞかずとて、祖は、たゞにがきを食し、からきをなめ、やう／＼に起しゝ身上、子の代に至り、やう／＼おとろへ、孫には、遂に亡ぶと云ふ。これは、祖父なる人は辛苦して、やがて一代身上と云はるゝほどになりたれど、子はからき思ひも、つらきめも見ず、やう／＼奢り來るを、其の子は、いよいよ暖かに着、あくまで食し、ぜいたく習ひとなり、遊惰つねとなる。遊びて奢れば山も空しとの例へ、遂に、いみじかりし身代もくづるゝに至る。あやしとせざる所なり。故にかしこき徳川家康は、天下を定められし後も、よくつゝしみて、倹を守られしが、三代將軍家光に至るや、やう／＼奢りて、さま／＼の御遊興はては、躍りをいたく好ませ給ひて、遂には伊達なる衣つけられ、御好の髪にわげられて、自から舞ひ給ふ事さへあり。をりしも、その仕度せんものとて、御鏡



に向はせられ、さまざまに粧をこらしをられ候ふ處へ、青山伯耆守參ゐられけるが、そのさまを見るより、あわて、御鏡をとり、庭へなげ捨てしに、家光公、いたく怒られ、狂氣やしたる。よも正氣にはあるまじと、御氣色も、たゞならぬを伯耆守は泰然、席をすゑ、將軍には氣や狂ひ玉へる、此の頃の御ふるまひ、天下をもあづかり給ふ御心に、かやうなるはしたなき御事の勿体なし。これ亂の元なり。さるによつて、其の禍を除きすてしにて候。權現どのが、むかしをも思召出られよと、憚からずのべしに、諫言は耳に逆ふ。家光は、大に怒られ、何はともあれ、身のつかふものを庭になげ出すとは無禮の限りなりとて、御前遠慮を仰せつけられぬ。其の後諸臣の諫めも重り、思ひかへす折や來にけん。先非を悔ゆると共に、伯耆守が、先きの諫言を至極に思召され、遠慮の御赦免仰せ出されぬ。伯耆守は、將軍の心のあらたまりしをよろこび、拙きもの、申上げし事、よしとさへ思召させて、此の後御あやまりなくば、御前へまかり出るに及ばず。我等まかり出で候はゞ、却つて御あやまりもあらたまりて、御ためによからずとて、遂にまかり出でずして終られしとなり。必竟徳川氏の十五代も連綿として榮續したるは、かゝる忠義の臣のありて、いさめ敎へしによる所多からん。家は、女によりて保つと云ふ。あはれ、姫たちよ、太平にまかせ、身代にまかせて、いたづらに奢り長じ、遊び惰り給ふな。

禽獸の言行

田端の隱居

才もなく、能もなきに、親類緣者の才能地位にひかれて、位を得、名を得、富を得て、自から得たりとし、高くとまりてほこりをるは、狗の樹の上に登りをるが如し。引く人のすぢの絶えなむ、忽ち地上に落ちて、あかはぢをかき、毛色をも損ずべし。危しとも危ふかる

べし。おとさりまゝ子とて、砂の中にすみをりて、あとへ〳〵とすさる虫あり。そのさまは、さながら、まゝ子が、まゝ母の呵嘖にいぢけて、すねてあとへすさるに似たり。また、小兒の時はかしこく、父母の敎にたがはず、よく勉强し、親にもやさしく、兄弟ともいつくしみ、萬事大人しかりしを、年長け、少しく智慧づくに及びて、なまいきとなり。親にさからひ、兄弟をおろそかにし、遊びを好み、萬づれろかに、おとしさりする人あり。之は心のおとさりまゝ子にや。つまらぬ事をくや〳〵と思ひ案じ、思ひ過してはてはてなく、はては我から身を亡ぼすものあり。之蚯蚓と云ふ虫の、我から悲しみ鳴きて、はては土用の暑き日に、自から身をやきて死するが如し。世にありて、何の役にもたゝず。益もなく、いたづらに食をはみ、蔬菜を食しをる人は、油虫と云ふ。螽斯に似たる貴公子あり。又子を生みて、何の敎へも施さず、生みつけしまゝなるあり。之は動物の親なり。動物とて、鶯は、よく鳴く事を敎へ、獅子は千尋の谷中に、其の子をおとして、とく力を要する事を敎ふ。人として、子を敎へず、たゞ金魚の如く、生みつけしまゝなる、又耻かしからずや。慈烏の子は、よく反哺の孝をなす。鳩は、雌雄の禮正しき鳥なりとぞ。其の子、又、三枝の禮あり。燕は翅生ふるや、はやく親にそむきて飛ぶ。其の子、また、親に不孝なり。烏すら親の敎へに從ふ。まして、人をや。人のおやたるものはぐくまずであるべからず〳〵。

ねむけさまし

後暌

○人に愛としがらるゝものは
幼稚園に行く稚兒たちと　偸み食ひせぬ猫の兒と
快馬の穩順なると　物覺のよき學校生徒と　淳良なる家婢と家僕と　珍書と名畫と　正直な小官吏とぐらゐであらう……僞君子の道德談なんぞはいやなものよ……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○どうしても忘られぬものは
父母養育の御恩と　好いお友達と　ゐらいお世話になつた家と　懸賞に當撰したる自分の名歌と名文と　それから…幼年の時に教はつた書とくだらぬ小人にけんつくを喰はされた時……數へて見ればまだまだ幾つも〲もある

○留めても留まらぬものは
春の雪と　暑中の料理と席を逃げたがる客と　潮の滿干と順風に流を下る船と　猿が果子を見つけた時と窮人が役に有りつきさうな時と滊車の發した後と……先生が良い後任者を得て辭職した時と……先づこんなもんでせうよ

房州日記（第三回）

柴田　しづえ子

さてこの時、またもや船子どもの、肩にすがりて、助けられつつ、入り來りしは、おのれらのひと群なり。こたびは、媼のさと心得て、大桶に湯をとりて、その用意す。彼等も、やう〲足あらひ、顔のごひなどして、上りくるに、おのれは彼等をもたすけつつ、母のふし給へる、室にとほりぬ。時に午前四時十分なり。東の空はの〲と打ゑらみ、怒れる海には、雪の山をもうちあげ、名さへ知らぬ白き鳥の、そのあたりに、立ち舞ふさま、見るだに心細し。おのれらが捨ておきし滊船は、そがおそろしき海の中に、左右にゆられつつ、とどまりけるが、やがて、滊笛一聲怒れる浪を、やぶりつつすすみゆきぬ。されど、夜の明けはなれゆくままに、嵐はやみたり。今はうつ白浪の音のみ、雷の如くひびきたり。母はめさめて、ここは房州の北條の里なるかと、とひ給へり。おのれその始終を、うち語りたれど、涙にむせびつつよろこび、世にもめづらしき、この宿の人々よと、かたりつつあたりを見れど、初めより、母の枕上につきて、温めかつは、冷やしなどし

て、看病しくるる人の、年も三十路にも近からむと、見えし婦人の、顔青ざめたるが、斯る田舎人には、めづらしきまでなよやかなるが、今はお茶よ菓子よと、はこび出したれば、おのれは、此の婦人こそ、正しく、此の屋の主婦なるべしと、厚く禮をのべしかば、あなかして、此の海の常として、風の吹き荒れぬれば、土用浪と、俗にいひつたへて、たつ浪のはげしけれど、此の三日程さきより、此の里の漁夫どもは、よべの嵐はまちかまへしものなり。まして夜中ばかりより、雨さへ加はりたれど、そが海岸に住む者の義務として、助け參らせんのこころにて、我家は、今暁二時頃よりおきいでて老母なる人の、湯をわかしなどして、終夜すがら、滊船の中にて、苦しみなやめる乘客を、助け參らせんとて、船子どもをば呼び起して、用意すれど、あやにく、おのれは、一週間程前より、腦の病におかされて、今は身も自由ならず、心のみいらだちたれど、本意なうはべり。見もなれ給はぬ、賤が家居も、また旅の一興とおぼしめせ。露心おき給ふな。早や君達の疲勞もいえなば、水の流れも、他生の縁、此の里にとまり給ひしも、里の神のしろしめす所ならむ。里見殿の舊跡もあれば、願はくば長居し給へ。今日はおのれも、病のおこたりたる心地して、よろづゆかしきやうなり。などいへるに續きて、此の宿の主人なるべし。さきに船にてたすけ參らせしはおのれなり。おのれは、この家の主人なり。よべよりあやぶみつゝ、滊船の着港すべき時をも、まちうけたりしが、思ひきや、けさ傷害の滊笛と、烽火とは點ぜられて、そが暗號は、あげられぬ。されば、いざと船子に命じて、吾を忘れて、棹もち船にとび入りたれど、浪たかく、風さへに吹きはらはれて、例の時間にては、滊船のあたりに、着くことあたはず。進まんとすれば、流されて、辛苦して滊船にとりつきたり。あはれ、一昨日は、男子達を助け參らせしものを。まして年より給へる、御婦人のゝかでかたへ給ふべき。賤しけれども、我が家は商家に

もあらず、漁夫にもあらず、農夫にもあらず、たゞ田地は人にまかせおきて、おのれらが、祖父なる人の遺言にて、かゝる御痛みをたすけ申すべき心にて、昔、此の家をこゝに、建築せしものなり。いざ見給へ、室毎に海の上、坐ながら、うち眺めやらるゝものなり。されど世のうつりゆくさまは、うたてあるものにて、おのれの代になりては、此の村の役場にいでゝ、一村の盛衰を、はかるべき重任を、身に負ひたれど、拙き身なれども、一向此の村の幸運を計らむと、朝夕心砕きたり。君達はたゞ人にはおはしまさまじ。いざ、何くれと都會の狀況敎示し給はゞや。さこそ榮光にあらめと、いひつゞくる赤心に、そが、けだかき人柄のおもひしられて、いとはづかし。いまおのれより、語りつゞけなむ、この家の由緒も、しらせもすべきやうなれど、おのれは、未だ、身の疲に堪えねは、いらふる言葉もくるしくて、たゞ、その親切のみをぞ、謝したる。夜はまたく明けはてゝ、日は、山の端高く昇り、眞白く見えし海の面には、黃金の花咲きいでたり。時に老嫗は、朝飯の用意ととのへ、魚は生けながら料理して、わたらしきものゝみ、さしすゝめぬ。おのれらは、未だ食事の出來得べうも見えねど、漸くに箸とり初めたり。皆人も、勇氣とりなほしたれど、おのれも心をさまりて、今は、おのれらの一群は、避暑の爲とて、かねて、房州北條の里にまち設くる人のあれど、今年は、こゝにぞどまりがたし。また來む年にと約したれど、さすがに、この家族の赤心には、名殘をしき心地す。此の里より陸路にて、房州まで、いくばかりあるといへば、主人、おどろきて、いとおそろしき空のけしきなれば、今暫らく滯在し給へ。わけてこの家のせまければ、他に家をも見出すべし。まして邊土の常として、車夫は日頃まれなる客人には、不當の賃錢をも乞ふならひありて、いと不便なる上に、けふは浪うちあけたる海ぎはの通ひ路いと危險なり。心ながく、二日三日おはしまさで、海には、浪もをさまりもやせんと、しひ

ていひけれど、おのれらが、旅行日限のみじかければ、せんかたなしと、厚く禮をのべて、とかくうちたのみぬ。こたびは、早く、晝飯をさしいだして、そが土産と、その地の氏神の守ふだなど、つゝみくれたれば、こゝろばかりの、封包あたへて、深く感謝す。時に午後一時なり。人力車にて、此の家をたちいでんとして、

別るともいつかわすれむ友千鳥
うき白浪のよせし渚を

と詠みしかば、また一人、

千代ふべき竹か岡邊に宿しめて
すなほにみゆる里のあま人

など、はぐのはしに、かきのこして立ち出づ。時に老嫗も、主婦も、ともに〳〵いふやう、おのれらは、やがて君達の、ゆく手の神に祈らなむと、涙だちたる面には、げに、日頃浮薄なる都人にあへるおのれらの爲めには、彼等が涙の露は、眞珠の價よりも尊ふとし。

（續く）

寡婦姉妹（下）

唐扇

姉の言葉に妹は、鶯につぐ杜鵑の血を吐く思ひにて、かたりいでぬ。たえて櫻の咲かざらむ、春の思もなかるべく、たえて思のあらざらば、人の心もありますまい、妾が物を思ひそめしは、兄様の御病氣にて、兎角人手の入る事あるより、繁く往來せる中に、何日しか弟御の〳〵〳〵、さて思は千々に募れど、さはれ彼方は弟御にて妾は他家に嫁く者、貧しき今の御身には、分家といふこともかなふまじ、よしや憂目はみるの袖の人に物乞ふ身となりなむとも、思遂げなばいかに樂しからむを、と人知れず、鳴くや梢の啞の蟬、葉蔭に身をばもがきつゝ。あれ〳〵彼のざまを見よ、泥の中よりへのぼりて、咲く蓮花の、果敢なく散り、根にかへりて元の身上を知ると共に、吾等が苦勞を知るだろうと、人の侮る姉様を、美しう思ひました、人の涙

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は妾が笑と、かはる無情の世の中や、兄様は逐亡くなられ、弟御は家の主、操正しき姉上のおかげにて、成るべにもあらぬ望を成し遂げし、其の時の嬉しさは、姉様に勝るとも、夢更劣りは致しませぬ。其の翌年は祖母様の、泣いて歸らぬ冥途の旅、いとゞ悲しき思ひせしに、幼き時より母様と御許に馴れて、幾年月妾に増せる御情を、受けし姉上の御歎きは側でみる目も鼻痛う、尚更悲しう覺えました、さやうの身にも後の事共濟むや程なく、産みおとしゝは男の子にて樂みの數は悲しみの數にいやまし、祖母様の、事を忘れて、夢の間も、心は常に妾が子の上、寢ねては衣の面にふれ、萬一の事でもあらぬかと、妾も夫も夢を破り、幾度か覗く子の面、晝は一寸家外に出てゝも、入れむ必ず子を抱き、夫と面を合せざれば、胸の動悸は治らず、可愛きわが子の面には、憂さも、苦さも、悲しみも、怒も何も、彼も、外の情はないといふ、寶や只物うれしくて、笑を隠すに苦しい位、何の様だと申さうか、黄金も玉も入らむこそ、もう〳〵妾が子の爲めならむ、死んでも見たい心地がします、眞に姉様にも子でもあらば、夫の此世の遺れ形見に、慰む節はあらうものを、大分不幸な妾でも是だけは姉様より、樂しき身よと思つて居ます、不幸なは御祖母様、かゝる子花を見のこして、逐にあの世へ旅たゝれました。殘りし人々のいとたへ難き思はもとより、この子さへ亦肉の席の、一片欠けし淋しさに　妾が懷中に泣くよと思へば、そゝろ涙の増りて、其の悲しみは夫の身にかゝり翌年、廣くもあらぬわが村に、惡しき風邪大流行の時、夫は逐に冒されて、うすき蒲團のうきなやみも、藥の効か一度は臥床の上に起直り、腕を刮りて、壯士も、病みては童に若かざりし昨日の御身を笑はれしが、未だ顔の色惡しきに、咳の止ぬを患ひてし、其の心配は、わろきことにのみ仇ならず、忽ち變る煩ひは、前に彌増すいたづき、唾液の色をみし時の、妾の覺えは骨髓に、氷の刄をふれし様に、全身悚ひあがると共に、兄様の病

をおもひ、兄様の死を思ひ、姉様の御身に及ぶや、今日の妾が身を覺悟しました、實に世の中に神様は、在りや無しやあるならば、そは惡魔の神々ならん。其の時人の話によれば、夫の病は兄様に、初まりたるものならで、昔より、系統に添へるものゝ由、昔の祖は如何ばかり、畏き罪ありて、さる死を得しかば知らねど、毛程の罪も更に無き、其の子孫家柄迄、及ぼす理なかるべきに、更に解らぬは神の意でござります、手に手を盡し効なく、唇を漏る血潮の波に、御身はいとゞ痩せ細りて、遂には、永き別となりました、如何に姉妹なればとて、揃ひも揃ひて二人まで、生命の半にもいたらぬ二十歳前後に寡婦とは、何の因果でござりませう、れゝお目覺め父様を、夢にみて悲しいか、此處へ出で御辭儀しな、よく來た、是が妾の子、未だ細げれど頼の柱、坊は善い子よ孝行者、泣くなといへば默ります、褒めてやつて下され御客様、嬉しさ勝りし報には、悲しの數もいや増り、妾が上は兎に角も、此の子の健康に生ひのびて物の覺えの付ける時、人には父様といふものありて、學校で習ふ書物は勿論、帽子に玩具の劔まで、それに買つて貰うなれど、われには母様といふものばかり、棒は持つな石投つな、素跣になるなどいはるれば、外に出でゝ友達の、兵隊遊にはまるにも、肩身のせまく何日も〳〵、後の方に廻さるゝ、さても殘念父様は、何が爲め吾に在ぬか、亡くなられしものならば、どんな御顔の人なりしか、向家の太郎の父様、あんな厭な人ではあるまじ、それ〳〵彼處の次郎の父様、善い子といへば吾は大好き、あゝいふ善人いであつたらう、見たいものだと、一筋に思ふならんと想遣れば千々におもひみだるれど、さはれそれを末の心得、女心に甘やかさず、夫の仕付を身に兼ねて、雄々しく育てあげて富は昔にかへらずとも、大河は早りても水涸れず、今代のは中々解る者と、村の人にも賞められたらば、嬉しうござりませう。それこそは夫の心、妾が操、妾の務といふものゝ、あら可愛やなあの

眼色、顔の形は亡き夫を其の儘なる生寫し、形は失せしも此處に如彼嬉しの影はあるもの、返らぬ事を歎かじと、子故にませる愛さも辛さも子故に難なく薄らぎて、肉を二つの嫁姑今は昔の姉妹の、互に慰めあひて、心一つに暮しました、憎いのは彼の勘助、お陰で今日の此の身の上、背負つても立たれぬ怨恨あれど、其の砌より中を斷ち、畑から歸る畦逕の、端に邂逅ても見ない振りして、言葉もかけずに過しゝが、油の有丈搾りし後に、滓までねぶる根性が、女ばかりを侮りて、聞きたうもない鬼の口、一時の間は如何でもあれ、一家路傍に迷ふのを、血筋を分けし吾等、側で見て居られる義理なし、已が嫁になるならど、金の簪に玉の櫛、姉子も共に引取りて、霞の奥庭花飾り、樂の有たけ、盡させん、諾といへとは何の事、寢言も大抵に爲どよきに、揃ひも揃ひて鬼の子は、親にましたる寢惚者、數多度なるよせ文は、片腹立ちてみるも厭、爐の火に燒くもきな臭ければ、其の儘割きて裏下駄の、鼻緒をすげし事もあり、假設佛に誘はるゝも、二度と嫁かじと決めし身の、地獄の鬼の空言は、振向いても見ませうものか、側でみて居る情なしとは、さて〳〵口は重寶もの、路傍に迷ふと迷はふまいと關うて貰う事はなし、たとへ餓死するとても、汝の世話にはならない程に、餘計な情は氣の毒なれど、屋敷の塵塚さては又、何處のか果てに棄てゝ貰ひませう、喃姉樣。

子は親に似ぬ怜悧者、未だ年若き汝が身の事、心密かに危みしが、鬢の解毛そよぎもやらぬ、雄々しいかなや、かうてこそわが妹なれ、オホヽヲそれは此方の事御客樣御免下され、取りのこされし寡婦姉妹、人のいふのが路御解りでございませう、さアそれからが梶をたえ、術も汀の捨小舟、三人が上を如何しませうか、家道具を賣代なし、僅に得たりし貯蓄は母樣夫弟の、藥の代に一厘なし、唯のこりしは其代の何分一も贖ひ得たる、さゝやかなる家屋敷のみ、田畑なけれど耕ぎもならず、男なければ貸しても呉れまじ、如何して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明日を送らうか、學校でも卒業なし、物を知りたる身にもあらば、幼き者の教師となりても、わが身一つは過されん、せめて手業の優れしならで、人の襤褸を繕ひても、渡るに辛き針先の、細き生命は立つべきも、ふつゝかなる妾等には、これとて覺えし業もなし、悲しき秋は襲ひ來ても、身は露霜の置き所のなきに、何もて松の操を保たん、悲しや諸共に、外の木の葉と散るべきか、此の時染々思ひました、筑摩の鍋を重ぬるも、世間には能くある習ひ、二夫に見えぬ女の身には、是にましたる恥あらじ、愚なことよと思ひしが、元より再び嫁く意で、人に許す者はあるまじ、誰も〳〵操を守り、再戻らぬ決心ならんも、賴みし夫は情なく、先から無理に離らるゝか、はた又妾等二人の樣、外に賴のなき上に、夫に此の世を去られて見れど、後にのこりし其の身は如何に、親兄弟の前もあれど、人の門に物は乞はれず、さりとて死には尙更されず、製絲會社の絲繰女、機業會社の機織子などに、さる身の者もありと聞きます、あゝ〳〵如何にもあはれな事、それ等の、自分で生活すれば、さる中にも優れし際、それさへ出來ぬは詮方なく初の心も遂に反古となり、結局舊の家に戻り、止むなき事情にせまられて、これは飽く迄厭ながら、再緣せねばならぬものでござりませう、悲しい事ではござりませぬか、他に自活の道あらば、さうなる者もありますまい、されば手能は大事なもの、人一人の躾をなさず、二夫を見るなと敎ふるは、もしも離られた曉は、死ねとの事かと思はれます、さりとて今は死に度くなし、二夫をみる氣は素よりなし、貴家では引取らうといはるれど、不自由極るれ許に三人御厄介にはなられず、いでや身こそ不束なれ、人一人の身体なり、たとひ賤しき業なりとも、力の限り働きなば、手は二つ足二つ、一つの口を糊されぬ事あらじと、玆に愈々覺悟して、人々の厚意を謝し、其の住家を賣拂ひ、寺に近き此處に移り、夫の墓を守る傍、往來の人の渴を濕し、何つしか覺えし藁仕事、草履鞋縄

莚などを造りて、細き烟もたえ〴〵ながら、どうかかうか如此して居ることで御座ります、初寡婦になり際は、間世は善くはいはざりしも、今は左程惡くはいはず、女の力に成りしもの、命もいとゞ弱かるべきも、さる人のを穿く氣になれば、自然行義も善くなると、先生樣が仰せられたとかで、村の小學の生徒さんで、草履といへば誰も彼も遠いも關はらず此處迄來て、己れ己れのを買つて下さります、苛き浮世も、誠には敵のないものでござりませうか、ホヽヲヽ……、

涙の底の眸を据ゑて、子の顏をみまもり居たる旅人帽子を引寄せぬつくと突立ち、あゝとんだ事を聞きました、たまの休暇に涙は不吉、いざ〳〵行きませう、是は眞の志、いやさ何お茶代、取つて下されと蟇口をはろきて店を出づる、後には女の呼ではる聲々、何地行きけん形は見えず、只答ふるは峰の松、風に梢の音を傳へぬ。

（終）

意氣（六）

白魚女史

足引の山がくれなる櫻花、風にも知られでや、咲きも殘さで、散りもせず、今を盛り。白雲も霞も絕えたる、今はた何のかゝるらんと、ひとりごちつゝ、もちたる杖に、路のべの樹木をうちつゝ、はきたる靴に春草新草をふみしだきて、花の梢近くうちより、春におくれたる花かと空見たるは、菱形の帽子に、一見して、大學の學生と知られたり。年の頃は廿四五歲、色白く、眉太く、高き背に似合ひたる服、襟かざりの眞中に金星一つ、胸にも天の河の如く、長くきらめきたるは、まさしく時計のくさり、此處にも、二つ三つかゞやく指もて、ひねる八字のひげには、やがて、紳士中の紳士なりけりと、濃くかけり。

山守りは云はゞ云はなんとて、一枝を手折りけるが、エー散りたるはと云ひつゝ、かざしもせで地上になげす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、又一枝、それをもなげすてたり。木は幹をふるはして、はる〴〵と紅淚を注ぎぬ。

はるかに見たる妹二人、いたづらなる事をする人かな。あな、すみれもいたくふみゆきたるはなど、つぶやけど、げにはうはけきやうと稍に高く、鶯も聲合はしぬ。二人は思はず梢を守り、おりなす錦の唱歌をうたへは、なを殘る春うららかなり。

知らぬまに、大學生は近う來り、春川さんと聲をかけたり。少女はおどろき見かへれど、かつて知らぬ人、けうの思ひに、たゞぢつと、其の人をうち守れど、知らでや、春川孃、れのれは、君にちなみある百川、いつぞや霞の間にかひまみてより、忘れず、今日もあこがれ來にたるをとて、ぢつと見かへすさまもなまめかしきに、二人はなほけうの思ひに姉妹顏を見合して答へもせねば、さては知ろしめさでか。何はあれ、これは兼ねてより、君に參らせむとて、別に調へたるもの、ゆるからんか、ゆび出し玉へとて、己れが指にせるダイヤモンドの指輪をぬきて、姉なる花子に贈らんとするを此方は思ひがけぬ事に、たゞはずかしく、否々と頭をふるのみにて、はか〴〵しき答へもせず。折角、君に贈らんとて調へしもの、他女のせがむもうるさし。とく指出し給へとて、彼方は無理にも贈らんとするを、なほ強ひて否みつゝ、求むる人に與へられよ。越人にはさやうにものは用なしとて、其のまゝ走りて家に歸りぬ。

母樣〳〵、あな父樣も歸へらせ給へるか、父樣、憎くき都人が、風にだに知られぬ花をいたづらに散らし行き侍るよと云へども、父と母とはしきりに語らひをりて、省もせず。父樣、母樣と二人はなほ呼はりつゝ、いつしか父母の間に膝をさし入れたり。

憎くきは百川、おのれは內務省の奏任官、しかも五萬からのしただいにありながら、人と僞名して、高利貸のまね、人を仆して金銀を貪る貪欲人、彼れが人知れず金を貸しをるとは、聞きをつたが、主人の負めを身



にひきうくる、今の世にはありがたき、正直律儀の儀助が作る丶もかへりみで、元利にもあまる家倉をむさぼりとるやうな人非人とは思はざりし。瓜のつるに、茄子は出來ずと云ふ。人非人の忰に誰が愛子をゆるさん。けがらはし。先日の寫眞も早速かへしてしまへと人の怒りに、覺えず激して、こつ〳〵と煙管がんくびを火鉢に叩きつくるは花子の父の梢、
さては、あの百川さんが、貸主なりしかと、母も思ひがけぬさま。ウン、あの百川が人と僞名して、自分の金を貸し、儀助に印をおさせ、一年の期のべをゆるさず。さらで、巳も恩ある主君のため、證に立ちたる上は家倉にて償ふべしとて、いさぎよき、男らしき儀助の心に耻もせず。ウン、それは當然の事とて、當然ならぬ家をも、倉をも早速奪ひとりたる强慾人、巳も、あの主人には敎へをもうけたるもの、儀助は、其ころ親を失ひて、家僕となり、我にも、まめに世話をなしくれたるもの、作れしと聞きし後は、如何に〳〵と折り折りの心にかゝりしを、ゆくりなくめぐりあひしは幸、今は家もなく、金子もなく、一人の息子はあれど、學ばず事もえならぬあはれさ。あまつさへ、其の身は手足も自由ならぬ病氣、我も師へのため、如何にもして半金を贈れど、今一店を開かれよど云へど、彼方は聞き入れず。强ひての思召ならんには、夫婦はともかくもして過すべし。たゞ、忰を家僕として、君が學を授け給へ。金錢を得んよりは、息子を人となし給はる、が、何よりのおめぐみとあるに、さは安き事と承諾して歸り來にたり。明日にも其の人の來るべし。こや、花に云ひおく。きさまは、よく掃除夫が〳〵とあざけりそつたが、馬鹿にする事はならぬぞ。世に貴きは身分でも、身代でもなきぞ。たゞ、仁義にあるのみ。かれは、貴き義僕の息子ぞ。惡口する事はならぬぞ。雪子もさやうでと、おごそかなる父の命令、はつとばかりに平伏して、かしこまりました。御意を必ず守りましやうでござりますと、わざと、いつまでも〳〵疊に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

頭をすりつけをるに、もはや、父を馬鹿になしをる。貴樣は誰がために生ひ立ちた。他處に行け。さつきも都人の前で、猿の如き眞赤なる面して、かはゞしくは、口も開けずをつたではなきかと、口には罵れど、威嚴をもれて、ふと、片頰の笑み、ほんに困まりたる娘よと、母も小言しつゝ、ころ〳〵と笑ひぬ。



冬川　　東久世通禧

大井川ゐせきにかゝるしらなみの
おとのたかくもなれる冬かな

寒曉鐘　　鍋島直大

空はれておく霜さむきあかつきは
かねの音こそさえわたりつゝ

寒夜衾　　高崎正風

あつふすま打かつきても思ふかな
水にわれたるさとの夜さむを

森冬月　　前田利嗣

かけふかき森のもみぢ葉散はてゝ
照る月かけのさむき夜半かな

社頭冬月　　津輕承昭

白ひけの社のもりにかせさえて
てるかけさむし冬のよのつき

寒夜月　　大谷光尊

小夜ふけてまとにさしいる月影に
いとゞ寒さの身にぞしみける

枯野霜　　前田利鬯

うちわたす枯野のすゑのとほやまの
みどりも寒さけさのしもかな

庭落葉　　岡部讓

とはれじのこゝろがまへも知り顏に
おち葉は庭をうつみつるかな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冬雲　宮地嚴夫

あしたより雲立まよひしくるへく
見えてしくれぬ冬のそらかな

曉千鳥　北郷久政

吹きすさむあらしもたえし曉の
そらにさやかに鳴く千鳥かな

山寒松　坂正臣

木枯にあらそひかちしやま松の
いろはこりかにみゆる冬かな

紅葉深　三輪義方

露しぐれそめしはいまだうすかりき
しものしたなるにはのもみぢは

楠正儀　足立正枝

菊の花かをらむ秋をたのみにて
しぞしは雁の北にゆきけむ

中江珉山の妻　佐々豊水

難波江やあしわけ小舟わけかねし
操をゝしき北むらのまつ

霜夜月　近衛貞子

さゝの葉に雪の積るとみゆるまで
霜夜のつきのさえわたるかな

池水鳥　鍋島榮子

こぞよりもことしははやく池水に
下りゐる鴨のこゑきこゆなり

夜間水聲　蜂須賀隨子

ともし火のあたり靜けく更る夜に
こゝろをすます水のおとかな

寒松　前田朗子

のへみれぞ千種はかれて小松のみ
目にたつ冬になりにけるかな

寒樹風　南郷柳子

霜かれのふもとの木々にこゑ寒く
みねより下す小夜あらしかな

冬山里　松平健子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山里のかきねのみちはしもはしら
かたくつれしてふむ方もなし

竹霰　佐藤艶子
霜さやく窓のくれたけさよふけて
あられさへふる夜はの寒けさ

冬月　鶴久子
風ましりふりし時雨のあめはれて
おち葉が上につきのこほれる

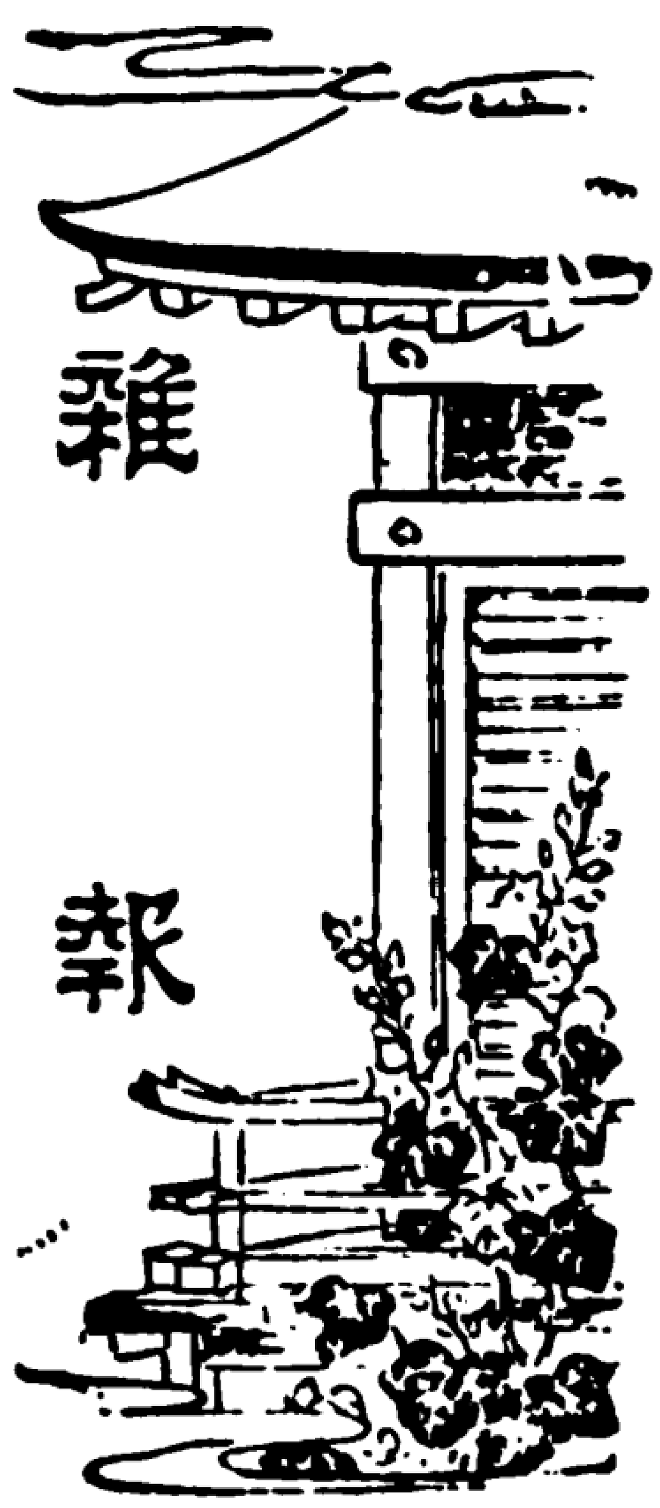
寒山暁月　服部磯子
木枯の風ふきさゆるやまの端に
こほりて殘るありあけのつき

窓寒月　小川直子
冬かれの木すゑの月夜はりの窓を
すきとほりたる影のさむけさ

楠公　森川眞鶴子
武士のかゝみとなりて湊川
いさをは千代になかれけるかな

暮秋月　足立みつを
くれてゆく秋をあはれを大空に
殘してすめる月のかげかな

正誤　百九十三號文林欄の歌の下「岡部讃」の三字を脱せり又百九十二號の同欄夜虫の歌の二の句は「それさもわかぬ」のあやまり



●御還幸　近衛小機動演習天覧のため、栃木縣下に行幸せさせ玉ひしが、御豫定の如く、十八日午前九時廿分栃木御發車、午後零時廿分御還幸せさせ玉へり。又御奉迎のため、皇后陛下は同日上野停車場へ行啓、御同列にて還御せさせ玉へり。

●一條公爵夫人薨去　一條公爵夫人良子、今年三十二歳にならせられしが、兼て病蓐にをられしが、療養効なく、去月廿二日、赤坂福吉町の本邸に於てみまかられたり。生母は、近衛家より入輿ありたる良雅院にて、母子共に、賢婦人の名あり。姉君は、福子の方と申し、備前池田長準氏に嫁し、是亦、令名高し。伏見宮を始め奉り、近衛、二條、德川慶喜、同家達、池田、細川、柳澤、四條、諸公は何れも親戚にて、畏くも皇后陛下の御姪に當らせらる。危篤の事 皇后陛下の御耳に達るや、一たび行啓となり、侍醫を差遣はされ、御料理を賜り。典侍命婦等をして、晝夜看護を爲さしめ給ひたりき。御悼の程、今更恐察するも愚なり。

●孝女與利子（佐々豐水報）熊本縣肥後國、菊地郡水源村士族原隆義が妻なり。實父は、同郡戸崎村、赤星性英といふ。慶應二丙寅年十九歳の時に原氏に嫁す。舅姑に孝養篤厚なりければ、明治八年と明治二十九年との兩度に褒賞せられたり。

原隆義妻　與利

其方儀ハ兼テ、貞節ヲ守リ、能ク孝道ヲ盡シ、舅數年ノ病中看護厚ク行屆候段奇特ノ事ニ付キ、其賞トシテ、金貳圓下賜候事。

明治八年七月十七日　白川縣

熊本縣士族原見謝養母　與利

平素、順良誠實ニシテ、亡父隆義ハ、明治元年以來、東京ニ客居シ、其ノ不在中ニ、與利家ヲ守リテ、舅姑ニ孝養ヲ盡シ、舅清門ノ病ニ罹リテ、數年間床蓐ニ在ルヤ、自カラ、勞苦ヲ執テ、看護至ザルナク、清門歿後隆義ハ、客地ニ死亡シ、其ノ後、姑和佐モ、亦、病ニ罹リテ、動止意ノ如クナラズ、加フル、老體ナルヲ以テ、與利ハ、特ニ看護ニ意ヲ用ヒ、日夜側ラニ侍シテ、藥餌ハ勿論衣服ハ輕暖ヲ旨トシ、飮食ハ嗜好ヲ進メ、其ノ欲スルママニ、時々僕婢ヲシテ、脊ニ負ハシメ、躬カラ佛寺ニ詣シ、家外ニ出ル等、只管、其ノ心志ヲ娛マシムルコトヲ務メ、本年一月終ニ壽ヲ

以テ、卒ハラシメタル等、前後、幾ド三十年ノ久シキ、其ノ志操、終始、一日ノ如ク、洵ニ奇特トス、依テ、其ノ賞トシテ、木盃壹組下賜候事。

明治二十九年二月二十八日

熊本縣知事從三位勳二等　松平　正直

與利子は、嘉永元戊申年の出生にて、明治三十二年は、五十二歳なりといふ。原氏は、菊池家四代經宗の四男、原四郎經能の末葉なり。歷代、水源村、大字、原に居住す。郡の東方にある村落などは、豐後國日田郡に界せる所なり。歷代家聲を落さず、郡中にての名族なり。

●孝女(錦織香竹報)　島根縣簸川郡　莊　原村大字下莊原百九十番屋敷平民亡福田秀三郎三女こま、(十九)は、生出れし年父を喪ひ、母は、宿痾ありて、病床にありしを、こま幼時より介抱に怠りなく、八年の久しき一日の如し。一人の兄あれども、家貧にして、僅に車夫を業とする位なれば、こま女、母の看病の傍ら、兄を助けて、家事の整理を爲すなど、年若き婦人の身にしては感ずべきことなれば、其の譽、次第に高く、去る九月、河野嶋根縣知事より、金を賜ひて、其の篤行を賞せられたり。さる程に、同村學頭尋常小學校教員生徒、及び、仝校卒業生會員等、其の孝悌なる行をめて、天長の佳節に仝校にて、善行表彰式を舉行せりと。先づ式場に、こま女を聘し、校長勝部政太郎氏、これを來賓に紹介して、開會の挨拶をなし「訓導錦織健次郎氏、仝女の行狀を披露し、校長、感狀を朗讀し、教員生徒、及び、卒業生會員より寄贈の羽織地を添へて授與し、一場の演說をなして、大に、仝女の善行を賞揚し、次に、中嶋莊原分署長の演說あり。次に、生徒、皇御國の唱歌にて、式を終れり。當日の來賓は、村役員、村會議員、學務委員、學校醫、警部、巡査、軍人、有志者、生徒の父兄等なりしが、一同非常に感動せりと。

(感狀)人に百行あれども、孝を以て本とす。されば何程、他の行は正しくとも、亦、如何に才藝に長ず

るとも、苟しくも、孝道にして缺くるところあれば、其の餘は、少しも觀るに足らざるなり。茲を以て、畏多くも　天皇陛下の教育御勅語にも爾臣民、父母に孝にと云ふことを、第一に宣ひしも故なきにあらず。然るに、今我村の孝女、福田氏の行狀の如きは、能く　御勅語の御旨趣に叶ひ、誠に、世人の鑑となすに足る。我等は、大に、之を感ずるの餘り、輕品ながら羽織地一反を贈呈するものなり。

明治三十二年十一月三日

學頭尋常小學校教員生徒及同校卒業生總代

學頭尋常小學校訓導兼校長　勝部政太郎

福田こま殿

●殊勝なる女　わが榮華をねがふためには大切なる夫を物の數ともせず、宛ら芥塵の如くに捨てありき、又、所謂、我が身の行末のためには、可愛しき子供を、繼母の手に投げ與へても、他所に緣付きかゝるが多き世の中にこそ、うたてけれ。さるが中に、斯く殊勝なる談を聞くは、喜ばしさも、亦、一入にて、書く筆も、いと榮ある心地ぞする。山梨縣西八代郡岩間村河西寅吉の妻、ステといふは、緣ありて、今より、二十餘年前に、この人の所に嫁りしたりしが、五人の子供を生み、彼是の用のしげき中にも、夫の上、少しもおろそかならぬ樣こゝろがけ、甚まめ／＼しう仕へけり。夫は、心ときゝかぬ所のある人なりき。其に加へて、不幸さへ、打ち續き、所有の田畑家藏も、皆負債の抵當にとられ、其の日の糊口にさへ苦むばかりになりしかぞ、無情の夫は、明治二十二年、今より十年の昔に逐電して、行衞知れずなりぬ。男居りてだにあるを、女の手一つにては、如何はせむ。貧苦は、ます／＼加はるのみ住ふ家さへ、雨に破られ、風に倒され、住家といふも名のみにて、露けさは、野山に起臥するにもまさりけり。世の中の心せまき痴者は、唯、わが一人の苦を避けむとて、殘るべき人々の上をば顧みず。淵川へなど身を投じて死ぬめり。されど、少し物ごゝろあるも

の、いかで、然るおろかしき心を起さむや。スヂは、是よりは心を勵して、朝には霜を犯して、遠き深山に柴を苅り、夕には、氷柱たてる道をたどりて、谷川に水を汲み、松吹く風にも、身を碎き、岩もる露にも、袖をしぼりて、一向、わが子の成人を樂にして働きしほどに、日に月に貧苦も減らぎゆき、冬に至りても、子供に寒き目見せず。春には垢付かぬ衣をも着せらるゝやうになれり。斯れば、いよ〳〵勵みも出でゝ、晝は田畠のことより、夜は織紡ぎと、一心不亂に、いそしみ勤めしかど、村の人々褒めぬものとてはなく、手本にせよとて、女の兄弟子供をもてる人の戒めぐさになれり。されば萬のこと便宜よくなりて、十年を出でずして、夫のつくりし負債を償還し終りて、祖先より傳へられたる家產を復し、今は何不自由なることゝてもなく、子供をいつくしみて、日をおくらるゝ樣になれりとぞ。貧苦に、心を亂さぬだにあるに、斯く、いみじき結果を得たる、まことに羨しき行爲にもあるかな。

●孝子　陸中國江釣子村に高橋文次郞（十九）母は、人の忌み嫌へる赤痢病に罹りて、隔離舍にぞ移されたり。文次郞、兼て孝心ふかきものなりければ、憂ひに憂ひて、十餘日の間、衣帶を解かずして、看護を盡し其の効驗にや、日ならずして病癒えしかど、欣然として、手を携へて歸宅せり。之を見聞くもの、いづれも、其の心と行とに感じて、涙をおとさぬはなかりきとぞ。

●彰善　奈良縣大和八木町の八木倶樂部にては創立十週年紀念のため、臨時善行者表彰會を催し、此の程同地晩成尋常高等小學校にて、其の賞狀、賞品贈與の式を擧げたり。來會者は、安藝高市郡長谷原第四課長、縣郡視學縣會議員、町會議員、征淸役軍人、其の他總て二百餘名にして、八木町長は、擧式の趣旨を述べ、次た左記の七名に賞品賞狀を贈與せりと。

木杯一個宛孝子吉備のぶ　勤儉者木村己蔵横綸硯一個宛良婦部たき
木村せい岡本せい　吉備孝子　義僕木上駒次郎

又、左記の故人七名の爲には、石碑を建設せり。

征淸役戰死者吉田市松外二名　善行者森村庄一郎　德實者谷操功績者安田太四郎外一名

●旌表　大分縣重岡村小野郁次郎、妻いと女と云へるは、十三年の間病蓐に在る姑を看護し、且つ夫を扶け、家政を整理し、一家團欒の間、孝養怠りなき、奇特の行を賞し・同村會は小學校校庭に、六百餘名を會して、旌表式を行ひしとぞ。

●養老金寄附　越後國太田村古屋相澤又二郎、祖母（十六）先年銀婚式御祝典の際養老の思召を以て下賜せられたる金員を費消せずして、之を保管し、置き、今回、更に若干の金子を、之に加へて、育兒院創立費に寄附す。

●聾啞治療につきて（こにしのぶはち）

明治廿四年中、東京盲啞學校卒業生某と僞はり、東山道より北陸山陰道を經て、各師範學校中學校郡役所等を歴訪し、身の不仕合を哀訴し、慈惠金を掴收し、足土を踏まず美衣を着け滋味を食ひ、善待厚遇を受け、各地よりは東京盲啞學校に宛て、同人教育の功績を賞揚する感状を送られたるもあれば同校にては卒業生にあらざる旨を新聞及び官報に公告し警察署との交涉もあり一時煩を極めたりしが、同人が西海道に渡り熊本市に入るに及び、同市警察署に於て之を捕へ同市病院長醫學博士芳賀榮治郎氏の診斷によりて果して詐僞者たるを自白せしめ、囚人となして本籍に送られたるあり、其後兩三年を經て府下華族及知名人士の邸に至り聾啞たる不幸を哀訴し慈惠金を着服したる遊冶墮落の書生其の當時小石川區長たりし佐藤正興氏に捕はれ警察署に送られたるものあり、又殆ど同年頃福島縣下より出京したりとて神官某東京盲啞學校に來り按摩術を以て聾啞を治し發音せしむることを發明したれば同校の教員に採用せられんことを文部省より教員の用捨は東京盲啞學校に願出よといはれ同校に到り予は面會の上其術の仔細を問ふに只頸部に要點あり其處を按摩するのみ別に藥餌を要せず若し疑はれんには二ヶ月間雇ひて實地は試みられよと、予は答へり足下の術果して信實ならば二週間自費にて通勤し實示せられよ成績によりては御雇申し予輩も師とすることあるべし、只予輩は按摩をも施さずして發音談話せしむることを知れりとて初學生より卒業生に至るまで最も發音を能くする者を示したるを見て再び雇はれんことを云はずして去れり、或は曰ふ醫科大學に到り三浦醫學博士に面會し按摩術を以て聾啞を治する發明云々談ぜしに同博士はソレハ感服の到なり予輩多年治療に從事するもの未だ左樣なる簡單なる名法を發見せず、宜しく農商務に到り專術の特權を得文部省に到り採用を請願すべしと、流石に博士は博士丈けの追拂法を知らるものかと感心せしことあり、然るに數十日前府下各新聞に左の如き廣告をなし芝一葉亭に各社の記者を聘し施術を披露せしかば翌日、其奇巧を賞贊したるものさへあり、不審に堪へざりしが、二三の僚友が仝人の宅に參り目擊したる實況を承れば只頸部を按摩するのみと因て九月十七日讀賣新聞上に左の卑見を公にし世の不幸兒を有せる父兄に注意を與へ無益の勞費を省かしめんと欲たりしが、本月二日の靜岡民友新聞及靜岡新報二葉を寄せて其廣告に朱を點し事實を質問するものあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り又四日の時事新報にも同様の廣告を見て再び本誌卑見の掲載を乞ひ、教育に從事する諸君殊に小學校教育に從事する諸君は必ず不幸兒を有せる父兄の顧問たらん事を察す、各教育雜誌餘白を割愛して之を轉載し小學教員の非父兄の參考に便せられんこと望むに堪へず、

聾唖治療院

發音傍聽許諾ス
貧困者手術無料
（東京市下谷區東黒門町一番地）
（大通り東側）
聾唖治療院

世界一大發明採手術治療藥品針灸下用不思議に癒を質驗勿疑郵券三錢送らば規則書呈し質問に答ふ

追て九十九唖か物言ふとは虚なりと疑はざる者なし故に何人たりとも發音傍聽を許すを以て來院實驗すべし

予は聾に非ず、故に聾唖の果して按摩術位で治すべきや否を知らず、然れども聾は原因にして唖は結果なること夙に欧米に定説あるを知れり、前年米國ボトン訓盲院に聾唖にして盲なりしロウラ、ブリッヂマンと云へるが死去せし時、米國ウウスタア市なるクラアク大學總長スタンレイ、ホオル氏をボストンに招聘して、此有名なる女子の頭腦剖檢の全權を委任し、同氏は極めて注意を加へて、腦を取離し同大學に持歸へり、同大學解剖學助教授ドナルドソン氏其解剖を擔任し、極めて長時日と精密の剖檢を行ひしか、其結果只「腦の某部分は某知覺器の中樞なりとの説を確實にし、其所在地を界知せしむるに至りし外には益したる異状を認めざりしと云ふ、生者には剖檢を試む可らず、死者に施せる成績は異状を呈せず、故に聾は今尚ほ神密に屬すと雖唖は決して不治の病疾に非ず、否、疾病と稱すべきものに非ず、去る明治十九年米國カリフオルニヤ州に開かれたる米國聾唖教員大會に於て聾唖といふ熟語は實質に逆ひ不都合なりとて、唖を省き單に聾と稱することに決し、英國に於ても今より五年前、英國聾唖教員第一大會に於て米國と同じく單に聾と稱することに決せり、兩國教育者の意に曰く、聾唖者の言語を發する能はざるは言語の機關に故障あるに非す、全く聾にして生來音聲を聽かざるによりて之を發せざるのみと、故に聾の根治は今俄に望む可からずと雖。唖の救治は醫術よりも寧ろ教育に屬し、父兄若くは教員が反覆丁寧に發音の方法を教ふれば悉く發音せしめ得べし、縱令專門教員に非ざるも熱心忍耐親切ならんには婦人と雖成功すべし、予が知る一武官の妻妾同時に各一子を産し妻の子は男にして妾の子は女なりしが、四、五歳に達し男子は白痴に近く女子は聾唖者たるを知り、兩親の憂悶措く能はず、殊に妾は其子の聾唖者たるを歎き寢食の間にも膝下に於て已の口頭の運動を熟視せしめ發音を練習したる功は、能く已の言語を了解せしめしのみならず、他人の言語了解せしむるに至り本校へ入學の當初、教員一同歎賞せし所なり、本校亦明治十九年春、伊澤修二氏より蘇國人アレキサンドル、メルヰル、ベル氏視話法を傳習し成功せしもの數名あり、此方法によれば極めて精密の發音を教へ得べしと雖、本邦五十音を教ふるには必ずしも此方法によらざるも發音せしめ得ること前の婦人の例に於て之を知るべし、又現に本校初學の級には單に口頭の運動を熟視せしむるのみにて之を能

くする者多し

歐米諸國に於ては啞者の多きを以て其國の教育完からざるに歸し、都邑には必ず一校若くは數校を設け府縣より巨額の金員を支出して常人の子弟と同じく殆ど義務教育を執行し、又米國には公私聾學校百七校あり生徒一萬一千人を數へ、英國には同じく四十五校あり生徒三千六百人を數へ獨逸には同じく九十七校あり生徒六千三百人を數へ、佛國には七十校あり生徒三千八百人を教ふ、是れ皆聾啞の爲に設けたるものにして、盲者には別に建設し其數亦聾學校に讓らず。

以上の四國は人口の上に於て我帝國と大差なきに聾啞の爲に學校の設備此の如く多し、我帝國を顧みれば京都市盲啞院と本校との外には長崎盲院と愛知縣拾石の訓啞義塾の二私立あるのみ、是れ我帝國の實子第の少なき故にず、學齡兒童七百七十三萬人中聾兒四千七百人に近く盲兒亦四千あり、百分比に於て決して歐米に下るに非ず、寧大に超過するが如し、(コンナコトハオトリタホオガヨイノニ)故に予は傳愛君子の一願を乞ひ盲啞學校の建設を促し、教育に縱事する諸君殊に小學教員には盲啞教育に奮勵縱事せられんことを翼望す、並各地小學校附近に盲啞の子弟を有する父兄あらん、其父兄にして其居住の町村に於て其子弟の教育を托する教員を得ば如何ばかりの仕合ならんか、予は他日其方法を記し公評を叩かんとす。

次に聾啞の子弟を有する父兄に一言せん、不幸にして子弟の聾啞たるを知らば神佛に直願祈禱することを止め直に名醫の診察を乞ひ早く學校教育を授くべし、是れ實に神佛の意に協ふものなり、醫術と教育との神佛の賜なればなり、然るに之を悟らず其子弟の不幸を憫み治療を求むるに急なるの餘り遠近を論ぜず失費を惜まず東西に奔走して數百金を費し其功無きに至り初めて悔悟する者本校生徒父兄中極めて多しとす、(予も亦不幸にして當年十五歲なる聾啞にして白痴なる男子を有せり、其幼少の時にして東京盲啞學校の築地に在りし時今は故人となられたる侍醫醫學士伊東盛雄氏が好意を以て同校生徒の診察を引受られ一診を乞ひしに治術なしと申され醫學士中野泰造氏は鄉友にもあり同氏が明治二十二年帝國大學より出張して同校啞生の耳を檢せられたる時も一診を乞ひ更に同氏の告勸によりてベルツ氏の診斷を乞ひしも、伊東醫學士の診斷に異ならず、よりて其前後恩顧ある諸仁及父母舅姑より頻に某神水某神灸を試むること又は某佛德を祈願する勸告を受けしこと再三なりしも皆拒絕したるは經驗を輕んずる嫌なきに非ざるも無益の勞費を省きたるを喜ぶものなり)。

現に昨今新聞に見ゆる聾啞治療院の治術を求め一年餘にして其功なきを悔い入學を乞ふ者あり、思ふに此他に數多あらん、偶其功驗の奇妙を稱し謝辭を廣告する者あれども信する能はず、三、四の發音を能くするを示して以て聾啞を治したるものとして父兄を欺く者には非ざるか、治術者が唱導する如く顯著の功驗があるものならば、先づ醫師及教育者の前に於て披露するを適當とす、然るに其事無くして只新聞記者を招聘し馳走して披露したるは既に眞實正當の術に非ずして只名を衒ひ世を瞞着する手段に過ぎざるを疑ひて可なり。

予は人の營業を妨ぐる念は毛頭之れ無きも、亦不幸兒を有せる父兄が無功の治術に金員時間を失ひ徒勞の奔走に疲かれ後悔せざらんことを翼望する極めて切なりとす。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

附録

聾唖にして盲なりしロウラ、ブリッヂマンの死後頭脳解剖報告

有名なる聾唖にして盲なりしロウラ、ブリッヂマンは西洋紀元千八百八十九年米國マツサキセッツ、ペルキンス訓盲院に於て死去せり、同女はの名は文明國を通じて知られたり、同女の教育の成功は全く故ドクトル、サミユウルハウ氏畢生の力によれり、同女は二歳の時其兩姉と共に猩紅熱に罹り兩姉は遂に死去せしが、同女は辛くして助かりしも聽覺と左眼の視力とは全く之を失ひたれども五、六歳頃までは右眼を以て僅に明暗を區別したりしに八歳の時之をも全く失へり、此大患に罹りし前に習ひ得たる言語は聽覺を失ふと同時に之を失ひ味覺嗅覺亦其機能を呈せざるに至り只全きを得たるものは觸覺の一のみ。

以上は千八百三十七年故ドクトル、ハウ氏が同女を見出し南ボストンのペルキンス訓育院に携來りし時の狀態にして其後同氏は非常の親切忍耐を以て之を教育し其知覺を啓發醒起して教育史上偉大の一事とすに至れり。

同女及びヘレン、ケルラア（明治三十年予が米國遊學中マツサキセッツ州ケンブリッヂなる、ギルマン高等女學校にてケンブリッヂ大學へ入學の豫備として希臘語を他の女生と共に學び居り、休憩時間に面會を求め予が貴名は國に在りて久しく承りしが面語の機を得て甚た愉快なりと申しゝに答へしやう、予も亦遠方の人の訪に預り愉快を覺ゆ、貴國に予と同じく聾唖にして盲なる不幸者あらん、予は貴國人民が彼等の幸福を圖り彼等をして快樂に此世を渡らしめられんことを切望すと云々と口頭にて述べたるを聽き彼國教育者の熱誠に感動して一層奮勵の念を起したり、黒田定治尺秀三郎君はシカゴに開かれたるコロンブス世界博覽會に參り同女が教員に伴はれて公衆の前にて唱歌せしを聽かれたる由予が面會の時は十八歳なり、　歳の時　のために失明しペルキンス訓盲院附屬幼稚園に入り後順盲院に入り卒業して更らに大學に入らんと欲し希臘語の必要あるより之を學ばんとせしに新約克レミントン、タイプライタア會社にては同女のため希臘字を新調してタイプライタアに取付け與へたり、外國の教育者及一般商人まで教育と義狹心に勇めるは羨むに堪へたり）其他の同患者は專門者研究の爲會益の好材料を與へたり、心理學上說明を要する問題となり、神學上神秘の疑問となれり、此盲の如く數覺併失の不具者は五官具備の吾人と同一に思考するか、して思考するとせば其思考を表はす言語は如何、練習若くは傳說の刺衝を受けざる人心は果して上帝の存在を知り得たるや否

此の如き問題は聾唖にして盲を兼ねたる奇異の位置に在る不幸者を見る時には男女と云はず苟も思考を役す人々頭腦を眩惑せしむる數十の問題中僅に一、二に過ぎざるなり。

ロウラ、ブリッヂマンの病歿は數十年間心理學者の注意を惹き同女の心理學上に與へたる利益も決して少なからざるなり、然れども同女の死亡は尙ほ一同深く人智の歩武を進むるならんとは該學者中には數十年間行はれたる說なり、故に同女の死亡の訃音の傳はるや此の道の學者は今や多年神秘の疑義を氷解する時こそ到來したれと其屍を請ひ受け之が研究に從事せんことを求めしに其近親等も斯の如き研究の必要を認め直に快よく承知したればウウスタアのラアク大學總長ドクト

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ルスタンレイハウル氏を、ボストンに聘し此の有名なる女子の腦の解剖の全權を委れたり、同氏は極めて注意を加へて腦を取り離しクラアク大學に持ち歸へり解剖學助教授ドナルドソン氏に委れたり、

くさ〴〵

▲旅行禁止　岡山縣內務部長は、女生徒をして、旅行外宿せしむるは、訓育上宜しきを得たるものにあらず。且つ監督不行屆にして、一般の風紀を害するものあるを以て長途の修學旅行をなさしむべからずと訓諭す。

▲大分の宗吾樣　大分縣馬原村長穴井三十郎は、地方の舊族にして、祖先累代、村閭の長職に推され、名望近鄉に高し。殊に百六七十年前の祖は、頗る義氣あり。民生のため時の秕政を、將軍に訴へて、反て禍害に陷りたることあり。村民、今に、其の恩を忘れず、神の如く尊崇す。

▲源氏物語　金澤市の門閥家成瀨某の藏せる源氏物語五十四帖あり。永正年間伏見宮貞敦親王殿下の御染筆になりしものにて、能某、之を八千二百二十四圓に買取る

▲汽車乘客の便利　官設鐵道に於ては、從來乘車切手發行當日に、發賣驛より乘車するにあらざれば、一般旅客の乘車を謝絶し來りしが、今回、之を改正し、發賣驛にあらざるも、其の切手面到着驛の方向に於ける驛なれば、何の驛よりも、隨意乘車し得らるゝ事と改正したり。但し、乘車せざる區間の賃金を拂戾さず。又、五十哩以上の切手を所持する者は、其の通用期限內なるに於ては、何時にても差支なく乘車し得らるゝ事となりたり。

▲神童　衆議院議員柴四郞氏の養息は守明と云ひ、本年僅かに四歲なれども、才氣溢るゝ計りにて、文及び、書を能くし、曾て、人の許へ、書面を送りたることありて、其の筆法の如きは、殆んど、大人のものしゝが如く、現に、若松敎育品展覽會にて、左の書面を縱覽に供し居れりといふ。

拜啓叔父チヤンヤ會津ハ東京ヨリ寒クアリマスカヲ御

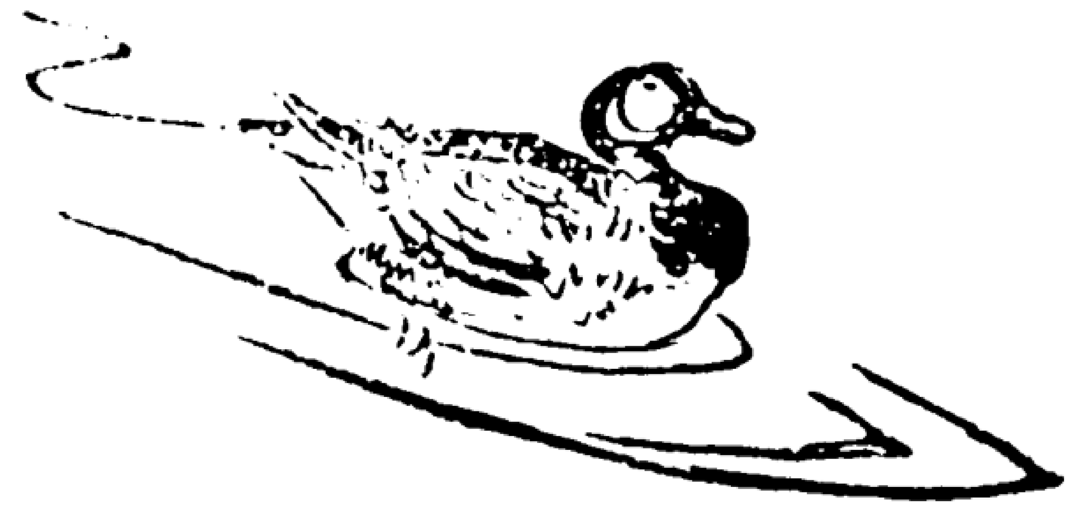
身大切に願マス　守ガ歸京スルト大キクナツタト先生ハ驚カレマシタヨ　會津ノ如クアケビト甘イ柿ハアリマセンガ魚ハ澤山アリマスカラ御出ヨ　南會津カラ守ト同行シタ勝チヤンハ寂シカリ又來ルト云フテ歸リマシタ守ハ友達ヲ失ヘマシタヨ守ノ寫眞ヲ送リマシタ御笑被下度候敬白　　四壷　守明拜

▲あはれの少女　甲府松本守拙宗匠の一女にふみよと云へるかありき。年十歳なりしが、何時となく、父の口吟を眞似て、父の名古屋にありける折、とゝさんよかゝさんと聞く時鳥と記して送りし事ありとぞ。あはれや、このごろ、病にさそはれて、死にきとぞ。ふみよが口吟の、一二を示さんに。朝顔のつはみにはめる筆の鞘　ふじ見える障子の穴やみそさゝゐ

▲韓國人の不幸を憐む　境を異にする國土に來りて、落魄流離する事は、如何に悲痛の事ならんかし。韓國平安北道鐵山郡李知濱字は、邦招（十八）といふ韓人は、我國に於て、普通學を修得せんものと、態々渡航し來

れるも、本國實父の死亡に際し、支送りの金に窮したるにぞ、赤阪署に出頭して、車夫とならんと申出でたりしが、小石川區音羽町七丁目奥田一等軍吏の子息にて、日本橋區役所の書記なる奥田正己氏（二十）は、これを氣の毒に思ひ、李を自邸に招きて、若干の金を與へ、猶同人の爲めに、學資を給して、其の志す早稲田専門學校へ入學の手續を與へたりとなん。人情紙の如く輕薄なる今日、此の義談を耳にするは、心地よき限りなりにこそ。





注意

○歌文投稿について　かねてより書式を掲げ、其の他遵守すべき件々を、常に注意するにも、かゝはらず。多くの中には、其を守らぬも尠からず。總べて、規約をおろそかにするが如きは、最もよからぬ習にて、これより不行届不取締等の弊害は來るなり。然れど、折角に送り越されし歌文を沒書せむことは、甚こゝろよからぬことなれど、斯る惡習をうちすておかむも、如何なれば、以後は、書式にたがひ、期日におくれたる等、投稿規約によらざるものは、沒書とすべし。

○郵便について　歌文投稿其の他編輯上に關する書狀の宛名は、國光社女鑑編輯部と記し、會計に關する件は、國光社會計部宛に必ず爲るべし。從來編輯部へ宛て爲替等郵送せらるゝ方あれど、不着紛失等のことありても、編輯部にては、責任を負はず。又、返信を要する照會には、返信用の郵便切手を添へらるべし。

明治三十三年度月次兼題

一月
- 五日
  - 歌　山家新年
  - 文　新年を賀する文
  - 十二月十五日〆切
- 廿日
  - 歌　爐邊會談
  - 文　わが里の新年
  - 一月八日〆切

二月
- 五日
  - 歌　雪中梅
  - 文　歌文の添削を乞ふ文
  - 一月二十三日〆切
- 廿日
  - 歌　江上霞
  - 文　名所の寫眞を友に送るに添ふる文
  - 二月八日〆切

三月
- 五日
  - 歌　日鴈
  - 文　二月十一の日記（廿四字詰十二行以内）
  - 二月廿三日〆切
- 廿日
  - 歌　春の歌
  - 文　弟妹の健康を姉に報する文
  - 三月八日〆切

敎の庭



十二月五日兼題　社頭落葉

天　四ッ谷傳馬町一ノ五十四　目黒佐喜子

群れあそぶ童も見ねずおちばのみ
ふかくつもれるさとのみやしろ

地　甲府市山田町　名取よし子

詣て來る人もゆるさぬしめの内に
ぬさとみたれてちるもみぢかな

人　大隅國肝屬郡鹿屋村　山田稻子

神さびて茂るさか木のたえまより
ぬさと散りくるあはれもみぢば

秀逸（十二首）

ひえの山神にいのりのことはてゝ　赤坂　羽田みを子
ぬかつくそてにちるもみぢかな

二つ三つみ〆の繩にかゝりぬる　安房　伊東[illegible]壽子
もみちそかみのぬさにやあるらん

手向山かみのみや居もさまざまに　四谷　木村さく子
にしきしきなすみねのもみちは

はふり子が幣をたむくる路もなく　相模　尾崎嘉子
ちりこそつもれさとのみやしろ

さと社みしめのうちもゆるされて　伊勢　河村君子
おち葉ばかりはへだてざりけり

廣前のすゞの音さゆるこからしに　本郷　横山すが子
いかきのもみぢちりみだれつゝ

榊葉のいろめづらしくなりにけり　信濃　岩波まち子
もみぢ散りしくかみのひろまへ

さをしかの秋のふすまと春日野の　横濱　篠子茂子
かみのそのふにもみぢちるなり

おのづから神の手向となりにけり　信濃　岩波后子
かぜにみだるゝもりのもみぢぞ

辻やしろうづもるはかり亂れちる　大坂　西村章子
もみぢのぬさはたれさゝぐらん

み社のみたらしかれてれち葉のみ　越中　伏脇米子
あふるゝばかり散りつもりけり

はるばるとさき舟の山のかみやしろ　淺草　吾妻ちか子
道まとふまでちるもみぢかな

（以下原稿到着順）

たむけ山かみのみまへにちる木の葉　石井豐子
ぬさにかへでのもみぢなりけり

鈴のねもいさものまひしみやしろの　立田原直子

おはしましむくちるこのはかな

あさな〳〵庭きよめするみやもりの
そてにちりくるきゝのもみちは
立田原富子

ひらて打ち音もとたえてみやしろの
あたりさひしくちる木の葉かな
山代豔子

いなりやまあかの鳥居はもみち葉の
ちればちるほどあらはれにけり
田代綾子

もみち葉はおほかたちりて神なつき
もりのやしろもあらはれにけり
永井さい子

かきの木のしたかぜにさそはれて
おつるもみぢをぬさかとぞみる
服部倫子

昨日今日やはたのやまは千木たかく
あらはれそめてちる木の葉かな
友永章子

そめ出しやしろのもみぢちるときは
にはもいかきもにしきしきけり
那須昌子

千　ふるかみのいがきにむちつもる
木々のもみぢをはらふあさかせ
村崎包子

詣できてそでにもみちのふるときは
れがひもかなふこゝちこそすれ
黑田明子

千早ふるかみのみやゐのみたらしに
かげもうつりてちる木の葉かな
下田總子

紅　はよはのあらしにちりしきて
おくしもさむしたまつしまやま
内海順子

きのふけふこからしふきて野の宮の
みかきのもみちぬさとちりつゝ
羽室象子

ちはやふる神のいがきのもみぢ葉は
みつよつふたつちりそめにけり
佐々小孚子

ちりかゝる神のいがきのもみぢ葉を
こゝろのまゝにさそふゆふかぜ
佐々有鄰子

うなゐ等が朝まうでせしあともなく
散りこそみつもれ社のもみぢは
加納鈴子

ち早ふるかみなづきとはしらざらん
もみぢをぬさとかぜにまかせつ
井上てい子

かみなつき人もまれなるみやしろに
風さへさむくおち葉ちるなり
菊地庶子

神さびていよゝたふとしみやしろの
こはは木の葉にうつもれてけり
菊地はる子

神かきにちりかゝりたるもぢ葉は
かぜのまにまにひるがへるかな
渡邊猪子

神かきにあきのかたみとみるものを
こゝろなきかぜにちる紅葉かな
川口總子

神かきをはらへどかぜのちらしくる
木々のおち葉をいかにしてまし
中原虎子

照りあひし紅葉もいまはちりそめて
とり居あらはにみえわたるかな
佐藤三子

うちならすわが八平手にさきだちて
もみぢちりしくかみのひろまへ
佐々宮枝子

まゐて来るひと每ぬさと手向くらむ
かみかきやまのもみぢちるころ
坂田喜美子

御手洗のにこらぬみつをそむるまて
みまへのもみぢちりしきにけり
名取正代子

神のますもりの木の葉もおちはてゝ
まうづるひとのみちたとるまで
横手こう子

人とはぬやしろのすゝのおとするは
おつる木の葉のたゝくなるらん
横手たつ子

千木高くふるきいてふもちりつくし
こがれのにはにゆふひてりそう
今井まん子

みやしろの屋根にこぼるゝ紅葉葉は
辻さみ子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かみなつきしくれさゝもに神かきの
かみのこゝろのにしきなりけり　稲原菫子

ちはやふる神のみまへにぬかつけは
くずのもみちはふりにこそふれ　伊東鶴子

ちはやふる野中のもりのかみやしろ
ぬぎしこかさにもみちちりけり　佐藤きみ子

ちりぬさもなほくちはてぬ落葉かな
みわたすかぎりおちばなりけり　鵜澤千代子

ちりつもるをちばの雨におのづから
のこりをしさやみやしろの上に　神村多賀子

ふゆかぜに木々の梢の葉もちりて
こづゑさびしきみやしろのもり　清河照子

木がらしのさそふもみぢにまつ陰の
ほのかにみゆるいせのみやしろ　佐加井さき子

かみざびて御庭にふかき落葉をば
御井のみかみもふゆや知るらん　辻本たき子

千早ふるかみのみもりはきのふけふ
こゝろなき子らの道すがらはく　志葉多久子

千はやふるいつしのみやの神かきに
あらはるゝまでもみぢちりけり　西川順子

ふみわくる落葉のおさもみにしみて
ぬささみたれてもみぢ散るなり　中澤千野子

千早ふる賀茂のみかみのみやしろに
いさもかしこしかみのみやしろ　酒井成子

みつかきのうちさの木の葉散りしきて
かせにみたれてちる木の葉かな　福岡郁子

かみかきのみたらし川にかげみねし
かみのみやゐもまだらなりけり　桑川ため子

もみちちりにしこすゑさびしも

ちはやぶるかみのやしろも秋はてゝ
こずゑあらはにちるもみぢかな　三木壽子

吹きかへる木の間のかぜの音たねて
かみのやしろのあらはれにけり　木村菊子

めくまさむいそへの神のまさごちに
ちりて綾なすもみちはのいろは　賀茂笹子

風まもるかみのいかきのもみち葉も
ちるけふこそはのかれさりけり　加藤敦子

神かきをこゆるあらしのおさたへて
ぬさとちらすはもみちなりけり　服部萬子

てるたへのぬささみ前のもみちはを
よそにさそへるかせやなになる　服部正子

この月はまことにかみのまされはや
いかきのもみちかせのまゝなる　伊東千代子

もみぢ葉のいかきをこゑて散ゆくは
かみのゆるしのあれはなるらむ　伊東以佐子

お原神のゆるしねつらむもみちはは
いかきをこねていまそちりゆく　河合縫子

あふかるゝ神のみかきのもみちはも
ちれはふしてそみるへかりける　戸倉信子

ぬささちるもみちをみれはたむけ山
むかしのひさのことはをそおもふ　藤村幾子

神かきをめくるしみつもうつもれて
おちはかさなるころにもあるかな　熊谷文子

ちはやふる神のいかきのもみしはも
ふゆはありけにちりそめにけり　上田緑子

信夫やまよひのあらしのあさ絶ねて
みたらしのへにおちばつもれり　村田嘉子

ほの暗きいなりのやしろに落葉して　齋藤はる子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よなよなやさすつきさやかなり
しもふりてたまの宮ゐにまうつれは
こゝろありげに木の葉ちるなり
千早ふるかみのみまへのならの葉の
しぐれもまたでちりそめにけり
くれて行く秋のなごりもしのばれて
なち葉わけゆくかすがやまかな
もりのこゝろありてやのこしけん
にしきのぬささちれるもみぢを
神かきをはらふあらしにうるはしく
たむけのぬさをちるもみぢかな
うぶすなの神のみまへをながめば
もみぢのぬさをかぜぞたむくる
風にちる木々のもみぢはひらでうつ
かみのやしろのにしきなりける
落ちつもるもみぢをみればかみな月
葉もりのかみのやしろさびしき
もみぢ葉を仰ぐ木すゑも今日はおちて
にしきおりしくかみのひろまへ
神なびのもりのもみぢのたねまなく
木すゑをさそふ木がらしのかぜ
ちはやふる神のゆるしや得たりけむ
かぜをもまたでもみぢちるなり
あたらしくちるもみぢ散ちはやふる
かみのみそのゝまつにならはで
社やしろ木たちをしなるこがらしに
みたらしの水はうつもれにけり
ねぎかけて日ごとにかよふひろ前の
みちわかぬまで散るもみぢかな

北原季子
大谷津峰子
秋庭菊子
山本龍子
德永萬壽子
德永廣子
德永識子
小森田輝子
澤田春子
深田十萬里子
井上つさを子
永山登子
横山柳子
岩波はま子

こゝかしこもみぢ散りしきぬさ殿の
きぬはにしきさなりにけるかな
山ひめのおれるにしきは散りしきて
かみのたむけのぬささこそなれ
年をへしあけのたまがきかみさひて
いろあたらしくちるもみぢかな
まつかけにさひしきやしろ立田ひめ
手むののぬさにちりそめてけり
千はやふる神のそのふにもみぢちる
いかきのこけもあきにそむらん
染めつくすもみぢを風のはこびきて
にしき織り成すみやしろのには
くれなゐの泪かさ見しはみたらしの
みづにうかべるもみぢなりけり
かむがきの紅葉のにしきさきそさて
もろくもちるかかぜのまに〳〵
ひろ前にしきしにしきはもみぢにて
さくらのみやも名のみなりけり
木枯しにあたらにしきのこずゑはも
ちりみだれけりかみのひろまへ
みやしろの銀杏のふさ木おちばして
みや居あらはになりにけるかな
こからしは森のこのはをふきちらし
あらはにみゆるうぶすなのみや
宮ひさのあすはまつりさきよめてし
いみにはに又もこのはちりけり
千早ふるかみのみまへのもみぢ葉は
ちりてののちもかくはしきかな
さいへはいさもはかなし唐にしき

岩波文子
安藤やす子
椎野ぬき子
竹村竹里子
敷島花子
岩波先子
岩川まち子
鈴木秀子
吉崎世根子
南里佐多子
都水春子
山根久子
德永そう子
青木たま子
尾島中子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もみぢはのちりかひくもる神ちやま
かけていのれやあけのたまかき　梯野しづ子

たまかきににしきおりしく心ちしぬ
あきの名こりのぬささみたれて　石川南江子

宮もりのあさなゆふなのきよめにも
いさゝきよらにちれるもみちは　石川久子

そらにききおもひし松もやなぎはも
まけしさやちるおちばなるらむ　石川樂子

かむ垣のさきはのかけにありなから
うき名ははやくちりしもみちは　石川類子

ぬささちる神の御まへのもみちはは
なさかもみちのちりしきるらむ　村上操子

かみかきや今日はさこそさまぬくれは
ふむもかしこきこゝちこそすれ　禿眞澄子

ちりかゝる神のいかきのもみち葉の
手向のぬささ紅葉ちるなり　宇高まつ子

こからしにいかきをこねて散る紅葉
にしきはかせのたむけなるらむ　野中明子

たつた山かせのたむくるもみち葉に
かせのあらびはかみもさかめし　佐伯きぬ子

はらへさもちる紅葉ばにおほみやの
いかきのうちもかんさひにけり　森こさ子

手向やまやまはさやけくみやしろに
いかきの上もにしきしきけり　萩原草子

立田やまかみの御まへのもみち葉を
ちるゝおちはをにしきさそみる　内田さく子

紅葉葉もみれのあらしにちりはてゝ
間なくもかぜのさそひけるかな　片山あや子

あらはになりぬふるの御やしろ

村しくれふるのやしろのひろまへに
ちるもみち葉や手むけなるらん　館脇ます子

いすゝ川きよきなかれにたへまなく
さらすにしきは木の葉なりけり　伊賀なを子

ちりかゝるもみちを袖にこきいれて
たつたまゐでのいへつさにせむ　月塚戯子

宮もりのあさきよめするそでの上に
たねすもかゝる木々の紅葉ば　諸井久㒵子

山かぜのふく夜のつきにてりそへて
木の葉ふりしくあけのたまはし　星野のぶ子

十一月五日兼題　勤儉

天　富山縣氷見郡氷見南上町八五　伏脇米子

いかに汲み入るとも、籠に溜る水やはある。勤むことの大切なるは、さることながら、いかに勤むとも、儉にせさらむ何の甲斐かあらん。人々、この世に立ちて、善事善行を企て、或るは、公利、はた公益を計らんとするも、勤儉ならずは、財足らで、また如何ともなし難かるべし。されど、「竹の根の下這ひ渡る節の間も、」日影を、仇に暮すことなく、ひたすら勤み、さて世の中には、「單なる人もそある」と知りて、奢を戒しめ、儉にすべきなり。かくて、思ひ立つに、成らぬことやはある。もしあらば、そはやがて、心用ゐ力盡しの足らぬなりけり。

年々歳々花相同、歳々年々人不同、月日はを止みなく

めぐりて、いつしか老の年波寄せ來り、今の昔にしかず、后の今にしかずなど、なにがしのいひけむを、かねてより思ひ取り、後の悔なからんやう、心懸くべきなり。今日暮れてなほ明日ありと恃むべからず。これを恃めば、遂になにごとも成る時なけん。

明日ありとたのむもはかな今日くれて　明くるもおなじ今日にざりける

思へは、夫の外に勤み玉ふものを、婦たるもの、内にゐて奢に日を送り、さてのみあるべきことかは。あはれ、籠に水溜ることの例ある世となりとせむ。さりとて。

地

甲府市山田町　名取正代子

恭儉己を持し、博愛衆に及ぼすとは、これ即ちかしこき勅語の一句にして、我等が、世に處して一日も忘る可らざる事なり。近來、世の進むにつれて、萬の事やう〳〵華奢に流れ來り、貴賤貧富の別ちなく、なほ此の後いかに長じゆくらんと、實にいとうたてき事の限なり。中に就きて、ことにいみじきは、被服と裝飾となり。これ即ち、外見の美をよそほふものにして、顧みて其の内部を探れど、いふ可らざるものあり。そも〳〵、人は各分限あるものなれば、よく其の分に應じて、奢をつゝしみ、儉素を守るは、人の世をいとなむ道にして、ことに家の政を司るべき婦女たるものゝ務なり。然るに、大方の婦女子、みだりに外見をよそはふ事にのみ汲々として、裝飾に千金を抛ち、或は美服を着けて、下賤の者も、高貴の婦人に擬し、醜も艶とならんかときそひあふもの多きは、これ大なる誤にしてあさましき心なり。かくてあらんよりは、寧ろ我分に應じて、萬に質素を旨としたらん方、なか〳〵に、其の志の程美しく貴きを見るに足るべくや。さて、おのれをつゞまやかにして、後、あまりあれど、之を貯へおきて、圖らざる天變地異などにも、飢餓の憂なからんやう、豫め用意し、なほ進みては、世の爲、人の爲に、義捐するの美擧をもなし得るやう心かくべし。かくてこそ、まことに、家をとまし國を愛すとはいふべけれ。

まをすもかしこき事ながら、もれ承る所によれば、我が　天皇皇后兩陛下には、國事多端の折柄とて、萬の事、つとめて御儉素を旨とし給ひ、御めしものゝ如きも、いさゝか破れふるびたりとて、御心ともし給はず、侍從の方、さすがにかしこさのあまり、御更衣を乞ひ奉れど、やむ事なく、御肌につけさせ給ふもののみ、更へさせ給ふ程なりとか。かゝる御ことを承るにつけても、かしこさ限りなくて、暗涙にむせぶ斗りなり。今日、暖かに着、食に飽くの民草、いかでかへりみずてやは。まして、奢りに長けて、衣食裝飾の美に、あ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く事を知らざる、忘れものに於てをや。

人

但馬國出石町　西川順子

軒のしづくも、久しくおつれば、かたき石をも、うがつべく、ちりひぢも、積れば、やがて山とぞなりぬべき。時計の針の、たゆみなくいそしみて怠らざれば、月を積み、年を重ねて、いかなる大事業をもなしとげらるべく、目にもとまらぬばかりのいさゝけきものにても、日毎につもり行かば、つひには、滿庫の寶ともなりぬべし。實に、勤は身を立つるの基にして、儉は家を興すの礎なりかし。されど、世の人なべて、口には勤をときつゝも、其の身はおこたり、はた、儉をとなへながらに、おごるやからの多きぞ、わびしきや。あはれ、愼しみてもいましむべきは、このふたつのみちにてこそはあなれ。

（以下原稿到着順）

佐藤君子

おしなべて世の人は、おのが家をさまし、おのが身に、幸あれと祈らぬものは、よもあるまじ。されば人は、勤儉をつとめざるべからず。この心なからむか。いかに貴とく富みたる人といへども、遂には、人の軒下にたゝずみて行きこふ人の袂にすがり、數多の人につまはじきのはづかしめを受くべし。この時にいたり、口惜しさに夢なれかしと、神かけて祈るも、げにすべなき事ぞかし。我身に似氣なき衣をみにまとひ、あるは物見あるは遊山と、世の人のあざけるも、人の身の上と思ひつゝ、あるは惡の業ならずや、げに歎かはしき限なり。かゝる用なき黄金あらば、わび人にめみなば、よろこびなん。情は人のためならず、遂には、我身にむくいあるなり。ふるき諺にも、驕るもの久しからずと、めでたき言の葉になん。されば勤儉の二字は、ゆめ〳〵忘るゝ事なく、我れ人等こぞりて、おのが業をはげみつとめて、勤儉をまもりなば、大御代もいや榮ゆて　天皇のふかき御惠の片はしをだに報じ奉る事ともなりぬべし。いでや世の人、とつ國人に、我が皇國のめでたき名を汚されぬ心がけこそ、すべてあらまほしけれ。

河原芳子

人のこの世に處して、幸福をねがひ、希望をまたくせんと思はゞ、勤と儉との二つを外にして、こをかなふべき道やあるべき。勤と儉とは、家の寶なり。國の基なり。一國の盛衰も、一家の榮枯も、この二つを守ると、守らざるとによるのみ。しかはあれど、行ひ易くして、あやまりやすきは勤儉なり。あやまりやすく、行ひがたきも、また勤儉なり。あゝ勤儉の二字、其の用ひざまによりて、吝となり。卑となり。不德となり。不義となり。たゞ一歩のあやまりにて、あらぬ邪道に迷ひ入るもの。世をあげて、十中に八九はあらん。勤儉の美德、行ひがたくしてあやまりやすきかな。あゝ。

中澤千野子

世の進み行くまゝに、勤儉の美風、やう〳〵、地を掃はんとするこそ、げに嘆はしき事なれ。口は美味にあき、身は錦繡をまとひ、花に狂ひ、蝶にたはむれ、以て世にほこる。人またうらやみて、紳士貴婦人となし。偏に此に傚はんとするぞいと淺ましき。かゝる中に立ち、獨り身をつゝしみ、業をはげみ、よく勤儉の德を全うする、いともかたき事になん。さるを輕佻浮薄なる世の人は、思ひひがめて、彼は貪りてあくこと知らぬ吝嗇者なり。彼は孤陋にして、世の交際を知らぬしれ者なり、などゝあざけるは、かたはらいたき事になん。今や外國人も來り住み優れる者は勝ち、劣れる者は敗るゝとかやいふ。いとも易からぬ時なるに、目前の榮華に醉ひて、徒に美衣飽食貧富の差をも顧みず、外見を飾り、富貴をてらひ、以て彼等にほこらんかと始めこそあれ。前途如何になり行らんと思ひ至れば、いとも悲しき極みなり。あはれ、皇

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國の女子たらん者は、外に稀れなる紅梅の雪にみかける、其の操、いよ〳〵高く、いや清く、富貴を淡ます、奢飾に倣はず、同く勤儉の二字を守り、つとに起き、夜中にいね、小心翼々として、費を省き、身を節し、貧しきを助け、孤獨をあはれみ、家を富まし、國を益し、以て皇恩の萬分一に報いまつらん事をこそつとむべけれ。

木村菊子

世に大切なる物は、數多ありされど、勤儉の二字に越ゆるものはあらじ。砂も火となり、水も變りて湯となる、かげろひの暑を事ともせず、海水も氷らむばかりなる、ころつゆの寒き日をも厭みで、己がじゝ業にはげみてこそ、春のあしたに花を訪ひ、秋の夕べに光さやけく澄み渡れる月をみつ。親はらからと語り樂しむ折りもあらめ。かほど樂しめむも、勤なればこそあれ。されば、空とぶ鳥、水に住む蛙、あるは、千草にすだく虫と云へども、何れか業にはげまざらん。只その營にけぢめあるのみ。又、儉ほど、人を喜ばしむる物は、他にあらずなむ。熱に氷に勞を積み、果して得たる物どもを、空しくせで、其の時々に用ふればこそ、然あらむ。(かの蟻がきり〳〵すをいましめ諭させし等は)世人のなべて知る所なり。御國には、さる者無しと思ひしに、あはれ〳〵、座ながら幸福を求めんと望む者多しとか。げにかへりみざる可けんや。さるは蟻にだに劣るをや。

稲岡郁子

人生僅か五十年と、たゞ一口にこそいふべけれど、五十年の月日を過さんには、やすからぬことやおほからん。こまやかにいはゞ、こがねしろかねの不足なるより、苦しきものはあらざるべし。今更に云ふも殊更めきたることながら、およそ、此の世の事々物々は、此の一品の光澤なりと云ふも、すぎたるにはあらざるべし。されば、また、人誰か富を好まざるものあらんや。しかして、人に貧富の分るゝ所以如何。勤儉の二字こそ、まさしくそのもとゐたるべけれ。人々各々身にかない、分に應じたる職業を務めなば、などて乏しからん。されども、

いかに勤勉勞苦すといへども、今日の所得は、今夕方丈の食料と、消費し、かれての貯へなきときは、一たび不幸につまづくときは、終には、再びたつ能はずして、路傍にさまよひ、雨露をしのぐところさへなきに至るべし。是に於て、勤儉の要あるなり。一身一家の富は、み國の富なり。などて安逸に過すべけんや。恭儉之れ德なりのことば、よく〳〵味ひ來らば、人生の至快たる公益をはかり、慈善の業をなすも、己を持することさへ能はざれば、うべきにあらず。ただおのが身に、綺羅錦繡をかざり、花とながめらるゝを、つとめて、猥りに財をついやし、一時人の歡心を得んとするもの、あへてむを、家事家政にとゞめず、勤勉勞働は、必ず賤者のなすべき業なりと、心得ちがひをなしたる人、落花冬枯の期あらざれば幸なり。との思はあれど、おのが身に、行ひ能はざることこそはかなけれ。

齋藤はる子

行く水の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。淀みに浮ぶ泡沫は、且つ消え、且つ生じ、しばらくも止まることなしと、古人の云はれしが如く、年月の往き來、禍福の定めなきものは、實に浮世にぞありける。さるを世の人、之を察せざる者の多し。富榮えたる家に生れし人は、己が身に、露ばかりの不自由だもなきを以て、錦繡を裝ひ、美味を食ひ、いつまでもかくあるべしとなす。一旦星移り、勢變るに至らば、遂に身を委ぬるに所なく、路傍にさまよふに至る。又さなくとも、青年なるときは、己が元氣にまかせて財を費し、年老いたるときは更なり。病などに犯されたるときは、之を救ふ能はずして、人の手にかゝるものなり。かくの如く目前の快樂にのみ耽りて、永遠の計をなさざるのうたてさよ。彼の蜂蟻の如き小虫だも、なほよく之を知り、水無月の照はたたくをも忍びて、餌食をもとめ貯ふるにあらずや。さる類の人をば、萬物の靈長とは云ふべき。されば人たるものは、こを心にとめて、つとめて儉約すべきなり。こゝに注意すべきは、勤儉と吝嗇とを誤まらざるにあり。抑々勤儉とは、己がなすべき道を勤め、な

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るべく費用を節減するをいひ、吝嗇とは、理の是非をも辨へず、ひたすら財本を貯ひ、人をばめぐまざるを云ふなり。又世にはいさゝかなるものは、やくなしとて、打捨て置くものあり。これは大なるあやまりなり。彼の谷間より流れ出づる水も。末遂にあつまりて、大海原となり。風に迷ふ塵埃も、積りて山岳の高きを致すべし。よく／＼考ひ行ふべきことぞかし。

村田嘉子

世の中のうつりかはるこそ、よどみに浮ぶうたかたの如けれと、古の人もいはれしが如く、人の此の世にある一生涯ほど、かはりの多きはあらじ、昨日迄とみ榮ねてし人も、今日は食乞ふ身となり。今日貧しき人も、いちしかとみ榮ゆるに至るべし。これ勤儉といふ德を服すると、重ぜざるとによるなり。いかに鋭き劍にても、之をうちすておきたらんには、遂に錆を來すが如く、身に不白由なき人と雖ども、勤めはげまずんば、財を傾くるに至るべし。又いかに光りなき玉といへども、よく之を磨きなば、遂に人目まばゆきばかり光りを添ふが如く、日日、食に差支ふる人と雖ども、朝夕怠らず、勤めはげみなば、財豊かになりぬべし。されど利き劍をたのみとし、いたづらに物をきりたらんには、之をそこなふが如く、勤めて、多くの富をうるとも、儉約することなく、みだりに奢りたらんには、遂に財產を失ふべし。光りきらめく玉といひども、うちすておきたらんには、見る人なきが如く、勤めはげみて得たる多くの富も、儉約せざれば、忽にして消ゆくべし。勤儉は大切とはいひ、之をつとむる、其の中を得ざれば過度の勞をなして、其の身を害し、儉節其の宜しきを得ずして、吝嗇となり。人の笑を招くこともあるべし。よく心得て勤儉すべきにこそ。

河村君子

勤儉ほど、家政を整理するに必用なるものはあらじ。家政を整理するは、女子の一大責務なれば、勤儉こそ、女子のゆるがせにすべからざるものならめ。さるを、今の女子は、常の習ひとして、衣裳の美麗ならんことを、希ふ者なれど、こは輕薄の心より起るものにして、惡べきことなり。粗衣を着、身に行を謹み、心に錦をかざるたふとさよ。世には勤儉をたふとむあまり、吝嗇に陥ふるもの多く己れに奉ずるに薄きを勤儉と云ひ、人を恩むにうすきを吝嗇とは云ふなり。吝嗇は素より忌むべき事なりと雖も、其の反對は奢移にして、其の弊は一層大なるものあり。うべ、吝嗇と奢移との二つを離みて、其の中を採りしものこそ、勤儉とはいふなれ。むかし、松下禪尼は、こを守りこを行ひて、家政をとゝのへ、儉德の名を世に殘しぬ。げにや勤儉は、家政を整理し、女德をますの經とも緯とも謂ふべくなん。

德永廣子

人の國家を富ますは、たゞ人々のきんけんの心による。何事も堪へ忍びて、業をつとめはげみ、父母夫などの、實業をはげみたまはば、かれの助手となり。女の身にかなへる裁縫には、よくつとめ衣食住に心をつげて、つゞまやかにせば、身を修むる道にもかなふなり。されども、あまりけんやくをおもひて、りんしよくにながれやすきものなれば、かまへて、かの二道を心すべきになん。

佐々有隣子

人は儉なるを以て尊とす。よりて出納の金錢をはじめ、朝夕の食物、春秋の衣類、なにくれとなく勤めて、意を用ひ、動きて體をなれるものを、女の道を得だるものとこそはいふべけれ。あはれ世にたちて、人に用ひられ、信ある人は、皆人にすぐれて、儉ならざるはなく、衆にさき立て、勤めざるはなし。天下の姉妹たちよ。勤めよや朝夕に、儉なる事を三省せよ。島國の諸孃等よ。

松田春枝子

節儉朴素は、人の美德なりとや。儉約なれば奢らず。をこたらずして、其の德を養ふべし。大かたの人の習ひ、つゝまやかなるを弛べて、奢らん事はいと易く、奢れるを止めて、つゝまやかにする事はいと難し。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

されど、儉約のみかは。日毎勉めさらましかば、何事も成らざらんかし。少うして、勤苦せられば、老いて辛苦多し。少うして勞に服すればこそ、老て安逸すべけれ。此の勤と儉との二つの者、相待ちて、いさかんはうなる道になり。勤儉を守らざりせば、いみじう富みたりといへど、行末は貧しきにおち入らん。いと貧しくありとも、勉めて怠らざれば、いかに榮ね行くらん。されば、此の道を行ひてこそ、世の公益、あるは不時の變、あるは慈善なんど、とりどりに及ほす事を得べけれ。明日にゆづらりまほしき事ありとも、今日のみと思ひ、寸陰も惜しみて、勉められよかし。身を立て家を治むるは、勤儉に若く物はあらじ。女たるべきものゝ貞操につぐ物は、此の道になむ。

村上操子

世の中に、尤尊ふべきは、勤儉の二つなり。勤ならざれば、物なりがたし。儉ならざれば、なるといへどもたもちがたし。女は、ここにこの德をそなへずは、尊きも卑きもねあるまじくなむ。いかに夫たるもの勤たりとも、婦たるもの、儉の心あらずは、などかは其の家の榮をたもつべき。身をたて、家をおこし、之を大にしては國をたもつも、此の二つによらざれば能はず。實に心にきざみて、わするべからざるは、儉の二つといふべし。

宇高まつ子

勤儉は、富國の基にして、一家を濟むべき、ことに女にありては、たふとむべき事になむ。然るに、近き頃の世の有樣を見るに、日に月にはなやかにのみなるまさりて、女のつとむべき裁縫、炊爨の業を賤しみ、甚しきにいたりては、最も重きを置くべき、兒女の教育をさへ、心なき婢僕の輩にうちまかせて、かへりみず。身は、常に絹布をまとひ紅粉をよそひ、歌舞管絃をのみこととして、少しもあやしまざるのみか、尙こをよしとして、これにならはん事をほりする人のみ多きこそ、いともくうたてけれ。あはれ、世の人達よ。かゝる淺間しき風潮にならむ事なく、奢侈をいましめ、冗費を省きて、各々其の業を勤めはげみて、安全堅固なる家庭をつくり、富國のはしともなり給はん事を願ふになん。

●女鑑月次兼題歌文書式投稿

歌書式

題

住所

姓名

…………………………

…………………………

…………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所

姓名

……、……、……。……、……。

……、……、……、……、……。

……。……、……、……、……。

……、……、……、……、……。

……、……、……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、片假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總べて沒書とす。

○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三輪田眞佐子著

第七版

女子の本分　全

定價　金二十五錢　郵稅　金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女が踏むべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸嬢が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さむ、

目次

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　國光社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

▲見よ女子必讀の好雜誌▼

女學雜誌 姬百合

第壹號 十一月二十五日發行

毎月一回廿日發行
定價一冊拾錢六冊五十五錢十二冊壹圓
郵稅不要郵劵代用一割增

●毎號諸大家の趣味津々たる好文字を滿載し、諸名家の揮毫に係はる大判風俗畫及內外勝地の、精巧美麗なる寫眞版數葉を挿入す
●毎號懸賞歌文を募集し專門各大家の綿密なる撿閱を乞ひて投書欄に連載す

論說
美の女性……松下大三郎
米國女學生……華族女學校教諭女子高等師範學校教授 津田梅子

學藝
嵯峨野の秋……國學院講師女子高等師範學校教授 關根正直
山家集摘釋……田口重男

史談
節女おとま……佐々木よし子
瀧鶴臺の妻……なみのや

家庭
古代の飲食……巴女

文苑
ちりのちまた……國學院講師 落合直文
はしき子……第一高等學校教授 中村秋香

月の譜……栗島狹衣
歌反古……國學院講師 落合直文
冬の歌……御歌所長 高崎正風
漁歌牧笛……田口春塘

小說
ゆうやみ……大塚楠緒子
一片落葉……月の桂のや

叢談
緬甸の女子風俗……石田春雨
松籟潮聲……山本露葉

時言
(時論)始めて江湖に見ゆ○女子の見識○帝國婦人○智を求めよ○家庭の圓滿○理性○文明の婦人○不完全なる夫婦(時報)數十件
○新年發刊大懸賞歌文募集廣告

發行所 東京市四谷區右京町二十八番地 姬百合社
大賣捌所 東京堂 上田屋書店 勉強堂 大阪 吉岡平助

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三版

家庭の鑑

菊版美本 全一冊

定價金拾八錢 郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける**忠孝節義友愛貞操**等の事實を詳叙せるものにして**何々血を吐き言々人の肺腑を貫き**讀むものをして**感奮興起感極つて殆泣かしめむ**とするものあり書中收むる所のもの或は**勅定の褒賞を賜り**或は地方の美事として旌表せられたるものなれは皆是人の**子弟婦妻の摸範に供すべき事實**なり之に加ふるに**婉麗哀痛の筆**を以て事實を精密に寫したれは其**情味の津々**たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の**教育家父兄及子弟婦妻の坐右**には一日も此**可憐の書册**無かる可らず**家庭及學校**にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地 (電話新橋八八) 國光

標註 雅文消息集 全

菊版美本
全一冊
定價金廿五錢
郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艷麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

伯爵佐野常民君題字
子爵品川彌二郎君題字
子爵松平乘承君序文
華族女學校幹事淺岡一君序文

藤井玄溟著

明治の女傑
慈善の泰斗
瓜生岩

定價一冊代金貳拾錢郵税四錢郵券代用一割増

世に慈善を以て名あるもの多からざるにあらず然れども婦女の身にして能く有髯の男子を凌ぎ之が旗幟を翻すものは甚少し

瓜生岩女は渺たる一婦の身を以て畢生七十餘年間一日の如く社會の爲に國家の爲に粉骨碎身し以て**天下百世の龜鑑**を垂れしもの岩女を推して**當代の女傑**とし**慈善家**の**泰斗**となす豈過稱ならんや**本書**は其畢生を叙せし者なり**天下の人士**一度本書を讀まば貪婦も廉に惰夫も猶起つべし**讀め！本書を讀め！請ふ本書を讀め！**

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 日本赤十字發行所

社告

〇代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直の事送
〇郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事〇別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に書郵送料添附の事〇未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊前金（三ヶ月分）	十二冊前金（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
拾錢	五十五錢	壹圓	
全國無郵送料			

明治三十二年十二月四日印刷
明治三十二年十二月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛

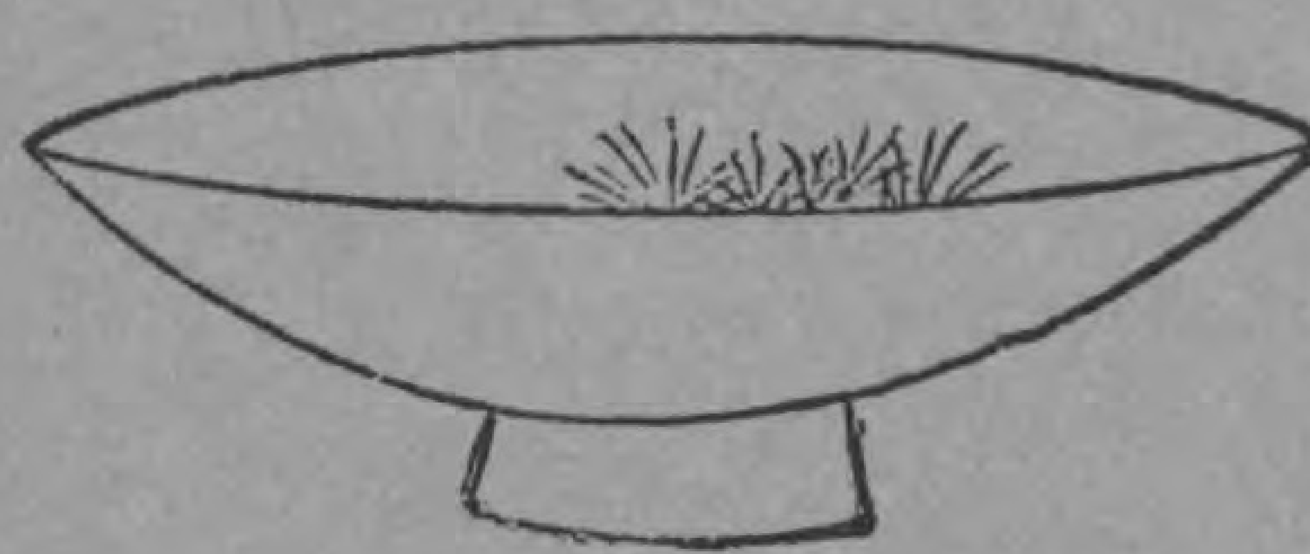
東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 並木良雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
（電話番號新橋八八）國光社

Google

盃類製作廣告





◎金盃径三寸

品位	自価	至価
純金	百八十五圓	貳百三十圓
廿二金	百七十圓	貳百五圓
二十金	百五十五圓	百八十圓
拾八金	百二十圓	百五十圓
拾四金	九十圓	百十圓
九金	五十八圓	七十圓
七金	四十八圓	五十五圓

◎同径二寸八分

品位	自価	至価
純金	貳百八十五圓	參百四十五圓
廿二金	貳百六十圓	參百貳十圓
二十金	二百六十圓	參百貳十圓
拾八金	二百圓	二百五十圓
拾四金	百四十五圓	百八十圓
九金	九十二圓	百十圓
七金	七十三圓	八十五圓

◎純銀盃

径	甲価	乙価
径二寸五分	五圓五十錢	五圓
径三寸	七圓二十錢	六圓五十錢
径三寸五分	九圓七十錢	八圓七十錢
径三寸八分	十二圓四十錢	十一圓二十錢

◎同三組（最下層ノ径中小之レニ準ス）

径	甲価	乙価
径二寸五分	十五圓五十錢	十四圓五十錢
径三寸	十六圓七十錢	十五圓廿錢
径三寸五分	廿圓八十錢	十八圓八十錢
径三寸八分	二十六圓	廿三圓五十錢

以上何れも服紗及桐箱を添ふ

◎輕金盃

径	甲価	乙価
径三寸五分	壹圓七拾錢	壹圓貳拾錢
径三寸八分	貳圓貳拾錢	壹圓七拾錢

◎同三組（最下層ノ径中小之レニ準ズ）

径	甲価	乙価
径三寸五分	四圓八拾錢	四圓貳拾錢
径三寸八分	六圓五拾錢	五圓五拾錢

（市外遞送料金貳拾錢）



妙技一等賞牌

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪七百卅三）

天賞堂

天賞堂小川町出張所　東京市神田小川町（電話番號本局二一六〇）
天賞堂橫濱出張所　橫濱市尾上町五丁目（電話八七六）
天賞堂大阪出張所　大阪市心齋橋北詰（電話東七三三）
天賞堂名古屋出張所　名古屋市玉屋町二丁目十七番戶
天賞堂廣島出張所　廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂熊本出張所　熊本市上鍛冶屋町十番地
天賞堂長崎出張所　長崎市今鍛冶屋町（電話番號二二九）
天賞堂福岡臨時出張所　福岡市橋口町榮屋方
天賞堂小樽臨時出張所　北海道小樽色內町越中屋方

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所ヘ東京國光社印刷所）

Digitized by Google